

フリアン・カロン

希望はあるのか？

見つけることの魅力



フリアン・カロン

希望はあるのか？

見つけることの魅力

イタリア語から翻訳: Marcia Akemi Kaida/ Tomoko Sadahiro Proprietà letteraria riservata

© 2021 Fraternità di Comunione e Liberazione

導入

《死といのちとの戦い》¹。この言葉によって、復活祭のキリスト教典礼は、祝っている出来事の異例さを表しています。その異例さは、生と死の間には実際の戦いはなかったという事実によって強調されます。これはただの言い回しです。なぜなら、誰が勝者になるかはすでに事前にわかっているからです。前もって結果がわかっているものを本当の勝負と言えるでしょうか？

そのことに気づくために最終日まで待つ必要はありません。若者はすぐにそれに気づきます。最近、オンラインで高校生のグループと会った時にそのことを確認しました。彼らは最終学年で、すでに無が自分たちの日々を覆ってくる兆しを感じています。それは死の前触れのようなもので《わたしの人生をゆっくりと色あせさせています》、《最初の熱意はしばらく前から薄れていて、もはやわたしの中にあつた勢いを見出せません》、《わたしはすべてに無気力です。何にも心を動かされることなく、何にも魅力を感じません》と言います。にもかかわらず彼らは諦めていません。逆説的に言えば、兆候を鋭くとらえることこそが、彼らのうちに生・いのちへの要求を再燃させるのです。彼らは、わたしたちと同じように、その人間性のDNAに刻み込まれた要求を持っており、それは《何が本当に退屈や無気力を打ち壊し、わたしを再び生き生きとさせてくれるのか》という、抑えることのできない問いとして爆発します。若いながら彼らの中には、生・いのちへの渴望と、すべてが無に終わることへの恐怖との間の明確な戦場があります。彼らと違ってわたしたち大人は長く生きていますので、どんな試みもとても脆弱であること知っています。結末は告げられ、死は常に勝利するのです。そのため、戦いについて話すのは婉曲な言い回しを使うのと同じことだと言いました。

このような背景の中で、復活の典礼の意味と大胆さを捉えることができます。《たしかに、キリストが復活しなければ、「虚無」が勝利を収めたことでしょう。キリストとその復活を取り去るなら、人は救われず、あらゆる希望は幻想であり続けます。しかし、まさに今日[2021年復活の主日]、主の復活の知らせが力強く湧き起こります。この知らせこそが、懐疑論者が繰り返し述べた問いに答えます。この問いはコヘレトの言葉にも記されています。「見よ、これこそ新しい、と言ってみても、それもまた、永遠の昔からあった」(コヘレト1,10)。わたしたちは答えます。いいえ、復活の朝、すべてが新たにされます。「死といのちとの戦いで死を身に受けたいのちの主は、今や生きて治められる」(復活の続唱)。これこそが新しいことです。この新しいことが、それを受け入れた人の生涯を造り変えます》²。

キリストの復活がなければ、真の戦いはありません。《事実》の告知は、わたしたちの中で繰り広げられる戦いを前もって決定するのではないことに注意しましょう。むしろ最初に言った意味での戦いを実際に可能にし、その戦いへ駆り立てるのです。

ですから、理性と自由を駆使することを強く求める現代人にとって、今もキリストの復活の告知は信頼に値するものなのかと自分に問う必要があります。この問いに対する答えは、歴史やわたしたちの個人的な経験に基づく必要があります、そこから初めて告知の信頼性の有無の根拠が浮かび上がってくるのです。生活の中で、具体的な経験の中で告知が信頼できるものであることが裏付けられなければなりません。

矛盾のように感じられるかもしれませんが、まさにこの時代、パンデミックによって、この確認をする

¹ ローマミサ典書、復活の続唱 «Victimae paschali»

² 教皇ベネディクト16世、復活祭メッセージ(ローマと全世界へ) 2009.4.12 カトリック中央協議会

ための好機がわたしたちに与えられたのです。実際、わたしたちは「存在」と「無」との全面的な衝突の場に居合わせています。その範囲と規模において並外れた戦いは、目に見える部分としてメディアが絶えずわたしたちにニュースを提供している（死亡者数の統計、集中治療室のひっ迫状態、経済の困難）戦いと、より隠された個人的な部分として、恐怖によってあらわになる、孤独、脆弱さに伴い、強められたと思われていた確信を揺るがす問いの浮上による戦いです。それらの問いは、不確さに支配されているこの時代に、もっとも一般で挑発的な‘希望はあるのか’という問いに要約することができます。

この問いは、まず、CL運動の大学生会の黙想会のテーマとなり、その後、成人向けのコムニオーネ・エ・リベラツィオーネの兄弟会の黙想会のテーマとなりました。本文を読んで頂ければわかりますが、その黙想会への貢献として、自分に問いかけられたと感じた多くの人々が手紙や証言を送ってくれました。

現実の厳しさの衝撃は、わたしたちの人間としての要求をよりはっきりと浮かび上がらせました。わたしたちは皆、何らかの形で、わたしたちの人生にとってこれほど決定的なものはない希望についての問いに立ち向かっています。もしわたしたちがこの問いに対する適切な答えを見つけられないなら、死がダモクレスの剣のようにわたしたちのあらゆる人間としての経験、たとえ真の経験であっても、特にもっとも重要な経験を脅かすのをやめることはないでしょう。

生きることへの情熱のために、つまり、死の恐怖つまり、意味のない空しさに押しつぶされそうな日々を過ごすことに甘んじないために、わたしたちは、生きていながらも人生を失うことのない男女として、どんなことも避けず、近道をする(労苦を省く)のではなく、この問題を直視することにしました。ドン・ジュッサーニは何年も前に、《わたしたちが一緒に集まるのは何のためだろうか？すべての人間が置かれている無の状態を、友人たちから、そして可能であれば全世界から引き離すためだ》³と書いていました。これから続くページは、彼の熱意に動かされて執筆したものです。人間であることを表現する期待への信頼できる答えを発見する魅力に心を開いたまま、自分をごまかさず、生・いのちへの望みを捨てないよう助けるために。

³ L. Giussani, «Messaggio al Pellegrinaggio a piedi Macerata-Loreto», 14 giugno 2003, *Tracce-Litterae communionis*, n. 7/2003, p. 105 逐語訳

1 章

《この危機より最悪なことは、これを無駄にしてしまうという悲劇のみである》

《この危機より最悪なことは、これを無駄にしてしまうという悲劇のみである》¹ 教皇フランシスコのこの言葉は、わたしたちに何が起こったのか、この 1 年間何を経験してきたのか、その認識を促すものです。

1. 現実との衝突

誰もが無関心ではられないこの挑発に立ち向かうために、わたしたちは最初から、ジュッサーニの言葉に含まれる‘しごと’の仮説²を課題にしました。それは、《現実とあまりぶつからずに生きてきた人は努力する機会が少なかったであろうから、自己意識に乏しく、自分の理性の振動と力をあまり感知していないだろう》というものです。ジュッサーニの言葉を借りれば、わたしたちは、何かを否定したり押さえつけたりせず、《たゆまず熱心に現実を生きる》³ように招かれているのです。実際に単に状況の影響を無視したり避けたりすることができないでいることと、その状況がもたらす挑発を受け入れて生きることはまったく別のことです。

この仮説の確認を課題とするなら、新型コロナウイルスが引き起こしたような油断のならない状況でさえ、逆説的に、しばしば曇らせられてしまう自己認識を高め、理性のエネルギーと振動をより強力に感知する機会となり得るでしょう。つまり、意識、理性と愛情としての人間を目覚めさせる機会になり得るのです。

何が起こったのでしょうか？1年以上経った今、わたしたちの内と外で何が起こるのを見たのでしょうか。

多くの人にとって、ウイルスの拡散の 2 つの波に対応して、パンデミックに直面したわたしたちの経験の 2 つの局面、2 つの様相が浮き彫りにされたようです。第 2 波に対して《わたしたちは第 1 波に比べて、準備不足ではなかったし、未熟でもなかったが、より疲れて、落胆し、怒りっぽく、惨めな状態にあった》⁴とアントニオ・スクラーティ氏は述べています。第一段階で起こったことを機に、成長し、意識を高め、自分自身のより深い実質を成熟させることができなかつたかのようです。そのことは、第 2 波で浮き彫りになったことから推測できます。《本当のトラウマは過去ではなく未来にある》とマッシモ・レカルカーティ氏が指摘したように、より強い弱さの感覚と不確実性と不安の広がりに見られます。彼は第 2 波について《皆が信じていた日常の回復という思い込みを破壊しつつ、[...]大きな不安の種をまき散らした。第二期は、悪が死に絶えたのではなく、わたしたちの中にまだ生きていることを見せているから、第一期よりもトラウマは大きい。夏に高まった期待は裏切られた。この失望感が今日広く行き渡って

¹ 教皇フランシスコ、2020 年 5 月 31 日聖霊降臨説教 逐語訳

² J. Carrón, *Il risveglio dell'umano. Riflessioni da un tempo vertiginoso*, Bur, Milano 2020 参照 逐語訳

³ ルイジ・ジュッサーニ 宗教心 ドン・ボスコ社 2007 年、p.185

⁴ A. Scurati, «Un Natale severo (e di speranza)», *Corriere della Sera*, 20 novembre 2020, p. 11 逐語訳

いる》⁵と言います。

わたしたちはある時から、現実を支配できると錯覚し、見かけ上安全性の高い状態で生活することに慣れていました。その錯覚に一石を投じたのが、ウイルスの大流行です。しかしながら、第1波が去った後は、新たに状態を自分たちが意のままに動かすことができるようになると確信するのに、通常の生活に戻れると確信するのに時間はかかりませんでした。こうして、皆多かれ少なかれ夏を楽しみました。しかし、《人は挑戦を受けたり、賭けに出る必要に迫られたりしない限り、自分が何を知っているのか、何を知りたいと望んでいるのかわからない》⁶のです。

第2波は、その夢や思い上がりを再び打ち砕き、現実が決定的にコントロールできないことを思い知らされました。チェーザレ・コルナツジャ氏は《死は腫瘍や事故のように偶発的に起こるものであり、感染症は克服されていると考えられていたが、目に見えない未知のもの、そしてどう対応していいかわからないものが我々を殺している。不安はここから生まれる》⁷と述べています。

《未知の感覚》に比例して、《将来への不安》も増大したのです。第2波の初めに、エドガー・モリン氏も《不確実性》という言葉で錯覚の終わりを捉えました。《わたしたちは強大な不確実性の時期に入った。一人ひとりの人生、すべての国、そして地球全体に関わる危機の多次元的な特徴[…]》を強調しながら、《わたしたちは皆、無知、未知、狂気、理性、謎、夢、喜び、苦しみ、そして不確実性に満ちたこの冒険に参加しているのだ》⁸と言います。安心感を与えようとする周囲の説明、科学的な発見や製薬会社の取り組みに伴われたプラス思考にもかかわらず、わたしたちの中には脅威的な苦悶が潜んでいます。

1年以上経ち、幸いにも解決の兆しが具体的になってきているにもかかわらず、いつまで続くかわからない状態を注視し続けています。一刻も早く事態が終息することを願ってやみません。しかしながら、ここで描いてきた人の生活や社会生活など、世界中の生活を広範に巻き込んだ状況は、人間の存在に伴う《希望はあるのか》という問いをわたしたちの生活の奥底から浮かび上がらせました。

《希望はあるのか》という黙想会のタイトルは、12月に行われたCLの大学生会の黙想の時と同様に、わたしたちの中にも、また参加するように招かれた人々の中にも、反響がありました。《あなたたちはいつも、わたしの中にある何かに触れる点を突くのね。このテーマは決定的だわ》とある人が黙想会に招待した同級生が言ったそうです。また別の人は《このタイトルはわたしの中に響き、この時期、ずっと寄り添ってくれた問いです》と言いました。

この問いは、日常生活の労苦から生じます。《昨年10月にパンデミックの状況が再び悪化しようとし、聞こえてくるどのニュースもその猛威を伝える中で、わたしのうちに“わたしは物事が良い方向に進むという希望を持っているのだろうか”という問いがはっきり現れました。そして、悲しいことに、“分からない”と答えてしまう自分がいました。多くの人々が亡くなり、1年経った今でも新型コロナウイルスで人が亡くなり続けています。わたしやわたしの夫の友人など、身近な人たちが経済危機の影響を大きく受けています。それに加えて、特に仕事での辛い出来事や大きな苦難は、“物事が良い方向に進むという確信はもはやない。すべてが反対のことを言っているように思えてならない”とわたしに言わせました。わたしのこの問いには、物や人間関係、そして最愛の人たちが無に終わってしまうのではないかという不安

⁵ M. Recalcati, «Il trauma della seconda ondata. Se cresce la paura del futuro», *la Repubblica*, 31 ottobre 2020, p. 28 逐語訳

⁶ ソートン・ワイルダー、三月十五日カエサル最期、志内一興訳、みすず書房、東京 2018年、pp. 72-73

⁷ C.M. Cornaggia, «Ansia, paura, insicurezza: ecco quel che ancora non sappiamo», intervista a cura di Paolo Vites, *ilsussidiario.net*, 8 novembre 2020 逐語訳

⁸ E. Morin, «Il potere dell'incertezza», *la Repubblica*, 1 ottobre 2020, p. 27 逐語訳

も表れていることに気づきました。最初は、この疑問を持っていることを自分で認めることに抵抗がありました。正直、恥ずかしくてたまりませんでした。そして、わたしの人生において、もっとも重要なステップは、不愉快で、とんでもない深刻な問いから生まれてきたことを思い出しました。わたしのこの疑問を見つめることをもっとも“後押し”してくれたのは、あなたでした。そして、あなたが黙想会のタイトルに“希望はあるのか”を選んだことを知ったとき、わたしはあなたを心底身近な友だと感じました。“この問いかけを自分自身にするだけではなく、他の人にも問うことを恐れない人なのだ”と思いました。だから、あなたを友人、同時に父のように感じました。自分自身を見つめるのを恐れず、持っている問いを好意的に受け止めることを助けてくれたからです。月日が経つにつれ、この質問はますます心を焦がすのですが、わたしは今でもどう答えていいかわかりません。ですから、わたしはあなたに訊ねます。答えを見出すために何が助けとなるのでしょうか?》とある友人が書いてきました。

最初の助けは、多くの人の手紙にあったように、問いそのものから与えられます。《希望についての問いは、それ自体の力強さに心を打たれます。問いが再びわたしたちを部分的な見方から解放し、別の何かに目を向けさせてくれます。その衝撃に応じるか、鎮めるかはわたしたち次第です。問いはこれまで以上に適切なものであるように思えるので、この機会を無駄にたくありません》。別の人は、《今すでに提案された問いに取り組むことで、わたしは起こることに対して、心を開いてより注意を払い、日々を過ごしていることに気づきました。》と強調しています。またもう一人は《問題は問いがわたしたちを休ませることなく、適切な場所に陣取ることです。“希望はあるのか”この問いを受け入れることは戦い、日々の生活から追い出さないようにすることは戦い、嘘をつかないようにすることは戦い、つまり、結局は希望がないと自分に言いながら、便宜上希望があるように振る舞うことは戦いなのです》と指摘しています。

2. 起ったことの前での態度

各自、人生・いのちをどのように見つめ、向き合っているかを心に留めながら自分自身の行動を観察し、誰にも減じられず投げかけられた問いに答えるように求められています。そこでまず、起こったことに直面した時、自分や他人のうちに見られた態度を振り返ってみましょう。他の人の態度もある意味ではわたしたちのものでもあるからです。そうすることで、投げかけられた問いが人生・いのちに関わることを、そして、答えるための道順を、より明確に意識するのを助けることができるでしょう。

a) 事実を削除しようとする誘惑

昨年12月、アメリカの有名な雑誌は、表紙を《2020》に捧げ、黒の大きな文字で数字を書き、それを大きな赤い十字で消し、そのすぐ下には、小さな文字で《史上最悪の年》と書きました。過ぎた1年を削除するかのよう、象徴的な×マークが置かれたのです。しかし、わたしたち皆が知っているように、300万人の死者とパンデミックが引き起こした危機—その最悪の影響はまだ経験していないかもしれませんが—は、取り消すことはできません！ステファニー・ザカレック女氏（アメリカの映画評論家）の社説は《これはあなたが二度と見たくない一年の物語です》⁹という一文で始まります。

自分を追い詰め、人生に意味を与えるものは何かと問うことを余儀なくするものを消し去ろうとする誘

⁹ S. Zacharek, «2020. The Worst Year Ever», *Time*, 14 dicembre 2020 逐語訳

惑は常に潜んでいます。《僕の人生に希望があるかどうかは、新型コロナウイルスによる隔離が始まったこの21日間、毎晩眠りにつく前に自分自身に問いかけてきたことです。大変な日々でした。この病気は僕にとってかなり苛酷なものでした。ですから、最初の段階での答えは素っ気ないもので、“いや、希望はない”でした。この期間は、取り消すべきものでしかありません。朝起きて、食事をし、シャワーを浴びて、仕事をして、またベッドに戻り、次の日も同じことを繰り返して、生き延びていました。明日になれば、僕は自由になるでしょう。けれども、重苦しい“しかし”が残ります。しかし、この21日間の生き方は、僕という人間をリセットしてしまったのではないかと問うのです》と、ある大学生が書いてきたように。生き延びようとしたというのが多くの人々の経験に見られる傾向で、最悪の事態が終わったらすぐに、その期間を取り除き、自意識が弱まるという結果によって、自分自身の将来に対する疑念が生じるということです。

また、目を閉じようとせず、忘れようともせず、逆に状況を無駄にしたくないと思った人もいます。《この一年はこれまでになくわたしにとって自分がいかに弱く制限されているかに気づく機会でした。けれども、このような感情がわたしにとって悪いものであったとは言えません。それどころか、わたしは自分以外の、自分で作り出すのではない完全なものに、状況や自分に左右されることなく、持ちこたえる何かに人生・いのちを委ねる必要があることを発見させられました！》

b) 悲しみと恐れ

これまで、自分自身に認めたことがなかったかもしれない感情、物事が好ましく運ぶことに安心して自分自身に問いかけたことがほとんどなかった多くの感情が、今回抑えきれないほど執拗に表面に現れてきました。スペインのジャーナリスト、サルバドール・ソストレス氏は《わたしは初めて友人と失望や悲しみについて話しました。わたしたちは初めて、何と言えればいいのか、何をすればいいのかわからず、睡眠も十分に取れないため疲れ果てています。そして、わたしたちは今まで自分たちの力で何かができると信じて疑わなかったことを実感しています》¹⁰と書いています。

わたしたちの中にすでに存在し、ベールに覆われ、生活様式に守られていた違和感が、社会的リズムが突然断たれたことによって浮かび上がってきたのです。そのため、多くの人々のうちに、自分自身と自分の運命がほぼ無であるかのような陰気な感情が根を下ろし、台頭してきています。それは、未来に抑圧的な影が投げかけられているかのような感覚で、カルメロ・C・イリバルレン氏（スペインの作家）の《開いた窓から高速道路を見ながら考える/トンネルの手前の最後の区間で車が点滅しているのを。/ほかでもなくこれが人生だと思った。/スピードが速いか遅いかの違いだけで/影に向かうかすかな光のまばたき》¹¹によく表されています。だから、人生は闇に向かう旅でしかないのでしょうか。速さが違うだけなのですか。

自分自身や自分の将来に対する恐れは、脅威の認識や自分の弱さの発見を強いられたことと結びついて、多くの場合、家庭内にまで忍び込み、もっとも身近な人間関係にまで影響を与えています。作家であり脚本家のフランチェスコ・ピッコロが《パンデミックが起こるまでは、少なくとも、わたしに対して恐れがあったのは、わたしの子どもたちだった。[…]今は[…]本能的に彼らに近づかないようにしている。

¹⁰ S. Sostres, «La próxima vez que me muera», ABC, 24 settembre 2020 逐語訳

¹¹ K.C. Iribarren, «Hacia la sombra», in Id., *Seguro que esta historia te suena*, Renacimiento, Salamanca 2015, p. 42 逐語訳

息子が同級生を誘って勉強することがある。わたしはほとんどの場合、その同級生が帰った後に家に帰るようにしている。[...]わたしの娘はポーニャにいる。彼女から電話がかかってくることはない。それは、わたしが恐れおののいていることにショックを受けたあまり、電話をかけると感染するとわたしに思われるのを恐れているからである。[...]時々、自分がテレビのシリーズの中にいるのではないかと思うことがある。[...]毎日走ったり、叫んだり、外出したりする息子が家の中にいることでまったく安心できない。これがコロナウィルスによって新たに生み出された世界中のどの人間よりも自分の子どもを恐れるという、歪んだ不自然な感情のもつれである》¹²と告白しているように。

c) 死の恐怖

何に対する恐れのことを言っているのでしょうか？致命的な結果を招くこともあるので、感染することだけでなく、死に対する恐れです。わたしたちが巧みに隠し、放逐した死が、再びあらわになったのです。現実とメディアのシーンを大々的に占めることによって、社会的な潜在意識の中で、死は、今だに起こりはするものの、克服されるか、少なくとも限界を定められるであろう単なる不慮の事故や偶発的な災難とは見なされなくなりました。このことを指摘するために、エスプレッソ誌は《時の人》2020年に《死と生》を選びました。鉛色の空の下で赤ん坊とチェスをしているフードを被った死神の“写真”の表紙の下部には《終末の恐怖は経済と政治のシステムを狂わせた。そして、わたしたちの日常生活を》という要約文が書かれています。そして、社説には、《文化によって取り除かれていた死は、[...]パンデミックの年に中心に戻された》とあります。少し先には、死への恐れは逆に不思議な予感、《死を恐れるということは、わたしたちの個人的な存在を超える何かがあることを知っていることを意味する。ある「目的」が。そして「後継者」たちが》¹³という予感をももたらすべきだと言っています。マッシモ・カッチャーリ氏は彼の記事の中で《このことを教えてくれるのはレオパルディである[...]人生・いのちが本当に価値のあるものであれば、つまり、常に有限の存在を超えた何かに到達しようとするものであるなら、人は死を恐れることなく、それを生きる》¹⁴と指摘しています。そして、死を生きることで、心の奥底の問いが再び目覚めるのです。

d) 深遠な問いの覚め

ヘッセル（ユダヤ人の思想家・哲学者）は《“人間とは何者か”という問いに対する最初の答えは、「人間とは、自分自身について問いかける存在である」。このような問いかけをすることで、人間は自分が人格であることを発見し、その問いの質が自分の状態を明らかにする》¹⁵と述べています。人間は、自然界のうちで自分自身について、自分の意味、自分の起源と運命を問う自然のレベルです。《なぜわたしはここにいるのか？ わたしの存在にかかっているのは何か？この問いは、いかなる前提からも導き出されるものではなく、存在とともに与えられるものである。》¹⁶ しかし、自分の人生の意味を問うことは、死の

¹² F. Piccolo, «Maledetto virus mi hai insegnato ad avere paura dei miei figli», *la Repubblica*, 1 febbraio 2021, pp. 12-13 逐語訳

¹³ «Persone dell'anno. La morte e la vita», titolo di copertina de *L'Espresso*, 20 dicembre 2020 逐語訳

¹⁴ M. Cacciari, «Per amore della Vita», *L'Espresso*, 20 dicembre 2020, p. 17 逐語訳

¹⁵ A.J. Heschel, *Chi è l'uomo?*, SE, Milano 2005, p. 42 逐語訳

¹⁶ 同上 逐語訳

意味を問うことと切り離すことはできません。

この劇的な年の挑発の大きさに打ちのめされた人は、《ふつう》と言える時であればおそらく免れていたであろう問いが、自分自身の中に、自分の意識の中に、現れるのを避けられなかったでしょう。しかし今回は、世界的であるという特徴を持つ危険のために、脆弱さ、孤独、苦しみ、死が、わたしたちや身近な人の身に、より執拗に、より直接的に届きました。このような状況は、日々の麻痺状態から皆を目覚めさせました。存在に関わる問題の重大さは、他の人々の楽しい生活を損なおうとする者の誇張のように思われ、しばしば低下させられるからです。この気泡は、特に第2波の到来ではじけ、クロードルが言うように《苦しみは、わたしたちに意識を持つようにと招く攻撃である》¹⁷ことを思い出させます。

イニャーツィオ・カルバホーサは、司祭としてマドリードの新型コロナウイルス専用の病院に5週間駐在し、多くの人々の生と死の“特別な証人”としての経験を、《わたしが目の当たりにしたのは、わたしの中で戦った。それがわたし（の心）を傷つけた》と日記に記しています。彼は何を見たのでしょうか？多くの患者の中には、生後24時間の女兒と、亡くなったばかりの女性エレナさんがいました。彼は、《エレナ？エレナ、どこにいるの？1時間足らずの間に誕生と死という人生の両極が。2極のうちの1つを消してしまいたいという誘惑に駆られる！そして、両極を維持し“あなたが顧みてくださるとは人は何ものなのでしょう？”という問いに自分を開くのは、理性にとって何という勇気が必要であり、何という挑戦なのだろう》と彼は自問します。そしてその病棟に駐在し、人々に寄り添った一か月後、《この期間、わたしの理性と愛情・愛着は、認識に関わる、痛みとは何か？死とは何か？そしてその結果として、人生・いのちとは何か？という問題に挑発された。わたしは毎日、病気で苦しみ、死んでいく人々の前でこれらの問いを直視しなければならない》¹⁸と記しています。

この時世に自分を閉ざさなかった人は、自分でもその存在に気づかなかった心の奥深い弦が振動するのを感じたことでしょうか。もしかしたら、ふつうの日常を取り戻そうとして、すぐにそれをもみ消した人がいるかもしれません。しかし、たとえ一瞬ではあっても、その反動に気づいたはずです。ほとんど無に等しい小さな種のように、その人にとって、人間性の目覚めの始まりがあったかもしれません。《困難を免除されなかったからこそ、わたしにとって2020年は思いがけなく自己の目覚めの年となりました》と先に述べたように。どれだけの人がこのことを認識し、またその種が芽生えるまでにどれだけの時間がかかるかは誰にもわかりません！

無限に広がる悲劇の前に、このことはあまりにも些細な事柄だと思われるかもしれませんが、それは約束のようなものです。わたしたちの心の奥底の振動は、実はわたしたちの心の奥底に深く根を張るわたしたち自身と一致する期待の表れなのです。生と死に見合った何かへの期待、自分自身への愛情を引き起こす思いがけない出来事への期待、わたしたちの望みが再び目覚め、それが満たされることへの期待です。この理性の振動、つまり、何らかの瞬間にはっきりと感知した意味を催促することは、答えが起こるならば、どこでもそれをキャッチするためのもっとも有利な条件となります。ジュッサーニは、この点について、ラインホルド・ニーバーの《問われない質問に対する答えほど信じられないものはない》¹⁹という言葉をよく繰り返していました。どんな意味があるのでしょうか？まさにこの一年の経験によってよりよく理解できるようになったかもしれません。問題を感じれば感じるほど、自分の中で必要性が高まり、答えとなるようなどんな些細な響きにも注意を払い、そうした答えの兆候はわたしの好奇心をかき立

¹⁷ P. Claudel, *Tre figure sante per il tempo moderno*, Paoline, Alba (Cn) 1997, p. 46 逐語訳

¹⁸ I. Carbajosa, *Testimone privilegiato*, Itaca, Castel Bolognese (Ra) 2020, pp. 16, 66, 96 逐語訳

¹⁹ R. Niebuhr, *Il destino e la storia. Antologia degli scritti*, a cura di E. Buzzi, Rizzoli, Milano 1999, p. 66 逐語訳

てるのです。²⁰

存在の意味についての問いは、どんなに切実なものであっても、そして避けられないものであっても、忘れてはならないことですが、常に拒否することができる招きなのです。拒否は、その問いの意識を薄め、ついには隠蔽することになります。《問いは強要する力を持っているが、問いへの注意はそうではない。よって問いは無駄だという人もいる[...]。そうすると、存在の意味についての問いは過小評価され、最後には消えてしまう。ジッドが言っていたように、“必要性を感じなくなる”ということに至る。》²¹ 逆に、問いから逃げない人は、認識の広がり、その呼び覚ます力を経験します。《この“前例のない”一年はわたしに変革をもたらしました。もはや、問題をすぐに解決しようと、あらかじめ用意された完璧で申し分のない答えを自分に提示する必要はなくなりました。むしろその逆を必要としているのです。問いを存続させて、ドラマチックであることを受け入れることです。なぜなら、何も持たず、計画や慣例、手に入れた確信に頼らないこの貧しさの中で、わたしはそこにあるものに気づく大きな可能性を生きているからです》というものです。

3. 判断の基準

人間にとっての重大事態を真剣に受け止めるというのは、手の届く範囲にあるすべてのものを、自分自身や他の人々のすべての態度を、偽りや錯覚を暴いて価値あるものを見極める判断基準を持っていることを意味します。根源であり、わたしたちを成している究極の問い、心の奥底で力強く主張する《賢明で劇的な感動》²²は、わたしたちがあらゆる提案、あらゆる視点、あらゆる出会いを比較する点を示すのです。

ウンガレッティはその詩の中で《わたしの心は／今日／懐かしさの鼓動でしかない》²³と書いています。エティ・ヒレスムもウンガレッティの思いに《決して満たされることのない痛々しいほどの望み、わたしの手には届かないように見える何かに対する懐かしさを常に感じていた》²⁴と共鳴しています。わたしたちは目に見えない不可知の背景として、神秘的で消せない懐かしさを自分の中に持っており、この背景によって人生・いのちや人間関係のすべてを比較するのです。聖アウグスティヌスはそれを気がかり、《主よ、あなたはご自分のために我々をお造りになりました。ですからわたしたちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです》²⁵と呼んでいます。その気がかりが、彼の心がつくられている目的をキャッチするための判断基準となるのです。彼が間違えることがないのは、安らぎを得るという経験によってそれを確認することができるからです。彼の気がかり、期待に応えるものは、それに出会ったときに経験する安らぎによって認めることができます。期待を守り、高める安らぎ。²⁶

²⁰ ルイジ・マリア・エピッコは《今の目的は、感染症から生き延びることではなく、この経験を通して、パンデミックがエネルギーに提案している人生の意味という大きな問題を先延ばしにすることはできないと理解することだ》と述べています。(L.M. Epicoco in dialogo con S. Gaeta, *La speranza non è morta. Parole di fede in tempo di crisi*, San Paolo, Cinisello Balsamo-Mi 2020, p. 40 逐語訳)

²¹ F. Varillon, *L'umiltà di Dio*, Qiqajon - Comunità di Bose, Magnano (Bi) 1999, p. 30 逐語訳

²² ルイジ・ジュッサーニ 宗教心、前出 p.82

²³ G. Ungaretti, «Oggi» in Id., *Poesie e prose liriche. 1915-1920*, Mondadori, Milano 1989, p. 40 逐語訳

²⁴ E. Hillesum, «Amsterdam, 16 marzo 1941», in Id., *Diario. Edizione integrale*, Adelphi, Milano 2012, p. 58 逐語訳

²⁵ «Fecisti nos ad te [Domine] et inquietum est cor nostrum, donec requiescat in te» アウグスティヌス、告白 I,1 中央公論社、世界の名著、責任編集山田晶、東京、1968、p.59

²⁶ この《安心》について、グアルディーニは《単に何もしないことよりもはるかに偉大なものであり、それ自体が充実である》と書いています。(R. Guardini, *Lettere sull'autoformazione*, Morcelliana, Brescia 1994, p. 136 逐語訳)

どこで生まれるか、どんな文化に育つかにかかわらず、すべての人間は、意味や運命、絶対的なものへの渴望を抱えてこの世に生を受けるので、ある時点で、自分自身の中に現れてくるのに気づきます。この渴望には、望むか否かにかかわらず、自分がどんな立場であろうと、立ち向かわざるを得ません。しかし、この渴望は放心というごみに埋もれているかもしれませんが、パンデミックのような出来事は、覆っている沈殿物に穴を開け、わたしたちを麻痺状態から覚醒させ、渴望を表面化させて、わたしたちが何がかの答えで満足するのを妨げます。起こっていることに促され、切実さが募れば募るほど、それに立ち向かわせるものが何か、応えるものが何かは際立ってくるのです。

それでは、わたしたちが浸っている挑発を前に、入れ替わったり絡み合ったりするのを見てきた様々な態度—完全に、あるいは部分的にわたしたちに当てはまるかもしれません—を振り返り、それらが持ちこたえられたかを評価してみましょう。

a) 《すべてはうまくいくよ》という態度

最初のロックダウンで何度も繰り返し使われたスローガン、《すべてはうまくいくよ》を皆思い出すでしょう。事実、人は誰でも人生に立ち向かうための自然な希望のようなものを持っています。保健衛生上の危機が始まってすぐに、わたしたちはそれを目の当たりにしました。医療従事者が身を挺して治療に当たっていた際、多くの人々がベランダに出て信頼を表していました。《すべてはうまくいくよ》という言葉をよく耳にしました。こうした希望、楽観的な態度は、挑発の長期化や過酷さに耐えられましたか？第2波はわたしたちを襲った津波に耐えられないほどのもろさを見せつけあの希望を窮地に追いやりました。²⁷

同様のことがわたしたちの存在に伴うさまざまな矛盾の前でも起こります。レオパルディはそれを《されどひとたび狂った調子が/耳を打つなり、/たちまちにその楽園も無に帰する》²⁸ と、みごとに表現しています。何でもないこと、不調和なアクセント一つで、わたしたちが築いてきた楽園は危険にさらされることとなります。その何でもないこと、不調和なアクセントの代わりに新型コロナウイルスを置くかどうか、わたしたちがよく知っている結果を含めて想像してみましょう。

矛盾する状況や現実の厳しさとの衝撃によって、わたしたちは希望の実質を問われるのです。ある大学生が《わたしは常に希望の存在と、わたしたちが生きている状況の偉大さについて確信を持っていました。これらのことは、最初のロックダウンの時も、特にこの夏、実習の埋め合わせをしなければならなかった時にも明らかでした。にもかかわらず、ここ数日、わたしの心には重くのしかかるものがあります。わたしの日々を支配するのはもはやあの希望ではなく、わたしを振り回す日常の様々な思いや誘惑と多くの労苦です。こんなことがあり得るでしょうか》と書いてきました。

²⁷ ジャン・ダニエルは《希望は楽観主義ではない。楽観主義とは、物事は成り行きで必ずうまくいくと考える安易な態度のことである。より深く考えると、この態度は悪を、それ自ら放逐するであろう単なる無秩序の状態か、または成長過程の危機と捉える。それは悪の悲劇的な性質を無効にすることになり、楽観主義は希望の最悪の敵と言える》と指摘している。(J. Daniélou, *Saggio sul mistero della storia*, Morcelliana, Brescia 2012, p. 370 逐語訳)

²⁸ G. レオパルディ、「墓石に刻まれた美しき女性の像に寄せて」、47-49節、カンティ、脇功・柱本元彦訳、名古屋大学出版会 2006、p.193

b) 連帯

カミュがペストの中で言っているように、ある出来事が《みんなに関わる問題》である場合、誰もが何とかそれに立ち向かおうとします。やがて、その出来事から逃れようとする錯覚は次々と失せていきます。ある出来事の残酷さは、カミュの小説に登場する、無実の人の死を前にして、報酬的な正義の信念が崩壊してしまうパネルー神父のように、もっとも確固たる確信をも揺るがすほどの衝撃を与えます。レカルカーティ氏は《で、どうする？という[パネルー]神父の言葉が、人間のあらゆる治療の経験の前提となるものを照らし出しているのです。彼は、マルセイユでペストが大流行した時、マーシー修道院にいた81人の修道者のうち、4人だけが生き残ったことを語っています。そしてこの4人のうち、3人は自分の命を守るために逃げ出しました。一人だけが留まったのです。神父が信者に言い残した最後の言葉は、あなた方が留まることができる人々であるように、というものです。留まることができる、これが如何なる治療の実際の大前提です。倒れた者の呼びかけに応えることを意味します。聖書的に言えば、それは“ここにいるよ！”という言葉が啓発するもので、悪の受け入れがたい暴力に誰も見捨てることなく、人への治療を人間的なものにならしめるものです。悪に意味を与えるのではなく、悪に見舞われた人々に寄り添うのです》²⁹と書いています。

教皇フランシスコが言われたように、新型コロナウイルスによってわたしたちは皆、同じ船に乗っていることをより意識するようになりました。そして、その意識は多くの人々にそれぞれの可能な範囲で懸命に人助けをする勇気を奮い起こしました。こうした努力の卓越した価値は誰にも否定できませんが、同時に成功したときも失敗したときも、提供された支援が、もっとも過酷な状況で生じる問いに立ち向かうのに十分であると主張する人はいないでしょう。つまり、わたしたちが必要としているのは、援助や医療のみならず、苦しみや死を目の前にして持ちこたえることを可能にする何かなのです。ここで不可欠なものではあっても、連帯や寄り添うこと、支援のあらゆる試みの限界が明らかになります。起こったことによって打撃を受けた人々のうちに、この状況が浮き彫りにした必要性の本質は、連帯によって得られるものよりも深いものです。³⁰

c) 特効薬としてのワクチン

ようこそ ワクチン！あれだけの苦しみ、恐怖、困惑、死を目の当たりにして、喜ばないでいられるでしょうか。昨年12月22日付のコリエーレ・デッラ・セーラ紙に掲載されたスザンナ・タマーロの《幼子イエスへの手紙》に書かれた言葉を見無視することはできません。それは、《ワクチンが救いになると確信しているわたしたちをお赦し下さい。人に役立つものとして用いられる科学が素晴らしく欠かせないものであるように、ワクチンも不可欠な助けになることには違いありませんが、わたしたちを覆う逆境の霧を吹き飛ばすことはできないでしょう。そのためには、新たなまなざしと、そのまなざしによって対話をする清らかな心が必要です》³¹というものです。この言葉は、避けては通れない問いを明るみに出しまし

²⁹ M. Recalcati, «Ed io avrò cura di te», *la Repubblica*, 15 ottobre 2020, p. 27 逐語訳

³⁰ わたしたちが他の人々の必要に応えようと懸命になる時に同じことが起こります。《まさに彼らを愛しているから、彼らを幸せにするのはわたしたちではないという事実を発見する。もっとも完璧な社会も、確固とし、行き届いた合法的な組織も、莫大な富も、丈夫な体も、より純粋な美しさも、より教養のある文明でさえも、彼らを幸せにすることはできないということである》(L. Giussani, *Il senso della caritativa*, Società Cooperativa editoriale Nuovo Mondo, Milano 2018, p. 10 逐語訳)

³¹ S. Tamaro, «Sotto l'albero vorrei ritrovare l'innocenza», *Corriere della Sera*, 22 dicembre 2020, p. 29 逐語訳

た。それは、パンデミックが再び呼び覚ました問いにワクチンだけで答えることができるのだろうかというものです。わたしたちが必要としているのは病気を撲滅することだけなのでしょうか。

治療法がない病気の場合は？非常に重い症候群を持つ子供の母親は《特に困難なこの時期に、わたしたちは息子が鎮静剤と挿管を使用して集中治療室に入院することを経験しました。このような時、わたしは自分が見守られ、愛されていることを思い出させてくれるものにしがみつきます。だから、友人に電話をしたりメッセージのやり取りをしたり、あることは繰り返し読んだりして、力を得ようとしています。わたしたちがいる小児科病棟では、インターネットや電話の電波が悪く、それに新型コロナウイルスのせいで誰にも会えません。このようにいつも一番にしがみつくものがなくなります。“この一年は忘れて、前を向こう。ワクチンの希望がやってくる”という新聞記事を読んだ記憶があります。希望がすべてワクチンにあるとどうして思えるのでしょうか。息子のことを考えると、健康であることが希望につながるのでしょうか。そうであるなら、彼はさじを投げられたも同然です。けれども、まさに彼自身が何度もわたしにとって計り知れないほど大きな希望の証人となってくれます。彼を、彼の体を見ていると、わたしたち一人一人が持っている善なるものへの要求、つまり不完全であるにもかかわらず幸せになりたい、愛されたいという望みを思い出させてくれます。わたしたちの欠如は、わたしたちが願い求めるようにさせるドラマです。つまり、わたしたちがより願い、望むようにするものなのです》と書いています。

保健衛生上の危機によって作り出されたのではなく、表面化した深い裂け目にどう対応すればいいのでしょうか。その前に、どのような裂け目のことを言っているのでしょうか。それは、わたしたち自身の人間的な要求であり、わたしたちの中にあるいのちへの渇きの裂け目です。さらには、死や痛み、命を失うかもしれないという苦悩や人生が最終的には完遂されないことへの恐れ、より連続的になってきた恐怖の渦です。これまで述べてきた“答え”で、この渦を鎮めるのに十分なのでしょうか。

4. 自己からの逃避

一人の若い女医が《当初は、物事が大体自分の計画通りに進むことを期待して日々を過ごしていました。わたしは医者で、11月に研修医を終え、1月には新しい町に引っ越して新しい仕事に就く予定でした。何年もかかった勉学をようやく終えて、医者としての使命を果たすことができるという期待感でいっぱいでした。昨年3月、最初のロックダウン。医療管理は打ち負かされ、わたしの契約は優先順位から外され、わたしは病院にいられなくなりました。手伝いに行くことさえできませんでした。役立たずの医者。パンデミックのまっただ中で！それなのにテレビではずっと医師の要請の報道が流れていました。わたしは少なくとも10通の履歴書を送り、近場や遠方に応募しましたが、必要条件が備わっていないため審査には通らなかったのです。役立たずの医者。わたしの怒りと悔しさは想像できるでしょう。想定外の出来事の価値について聞いていたことに同意していました。でも本当のことを言うと心の奥底では、想定外のことも、とにかく自分の考えの範囲内でなければならぬと思っていたのです。そのため、わたしは自分自身を置き去りにされ、捨てられ、わきにどけられた者と思なすようになりました。わたしは“あなたの神様はどこにいるの？いるとすれば、あなたのことを忘れたのよ。おそらくいないのでしょうか”と自問自答しました。要するに、あの数ヶ月の大変さを忘れることができません。けれども、わたしは“新型コロナウイルスによる危機”を無駄にたくありません。神の存在に対する疑念や、逆に神が存在し、神がわたしの人生・いのちを本当に気にかけてくれているという可能性の真相に迫る機会を逃したくな

いのです。経験に基づいて“あなた方の髪の毛の一本一本まで数えられている”ということを確認として主張することができるでしょうか。信者ではない人に、あるいはもっと単純に、自分自身が疑った時に根拠を与えることができるほどの確信を持つことができるのでしょうか》と書いてきました。

教皇フランシスコが言われているように、わたしたちが経験している危機を《無駄》にしたくないのであれば、わたしたちの内側からせきたてる問いに挑発される機会を逃すことはできません。危機を無駄にしないというのは、わたしたちの心にまで満ちている疑いに答えようとすることです。正面から向き合わず、問いに見合った答えを見つけられなければ、劇的な状況の前に立つことができないため、自分自身から逃げざるを得ないのです。

自分から逃げるのは、可能なら、もっとも一般的な方法です。つまり、心の深い淵や、満たすことのできない“不可能”な要求、手なずけることができず落ち着きを失わせる要求を避けようとするのです。

第1波では恐怖と連帯感が何らかの形で支配していたとすれば、第2波では、これまで述べてきたように、将来に対する不確かさが支配し、意味の必要性和それに直面することの困難さがより強く意識されました。これが逃避の理由になるのです。逃げるのは、意味を求めて叫ぶ人生・いのちに耐えられないからです。ですから、できるだけ自分から離れようとしています。まるで《自分を他のすべてのものよりも重要でないと考えているかのよう》³²なのです。わたしたちが支払う代償は、価値を失い半減した人生です。アレッサンドロ・バリッコが最近《このもう一つの死、忍び寄る、目に見えない死については、いつ話すのだろうか。それを考慮した首相令もなければ、日刊紙もない、公式には存在しない。だが、1年前から毎日、(死は)そこにいる。それは、わたしたちが生きなかつた人生のすべて》³³と書いたように。

自分自身から逃げながら、状況を悪化させるのです。なぜならば、何もかもがわたしたちのものではなくなり、すべてがわたしたちにとって関係のないものになるからです。ジュッサーニは《わたしたちの人間としての歩みを阻む最高の障害は、自己を“なおざり”にすることである。そうした“なおざり”の反対、つまり自己への関心にこそ、真に人間らしい歩みへの第一歩がある》と、忘れがたい言葉で表現しています。さらに《わたしたちがこのような関心を持つのは当然のことにように思えるが、まったくそうではない。わたしたちの日常の意識にどれほど大きな空虚の裂け目が開いているか、どれほど記憶を失っているかを見ればよくわかる》と続けています。1995年に書かれたものであるにもかかわらず、今日のわたしたちに向けて書かれた言葉のように思えるのは、パンデミックによって、経験の躍動、それに先立ち、それに伴うという躍動が表面化したからです。ジュッサーニの言葉は、自己をなおざりにするという人間の魂に永続する可能性、日々の生活の中でわたしたちに付きまとう誘惑に気づかせてくれます。《“自己”という言葉の背後には、今日、大きな混乱があるにもかかわらず[...]自己をなおざりにするならば、生・いのちとの関係がわたしのものであることは不可能となり、生・いのちそのもの(空、彼女や友人、音楽)がわたしのものであることは不可能である。真剣に「わたしの」と言えるためには、自分の自己を成しているものについての明確な認識が必要である。自分の“自己”の実際の規模を発見することほど魅力的なことはなく、自分自身の人間としての顔を発見することほど驚きに満ちたものはない。》³⁴

³² ニコラス・カバシラスは《わたしたちがすること、わたしたちにとって普通のこと、わたしたちにとって正しいと思われること、これらすべてがわたしたちにとって非常に重要なことである。真に自分のものであるものだけを他のものよりも低く評価し、それを守り、それを通して自分の権利を確保する方法を考えず、まるで自分が他のものよりも重要でないと考えているかのようである。せめて、万物を覆し、変容させたあの新しさによって回心しようではないか》と書いています。(N. Cabasilas, *La vita in Cristo*, Città Nuova, Roma 1994, p. 291 逐語訳)

³³ A. Baricco, «Mai più, prima puntata», *www.ilpost.it*, 9 marzo 2021 逐語訳

³⁴ L. Giussani, *Alla ricerca del volto umano*, Bur, Milano 2007, p. 9 逐語訳

こうした混乱の広がりには、わたしたち自身の外部からの影響もあります。自己の意味の弱まりは、わたしたちの文化が追求してきた方向と、それが直面している膠着状態の兆候として表れます。つまり、《実際に、ある文明が進歩していると言えるのは、個々の自己があらわになるよう支援され、その価値が明らかになることによる》のです。これは、自己が自分自身と物事の支配者として中心になろうと思いがり、理性が現実の尺度として昇格したある成り行き、近代という成り行きの逆説的な結果です。あげくの果てに現実が頑強に指し示す「神秘」である神は、人生・いのちと世界の概念から消し去られました。このことは、現実とのより密接で直接的な関係に導くのではなく、逆に、現実やその意味から逃避し、人間の存在を単なる事実のデータに矮小化することに導きます。《“自己”の究極の顔と現実の混乱の中で、理性的な人間なら誰もがすべての人間的な経験の根源と範囲の中にある無限の「神秘」との関係を見出すにもかかわらず、今日、その関係から逃避し続けようとする極端な試みがなされています。それは、生きることの究極の実質を否定することです。現実が人間の主張する支配から逃れているように見える時、自尊心がとる極端な手段は、現実のどんな実質をも否定し、すべてを恣意的に幻影やゲームと考えることである。今日、考え方や見方を支配しているものをニヒリズムと呼ぶことができる》³⁵とジュッサーニは続けます。

方法はまったく違いますが、聖書が預言者ヨナの書の第1章で描いているのは逃避です。この話の展開は皆知っています。この章では、《ヨナは主の前から逃げた》³⁶という文が2回繰り返されています。しかし、このような神からの逃避は、《わたしたちの責任からの逃避、つまり“統一した”人生からの逃避、すべてのものと一体であることからの逃避、豊かさからの逃避、意味と豊かさからの逃避》と同じだとジュッサーニは言います。したがって、1963年に当時の責任者たちに向けて言われたことですが、たとえわたしたちが《カトリックの運動に専念すると決意》してそれに自由な時間をすべて捧げたとしても、「神秘」との関係からの逃避は《わたしたちの毎日の生活の中に許す空虚》³⁷であり、様々な形を呈する自己からの逃避なのです。

a) 行動主義

わたしたちは、自分の本物の要求について考える時間がないほど必死に行動することで、わたしたちの人間性の奥底から湧き上がる叫びを避けることができます。活動は麻薬のようなものになります。この活動がわたしたちの生活にどれほど浸透しているかは、ロックダウンによってわたしたちが立ち止まらざるを得なくなった時にわかりました。家に閉じ込められたわたしたちは、突如として自分自身と向き合うことを余儀なくされたのです。そして、どれほど多くの人が自分の目には耐えられない自分自身の空虚、混乱状態に気づいたことでしょうか！行動主義というのは適切な理由もなく活動することであるため、人の心は開かず、成熟しません。このように、立ち止まらざるを得なくなった時、不安でいっぱいになり、自分自身の重さが自身の肩ののしかっている山のように感じてしまうのです。ある若い女性は《この非常に困難で無味乾燥としたこの数か月に、わたしはある種の問いを直視することができないことに気づきました。よく現れるこれらの問いを、やらなければならないことのリストで隠します。なぜなら、答えがないからです。このように振る舞うのはわたしをそこねます。友人に元気かと聞かれるといつも

³⁵ 同上 逐語訳

³⁶ ヨナ書 1,10 参照

³⁷ Fraternalità di Comunione e Liberazione, *Documentazione audiovisiva*, Esercizi Incaricati di GS, Varigotti (SV), 6-9 dicembre 1963 逐語訳

何と答えていいかわかりません。わたしには2人の健康で素晴らしい子供がいて、わたしたちは皆元気で、経済的にもパンデミックの影響を受けておらず、何の不満もありません。けれども、わたしはいつも強い空しさと孤独を感じていて、いつもイライラし、何事にも否定的な面を見てしまいます。友人とは、ほとんど自由ではありません。なぜなら、自分の空しさについて話すことで、素早く話題を変える以外に逃げ道がない不愉快な沈黙が生じることが怖いからです》とわたしに書いてきました。

わたしが話している行動主義には、様々な分野や目的が考えられます。通常、それは仕事ですが、政党や文化協会、ボランティア活動、あるいはジュッサーニがよく言っていたように、《カトリックの運動》であることもあります。こうした態度はまずわたしたちに見られます。わたしたちの人間性への真剣な取り組みの欠如を活動することに置き換えるのです。《運動のことをやる》のも、自分から逃げるための手段になり得ます。

ジュッサーニは何度もこのような態度の根源に隠されたものを指摘し、警鐘を鳴らしてきました。事実、行動主義において、わたしたちが行うことや、わたしたちが関わることや、満足を見出そうとする物事が、実際の生き甲斐となり、真の愛情の対象になるのです。神でもなく、キリストでもなく、肉となった神秘との関係でもありません。《実際、具体的にキリスト以外のものをより大切にする》のです。わたしたちが運動に関わっているのは、運動が抱く「神秘」のためではなく、わたしたちが行うことのためなのです。《このことは、わたしたちの人生の経験を深めさせない》³⁸のです。このようなことを言っても過言ではないでしょう。実際に、わたしたちを結ぶものが活動のみになると早かれ遅かれ、一緒にいることに興味は薄れます。《わたしは30年前、大学を卒業する時に運動を辞めました。わたしの毎日は活動や人との関わりでいっぱいでしたが、すべての意味が当たり前と見なされ、消えたかようになってため人生・いのちは潤いのないものでした》と、ある人が言っているように。

b) 放心、雑音で空虚感を埋めるために

挑発と試練のこの時世で、自分のもろさを意識することがほとんど避けられず、自分の偶発性、はかない存在である自分に手で触れる時、わたしたちは簡単に気をそらすという手段を選びます。わたしたちの中に問題となる問いが生じると、どう答えていいかわからないので不安になるため、わたしたちは答えの空白を雑音で埋めてしまうのです。自由な時間には、刺激やニュースを追い求め、ネットやソーシャルネットワークをさまよひ、何かを深く知ろうとすることもなく次から次へと常に新しく興味を引くものを得ようとしています。認めていようが認めていまいが、わたしたちの目的は、運命の問題や自分が感じている切実さから逃れ、自分自身に立ち向かうことを避けることです。³⁹それは用を成さない手段であり、最終的には役に立たないことはわかっている、少なくとも一時的に、それが保証する中断に満足するのです。

放心や思慮にかけることは、一日の多くの時間、そして人生の長い時間をも特徴付けるでしょう。これはある意味でシニズム（キニク主義）のもう一つの現れです。実際に、放心がうまく作動しない時には、

³⁸ L. Giussani, *La convenienza umana della fede*, Bur, Milano 2018, pp. 104 e 107 逐語訳

³⁹ 《放心》とは、ロマーノ・グアルディーニが強調するように、《人間が中心も統一性も持たず、思考は一つの対象から別の対象へとさまよひ、感情は定まらず、意志は自らの可能性を意のままにできない状態》である。(R. Guardini, *Introduzione alla preghiera*, Morcelliana, Brescia 1973, p. 23 逐語訳)

切実さを門前払いし、すべてに実体がないと烙印を押し、《無の感覚の浜》⁴⁰をさすらうことを好む別の方法であるシニズムが後を継ぎます。

《放心などといふ有り触れた言葉で呼ばれるものが、そのやうな性質の解離や粉碎を起こすことができるとは思へなかつた》⁴¹とベルナノスは告白しています。わたしたちの人格は、疎外感や機械的な動作の中に埋没し、自意識がどんどん薄れていきます。すなわち、放心状態とは、生きることの本質から切り離されているという意味です。

c) 正常な状態に戻ることに、話題を変えるために

1939年にオーウェルは《われわれの未来はどうなるんだろう？ことはもう本当に決着してしまったのか？嘗てのような生活に立ち戻って行くことができるんだろうか？はたまた、永遠の〈おさらば〉になっちゃったんだろうか？》⁴²と、自問していました。この質問は説得力を失ってはいません。一刻も早く話題を変え、起こったことに背を向けて、忘れてしましましょう！何もなかったかのように、問いが目覚めなかったかのように、死が起こらなかったかのように、当惑は単なる事故で忘れ去ることによってなかったかのように振る舞うこと、こうした雰囲気は漂っているようです。それは、常に潜んでいる誘惑です。《すべてがああ耐えがたい変化以前の状態に戻り、すべてが習慣や既知のものに戻り、骨を折って血液に入り込むあの新しさの痕跡がなくなればいい...》⁴³と、ヴァシリー・グロスマンが人生の終わりに書いているように。こうした態度からは、わたしたちの経験に何の利益ももたらされるはずもなく、むしろ、逆のことが明らかです。

⁴⁰ L. Giussani, *La familiarità con Cristo*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2008, p. 147 逐語訳

⁴¹ G. ベルナノス、*田舎司祭の日記*、木村太郎訳、新潮社、新潮文庫、東京、1952年 p.285 (仮名遣いはそのまま漢字は現在の物を使用)

⁴² G. オーウェル、*空気を求めて*、大石健太郎訳、彩流社、東京、1995年 p.312

⁴³ V. Grossman, *Il bene sia con voi!*, Adelphi, Milano 2011, p. 212 逐語訳

2章

わたしたちは期待である

困難を克服し、保健衛生と経済のより安定した状態を取り戻すということではなく、人間的な問いを忘れ、黙殺しようとする懸念に耳を傾けましょう。行動主義、気を紛らわすこと、正常を取り戻すあせり、これらはすべて、自分自身と現実から逃避するための方法です。多くの人々にとって、習慣的に行われていることであり、すでに使った『「期待」』という言葉に要約される自己の深みに向き合わないことになります。いのち、意味、満足、完遂を期待することです。しかしながら、これまで述べてきたように、パンデミックのような状況は、その結果、わずかな時ではあっても、逃避していたわたしたちを取り戻させながら、放心からわたしたちを引き離し、自分自身の前に立ち戻らせます。

自分で自分自身を完遂させようとしたり、逃げようとしたりする試みはなぜ失敗するのでしょうか？それは《魂は世を超え、目に見えるもの、自分が知っているものでは満足しない。懐かしさで涙する》¹からです。朝起きて行動を開始する時、あるいは“逃避”を企てる時に、それが明らかであっても暗黙のうちであっても、どんなに努力しても、どんなに頑張っても、どんなものであってもわたしたちの試みは求めている完遂をもたらすことはできません。わたしたちの構造的な力不足と、自分で獲得でき得るものの足りなさのために、わたしたちは心の奥底で期待しているものを見つけることができないのです。それゆえ、シモーヌ・ヴェイユは《もっとも貴重な善は探し求められてはならず、期待されねばならない。というのも、人間は自分の力でもっとも貴重な真理を見出すことはできないからである。もし人間がもっとも貴重な真理を探し求め始めるならば、もっとも貴重な真理の代わりに偽りの善を見出してしまおう。その偽りの善が偽りであると識別しえずに、である》²と鋭く断言しているのです。

1. 根絶不可能な事実

したがって、期待は、わたしたちの試みが成功した時—むしろその時こそ—も含めて、毎瞬間、自身の完遂と、明日あるいは死んでからではなく今ここで満足するという目標を達成するには不十分であると判明したときに、常に残るものです。

数か月前に亡くなった現代の偉大な詩人の一人、アダム・ザガエフスキ（ポーランドの詩人、小説家）は、わたしたちのうちにある期待の無限の広がりやを以下の言葉で残しています。

《あの一瞬、
大変まれに起こる—
これが人生だろうか？
あの数日間
輝きが戻る—
これが人生だろうか？

¹ P. Van der Meer, *Diario di un convertito*, Paoline, Alba (Cn) 1967, p. 34 逐語訳

² S. ヴェイユ, *神を待ち望む*, 今井純子訳、河井出版新社、東京 2020年、p.171

あの瞬間

音楽が尊厳を取り戻すー

これが人生だろうか？

めったにないあの時間

愛が勝利するときー

これが人生だろうか？》³

この詩には、誰もが経験したことのあるものが模範的に表現されています。わたしたちの生きている文化が、この期待を抑えようとしたり、阻止しようとしたり、損なおうとしたりしても、すべての試みは、避けられないもの、つまりわたしたちの人間としての本質と衝突するのです。ベルトルト・ブレヒト（ドイツの詩人、劇作家、演出家）はこのことをある詩の中で認めています。

《欲望はみたすでなく忘れることが

賢明なのだから。

どれひとつ、ぼくにはできぬ、

ほんとうに、ぼくの生きる時代は暗い！》⁴

暗い時代であっても、わたしたちの心から望み、いのちの渇きに応える何かを期待することは根絶できません。《支配的な文化》は、生きる意味のはく奪を助長し、実存的なニヒリズムを支持することに一定の関心を持っているかもしれませんが、《個人の考え方、ひいては集団の考え方にどれだけ影響を及ぼしたとしても、宗教心と定義された人間の本質を前に立ち止まらざるを得ないのである》。この本質は、《完全に衰退することがないだけでなく、感覚的には多少の差があっても、常に期待の状態にある》⁵とジュッサーニは断言しています。

この期待は、根絶できない事実で、わたしたち一人ひとりが生きているあらゆる瞬間に、その事実を避けた時であってもそれについて考えています。《誰かがわたしたちに何かを約束したことがあるだろうか？それなのに、なぜ待つのか？》⁶この言葉でパヴェーゼは彼自身とわたしたち皆の中心にあるものを、つまり期待について表現します。これはわたしたちの本質を織り成すものです。わたしたちは《何かを期待する》ものとしてつくられているのです。わたしたちは期待し続けるだけではなく、わたしたちは期待そのものなのです！

ある友人が《わたしは自分のもっとも深いところで希望を与えてくれる何かを待っているのだ、“はい、希望はあります”と言えることを期待しているのだと気づきました。“確信があるわけではないけれど”と答えたくなるような時に、自分は生きることすべてに究極の確実性を期待するようつくられている、つまり希望のためにつくられているのだと気づかされます。わたしは、そのような期待があれば、それはすでに応えるものが存在するというしるしであることを、ジュッサーニもあなたも何度も繰り返して示してくれていることを知っています。けれども、わたしには、このことを言葉として繰り返すことしかわかっていないように思えるのです》と書いてきました。

この期待とは無縁のように見える人であったとしても、それを重要視せず、真剣に受け止めず、放

³ A. Zagajewski, «I brevi istanti», in Id., *Guarire dal silenzio*, Mondadori, Milano 2020, p. 16 逐語訳

⁴ B. ブレヒト、*ブレヒト詩集*、長谷川四郎訳のあとがき中、「あとから生まれるひとびとに」、野村修訳、みすず書房、東京 1978 年、p. 139.

⁵ L. Giussani, *Un avvenimento di vita, cioè una storia*, a cura di C. Di Martino, EDIT, Roma 1993, p. 41 逐語訳

⁶ C. Pavese, *Il mestiere di vivere. Diario 1935-1950 con Il taccuino segreto*, BUR, Milano 2021, p. 400 逐語訳

心、あるいは自分の人間性を否定している人であっても、誰でも勧めに富んだ存在、その期待に関係する意味を持つ存在に出会った時には、無関心ではられません。つまり、自分たちのうちに期待がくすぶり始めるのを見て、ひそかに期待していたことを自分自身に認めなければならないのです。ロックダウンとその解除の合間に、ほとんど完全黙認という雰囲気の中で、何人かの同級生から《わたしたちが生きている限り、大学は閉鎖されない》⁷というピラを受け取った大学生たちに起こったように。彼らの表情は変わり、期待がよみがえったのです。期待は一つの事実です。それは、《期待、また期待することは、わたしたちの個人生活、家庭生活、社会生活全体がその中で行われる次元です。期待は、何千もの状況の中に存在します。これらの状況には、小さなものも、重要なものもあります。これらの状況はわたしたち全体と深くかかわります。たとえば、夫婦は子どもを待ち望みます。わたしたちは親類や友人が遠くから訪ねてくるのを待ち望みます。若者は大事な試験や、就職の面接の結果を待ち望みます。恋愛関係にある人は、愛する人と会うこと、手紙の返事が来ること、ゆるしてもらえることを期待します…こういうこともできます。人は期待しているとき、すなわち、心の中で生き生きとした希望を抱いているとき、生きています。そして人は、自分の期待することから自分自身を認識します。わたしたちの道徳的・霊的「度合い」は、自分が期待し、希望することによって計られるのです》⁸と、ベネディクト 16 世がわたしたちに思い出させてくださったことです。

期待は、わたしたちの自己を構成するものであるため、もっともひどく、もっとも苦しく、もっとも矛盾した状況においてできても、それを完全に消し去ることはできません。もはや期待する理由がないような状況においても、期待についての証があります。《時間は常に充実していますが、しかしその背後にはやはり、朝から晩まで待つというくらしがあります》⁹と、デイトリッヒ・ボンヘッファーはベルリンのテーゲル刑務所から書き残しています。彼は、ナチス政権に反対したために 1943 年から 1945 年まで投獄され、その後絞首刑となりました。彼は一分一秒を無駄にすることなく生き、その背景には期待が高まっていたのです。

わたしたちは《何かを期待する》者だという、この明らかで不滅な基本的事実を根こそぎにできるものはありません。スペインの作家グスタボ・マルティン・ガルゾは、カフカの物語をほのめかしながら、わたしたちの待ち望む心を《自分にはできないことを要求し、執拗にそれを実行するよう求める動物》¹⁰に例えています。そして、イリバルレン氏も同じように、《そして、どうしてそうなるのか／一過ぎ去る人生を見ながら、自分に問いかける！ 浜辺に向かって一、時間がわたしたちに与える冷酷な荒廃は、まったく和らげられることなく、休む暇さえ与えない／不可能なことを夢見続けるわたしたちに》¹¹と書いています。

2. 自己への愛情

この期待という事実は、無視できない客観的なものですが、それで最終決定ではないことに注意しなければなりません。言い換えると、認識され、受け入れられ、重んじられる必要があります。つまり、わた

⁷ <https://www.ateneostudenti.it/2020/11/01/luniversita-non-e-chiusa-finche-noi-viviamo/> 逐語訳

⁸ 教皇ベネディクト 16 世の 2010 年 11 月 28 日の「お告げの祈り」のことば 期待すること カトリック中央協議会

⁹ D. ボンヘッファー、*獄中書簡集・抵抗と信従*、村上伸訳、新教出版社、東京 1988 年、p. 126

¹⁰ G.M. Garzo, «Estimado Franz Kafka», *El País*, 25 ottobre 2020 逐語訳

¹¹ K.C. Iribarren, «Verano cruel», in Id., *Seguro que esta historia te suena*, op. cit., pp. 330-331 逐語訳

私たちの理性と自由が問われるのです。これがわたしたちの人間としての偉大さです。期待は人間の本性にあるのですが、これまで述べてきたように、わたしたちは様々な方法で、気を紛らわし、それがないように装って、存在しないかのように生きることができます。期待は存在しますが、機械的には自分を主張しないのです。

自分が期待であるという明確な事実が機械的に強要されるものではなく、わたしたちに認められる必要があるという事実を不幸と感じる人がいるかもしれません。そして、自分の力でそれを満たすことができないばかりか、自分からそれを取り除くこともできないという事実を同じように不幸と考える人もいるかもしれません。しかし、自分の経験に忠実であれば、自分を織り成すものから期待を引き剥がすことはまったく有益ではないことを理解し、期待を抑えようとする試みがあげくの果てに達成できないのは幸いだとわかるでしょう。《待つことはそれでも一つの仕事だと言える。耐え難いことは何も期待しないことである》¹²とパヴェーゼは再び啓発します。各自、朝起きて何も待っていない時に、このことを確認することができるでしょう。その時、何かを待って目覚めるのと、その日は何も待たずに目を覚ますのと、どちらが良いかを自分自身に認めることができるでしょう。

誰もが自分の心の中から完全に取り除くことのできない期待は、毎朝わたしたちの人間としての偉大さの特徴である自由を呼び起こす二者択一を迫ります。その二者択一とは何でしょうか？期待に真摯に立ち向かうか、無駄にするかです。この決意は決して当然のことではないのです。そのためにわたしたちは自由なのです。ある人がわたしに《フラテルニタの黙想会や質疑応答の前にあなたがわたしたちに差し出す問いに、わたしが答えようとしたのはこれが初めてです。なぜなら、“希望はあるのか”という問いは、まさにわたしのために、わたしに向けられたもので、“他の人”が答えれば良いものではないと、自分自身を真剣に受け止めようとしたのは初めてだからです。わたしの人生では、わたしが主人公であることを発見しました》と、書いてきました。

毎日続くわたしたちの自由のドラマをスプーンリバー・アンソロジーの中の《ジョージ・グレイ》に

《何度も考えた

わたしのために彫られた墓碑を。

それは港に留まる帆を下ろした船。

実際には、わたしの目的地ではない

が、わたしの人生・いのちだ。

なぜなら、愛を差し出されたのに、その偽りから身を引いたから。

哀しみがドアを叩くと、わたしは恐れた。

野心に駆られたが、予期せぬことを恐れた。

こうしたすべてのことにもかかわらず、わたしは人生において意味に飢えていた。

今は帆を上げて、

船がどこへ押し流されようと

運命の風に吹かれなければならないことを知っている。

人生に意味を見出すことは、狂気につながるかもしれない

しかし、意味のない人生は拷問である

不安と空しい望みの一

¹² C. Pavese, *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 421 逐語訳

海を希求しながらも、海を恐れる船なのだ》¹³と、うまく表現されています。

わたしたちは海を希求する船のようなもので、この希求は（わたしたちの）構造上のものなので海を待ち望むしかないにもかかわらず、恐れるのです。ここで闘いが始まります。海を希求し、意味のある人生への渴望に応じるか、それとも予想外の事態を恐れてリスクを冒さず、甘んじて引きこもるか。

このように、自分の人間性から身を引き、恐れのために予期せぬことに無駄な労を省き、《港で帆を下ろした船》に乗って安全を確保しようとする誘惑について、イエスは福音書の中でタラントンのたとえを用いて語っています。

《天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたつてから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』¹⁴

主人は恐れのために危険を冒さなかった僕を非難します。危険を冒す者だけが、命を得ることができるとイエスは言います。実際、このたとえ話は、《だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる》という言葉で終わっています。イエスは人間の本質をよく知っていて、危険を冒さず、ボートのオールを引き上げて、快適に港に留まろうとする誘惑があることを知っていました。しかし、人生において危険を冒さず、自分を危険にさらして意味を得ようとしなない者は、すべてを失い、空虚になります。

自分の必要と、人生・いのちの完遂への飢えと渴きを真剣に受け止めるのは、自分に対する愛情の最初のしるしであり、それはもっとも当然ではないものです。実際、自分の要求や必要は《否定できず、満たされない時には、[...]苦痛の叫びを持って訴えるが、通常は真剣に受け止められない》¹⁵、要求や

¹³ E. Lee Masters, «George Gray», in Id., *Antologia di Spoon River*, Einaudi, Torino 1993, p. 131 逐語訳

¹⁴ マタイ 25,14-30

¹⁵ L. Giussani, *Uomini senza patria (1982-1983)*, Bur, Milano 2008, p. 295 逐語訳

必要を信頼せず、それらが示唆する方向に従わないのです。

自分自身の渴望、要求を真剣に受け止めるのを可能にする自分への愛情を持つためには何が必要なのでしょう？ジュッサーニは《自分を愛するためには（心の）貧しさが必要である》と、《キリストが“心の貧しい者は幸いである”、また“義に飢え渴く者は幸いである”と言ったのはこのためである。なぜなら、[自分自身への愛情]というのは自分で決めた何かへの愛着ではなく、わたしたちが決定される何かへの愛着、わたしたちを決定する何かを認めることである。わたしたちがその決定に介入することができないものを認めることである。愛の要求、個人的な完遂の要求、あるいは、仲間の要求は、並ぶもののない、より偉大で深遠なものであり、真剣に耳を傾け、注意を払うべきものである。逆にわたしたちが自分で考え、想像し、選択した対象物を執念深く求めることとは比較にならない》¹⁶と、1983年に大学生に向けて言っていました。

よって自分自身への愛着は、自己愛とは何の関係もありません。自分自身への愛着は、その本来の姿と広大さの中で、わたしたちを成している要求、わたしたちの根源的な必要の発見にわたしたちを開きます。心の貧しい人とは、いったい誰のことでしょうか。《自分がつくられた目的、自分を成しているもの、つまり果てしない渴望[…]、限りのない期待以外には何も持っていない人のことである。人が期待するものが際限なく積み重ねるから限りのない期待というのではない。そうではなく、[貧しい人は]何も[後には自分を失望させるであろう具体的なものを]期待せず、限りなく心を開いて生きているのである[…][一見矛盾しているようにさえ見えます]。クレメンテ・レボラの詩に“わたしは誰も待っていない…”、にもかかわらず[…]、全身を乗り出している[…]とあるように》¹⁷とジュッサーニは続けます。これこそが人間のオリジナリティです。人間のすみからすみまでとらえるのに、まだ何であるかわからないものに向かって全身を乗り出していることです。

人間は期待だというのがわたしたちの本質です。けれども、何を期待しているのでしょうか。人間の心は、無限を期待し、限りなく期待します。貧しい人とは、期待そのものである人のことであり、自分が知らないもの、自分が測れないものに、自分を成していて、抵抗できないほど自分を魅了するものに傾いている人のことです。

人間を矮小化せずに全体的に把握することを知っている人にはなかなか出会えません。ジュッサーニの話聞いた時の印象は、今でも忘れられません。その人の人間性を、その人を成しているすべてを受け入れるまなざしは、わたしも同じように自分自身を受け入れたいと思わせました。わたしの人間性をこれほどまでに受け入れてくれる人がいたのかと思うと、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そのようなまなざしで見つめてくれる人が存在することに気づく時、それは解放です。《真剣に自分を愛するというのは、自分が必要としているものを限りのないものとして感知することである。しつこいようだが、限りがないというのは、人が10万個のものを欲しがり、その後10万個+1個のものも欲しがるといような意味ではない！自分の要求、必要なもののイメージをまったく持っていないからこそ限りがないのである。人は要求・必要、“そのもの”なのである》¹⁸とジュッサーニは続けます。期待なのです！このようなことが言えるようになるには、どのような経験が必要なのでしょう！わたしたち一人一人は要求・必要《そのもの》、限りのない要求・必要であり、その要求・必要はあらゆる可能なイメージよりも先にあり、それらを超えるものです。

¹⁶ 同上、 p.296 逐語訳

¹⁷ 同上、 p.298 逐語訳

¹⁸ 同上、 p. 299 逐語訳

3. 《もしもあなたが天を裂いて降りてきたならば》

期待を真剣に受け止めるということは、何がそれを満たすのかという不安がなくなるということではありません。この不安は、わたしたちの人格と歴史を貫いています。わたしたちの中には、矮小化できない、唯一限界のないものとしての期待があるので、それがどのように満たされるかを想像することはわたしたちには不可能なのです。謎です。期待は、わたしたちが知らない、あらゆる識別や尺度を超えた“何か”に向けられています。これは受け入れがたいことですが、人間の偉大さはここにすべてあるのです。

初めてレオパルディを読んだ時のことは忘れもしません。彼の《この世のどんなことにも満足しない》¹⁹というのは、人間の偉大さの最大のしるしです。人間に対するこのようなまなざしはめったにないものです。多くの人にとって、地上のもので満足できないことは不幸なことなので、身近なもので満足できるように、この期待を減じてどんなことでもするでしょう。反対に、ミゲル・デ・ウナムノは、《過ぎ去るものではわたしは満足できず、[...]わたしは永遠を渴望する[...]それがなければ、他のすべてのものはどうでもいい。それが必要なのだ、必要なのだ！それがなければ、生きる喜びはなくなり、生きる喜びがわたしに言うことは何もない。“生きなければならぬ、人生に満足しなければならぬ”というのはあまりにも簡単なことだが、それに満足できない者はどうすればいいのだ？》²⁰と書いています。

この不満は、想像を絶する大きなものを指しているのです。《人間の現在の状態は、何の準備もすることができず、その現れをまったく予測できない出来事への純粋な期待である。》²¹それが何なのか、どのように起こるのかはわかりませんが、わたしたちはそれを待っているのです。それこそが、わたしたちが何よりも待ち望んでいるものであり、すべての根底にあるものなのです。今も昔も、二千年前と同じように。

エルネスト・エロー（フランスの作家）は、イエスの時代について述べながら、そのことを《彼らが待望している間、古いローマ世界は忌まわしい奇跡を成し遂げ、対立する野心が戦争を起こし、地上ではカエサル・アウグストスの王権に屈していた。地上ではまだ、そこで起こっていることの重要性に気づいていなかった。戦争と不和の騒音に呆然としていた世界は、重要なことが起こっていることに気づかなかった。それは、深いところにある望みを厳粛に待っていた人々の沈黙である。地上ではそのことを何も知らなかった。今日において再びやり直すにしても、当時と同じようにどうすればいいのかわからないだろう。もし強制的に気づかされたなら、当時と同じような無知で無視し、同じように軽蔑するだろう。つまり、知らないうちに地表で実現していた本物のことは沈黙だった。この沈黙は、真の行動だった。それは、言葉が欠乏したネガティブな沈黙ではなく、どんな行動よりも能動的なポジティブな

¹⁹ レオパルディの有名な一節を全文転載。《(わたしの魂は) この世のどんなことにも満足しない、いや、地球全体に満足しないのである。果てしなく広がる空間や、天体の驚くべき数と巨大さを認めながらも、自分の魂にとってそれらが貧弱で些細なものだということを理解するのだ。天体の数は無限であり、宇宙にも限りがないと想像したところで、わたしたちの魂と望みは、その宇宙より広いと感じるのである。わたしたちの魂は自分を取り巻くすべてのものが不十分で、無価値であることを絶え間なく訴え、空虚さを味わうのである。だから、退屈は、人間の本質に見られる偉大さと気高さの最高のしるしだと思われる。》 G. Leopardi, «Pensieri», LXVIII, in Id., *Tutte le poesie e tutte le prose*, Newton & Compton, Roma 1997, p. 640 逐語訳

²⁰ M. de Unamuno, *Cartas inéditas de Miguel de Unamuno y Pedro Jiménez Ilundain*, a cura di H. Benítez, Revista de la Universidad de Buenos Aires 3 (9/1949), pp. 135, 150; citato da p. Raniero Cantalamessa, *Vi annunciamo la vita eterna (1Gv1,2)*, Seconda Predica di Avvento, cantalamessa.org, 11 dicembre 2020 逐語訳

²¹ J. Daniélou, *Saggio sul mistero della storia*, op. cit., p. 216 逐語訳

沈黙だった。オクタウィアヌスとアントニオが世界の治世を争っている間、シメオンとアンナは待っていた。彼らの中でより行動していたのは誰だろうか?》²²と適切に捉えています。

ベネディクト 16 世はこの期待の不思議について《イエスが生まれる前の時代、イスラエルはメシアを強く待ち望んでいました。メシアとは、ダビデ王の子孫の、油注がれた者です。このメシアがついには[イスラエルの]民を[道徳的・政治的]奴隷状態から解放し、神の国を築きます。けれども、メシアが、正しい人ヨセフのいいなずけである、マリアのような身分の低い少女から生まれるなどとは、だれも想像していませんでした。マリアもそのようなことを考えもしませんでした。しかしマリアは、心の中で主を深く待ち望んでいました。マリアの信仰と希望は燃えるように熱心でした。そのためメシアはマリアを母にふさわしい者と考えたのです。いずれにせよ、神ご自身は世の始まる前からマリアを準備しておられました。神の期待とマリアの期待の間には不思議な対応関係があります。[マリアは「恵みに満たされた」被造物です。]マリアは、いと高きかたの愛の計画に完全に心を開いていました》²³と述べておられます。

シメオン、アンナ、マリアに見られる期待は、単なる過去のものではありません。そうではなく、当時と同じように静寂の中で、当時と同じようにスポットライトを浴びることなく、わたしたちの人間性の深み、心の静寂、自分自身の奥底にこの期待は存続しているのです。そして、今も燃え続けています。ある大学生は《わたしの人間性は、それを完遂してくれる「存在」を常に待っている》と書いてきました。ドイツの偉大な詩人であるリルケも《おまえは相も変わらず むなしい期待に心を散らしていたのではないか、見るもの聞くものすべてがあたらしい恋人の予告であるかのように》²⁴と明言していることです。本来、わたしたちの心を成している期待とは、応えてくれる存在、わたしたちの人間性を救い、保ち、完遂してくれる存在を待つことです。

ダニエレ・メンカレッリは、最新の自伝的小説の中で《わたしは母に、わたしが本当に必要としているものを伝えたいと思う。それはわたしがこの世で最初の叫び声を上げたときから、常に同じものだ。わたしが長い間求めているものは、簡単には言えず、複雑な概念で説明しようとし、人生の最初の20年間は、それを表現するための最良の言葉の探求に費やした。そして、多くの言葉を使い過ぎたので、逆の方向に進まなければならないことに気づき、一日一日、必要のないもの、余計なものを一つずつ取り除いていった。一つの言葉にたどり着くまで、少しずつ短くして、余分なものを切り取った。生まれた時から、生まれる前から、影のようにずっとわたしのそばに横たわっているわたしが本当に欲しいものを表す言葉。救い。この言葉は自分以外の人には言わない。だが、死よりも大きな意味を持っているその言葉はこれだ。救い。わたしのための。電話の向こうの母のための。すべての子どもたちとすべての母親のための。そして、父親たちの。そして、すべての過去と未来のすべての兄弟たちの。わたしの病は救いと呼ばれる。どうということだろうか?誰に言えばいいのか?》²⁵と書いています。

人間の打ちひしがれていても情熱的な意識の頂点で、わたしたちの人間性の叫びが爆発します。それは、いつの時代であっても人間の心の奥底からも湧き上がる要求のようなもので、《どうか天を裂いて降ってください》²⁶という計り知れない「神秘」への祈りです。これは、わたしたちの日毎の目覚めと、そ

²² E. Hello, *Fisionomie di Santi*, "La Torre d'avorio" - Fògola, Torino 1977, pp. 58-59 逐語訳

²³ 教皇ベネディクト 16 世の 2010 年 11 月 28 日の「お告げの祈り」のことば 期待すること 中央協議会

²⁴ R.M.リルケ、*ドイツの悲歌*中の「第一の悲歌」、31-32 節、手塚富雄訳 岩波文庫、東京 2010 年、p. 9

²⁵ D. Mencarelli, *Tutto chiede salvezza*, Mondadori, Milano 2020, pp. 22-23 逐語訳

²⁶ イザヤ 63,19

の日のすべての行為の中に暗黙のうちに含まれている要求です。自分が待っている《あなた》が誰であるかを知らない人たちにとっても同様です。《どうか天を裂いて降ってください》これは、人生を無駄に生きたくないと思う人の理性と愛情の要求です。そのため、彼なりに人間を熟知していたモンターレは、《待つことはもっとも完全な喜びである》²⁷と書いています。

わたしたちは、どのように現れるかが分からないものを待っているのです、問題は知性ではなく、注意です。教皇フランシスコが聖アウグスティヌスの言葉を引用して《"Timeo Iesum transeuntem"(Sermones, 88,14,13)、“イエスが通り過ぎても、わたしは気づかないのではないかと恐れる”。自分の興味あるものに惹かれ、多くの虚栄心に気を取られ、本質的なものを見失う危険性があるのです。だからこそ、今日、主は“すべての人に目を覚ましていなさい”(マルコ13,37)と繰り返されるのです。目を覚ましていなさい、注意していなさい》²⁸と指摘してされているように、わたしたちが願い求めなければならないのはこのことです。

²⁷ E. Montale, «Gloria del disteso mezzogiorno», da *Ossi di seppia*, in Id., *Tutte le poesie*, Mondadori, Milano 1990, p. 39 逐語訳

²⁸ Francesco, *Omelia alla Santa Messa con i nuovi Cardinali*, 29 novembre 2020 逐語訳

3 章

予測不可能な衝撃

現在は、その衝撃によって、今まで当たり前だと思っていた生活の仕組みをあらわにしました。《事実とはこういうものだ。どんな思い上がりの気泡をも弾けさせ、理論を打ち砕き、確信を破壊する。》¹多くの人にとって、決して完全に見ることができない究極の意味の要求が、生と死に直面した時に、ほんの少しの間ではあっても、突然切実になりました。新しいことではありませんが、多くの明白な事実は崩壊し、もはやわたしたちの文化的背景の一部ではなくなっています。モーリンが言ったように、不確実性が現代の特徴であるとすれば、その不確実性はパンデミックの危険性と執拗性によってさらに深刻化しました。どのような立場から出発しても、既成概念にしがみついたり、惰性で人生を意のままに動かすという錯覚に頼ることは難しくなっています。しかし、逆説的に、わたしたちの一枚岩のような思い上がりが粉々になるのを目の当たりにし、わたしたちの自信の壁に亀裂が入るのを体験するのは助けになるのかもしれない。レナード・コーエンは、そのことを《すべてのものには裂け目がある/そこから光が入るのだ》²と歌っています。

1. 《予期せぬことが唯一の希望である。しかし、そう言うのは愚かだと言われる》

戦いは、毎朝、再び始まります。皆はそれぞれ目を覚まして、完遂への期待に満ちた一日の旅に立ち向かう気になった時に、その戦いを見ることができます。モンターレの有名な詩、‘旅の前に’に効果的に描かれているドラマです。

《旅の前には時刻、乗り継ぎ、停車駅、宿泊そして予約（バスタブやトイレのある浴室付きかシャワー付きの部屋、ベッドは一つか二つ、またはフラット）を細かく調べ、アシェットガイドとミュージアムガイドを調べ、エスクードからフランへ、カペイカからルーブルへ両替をし、分けておく。旅の前には、その旨を友人や親戚に知らせ、スーツケースやパスポートをチェックして、衣類を買い足し、髭剃り用の剃刀を補充し、場合によっては単なる厄除けのお守りである遺言書に目を通す、なぜなら飛行機事故は確率としてはゼロに近いから。旅の前は落ち着いてはいるが、出発しないことが賢いのではないかと、戻ってくる喜びは過剰なコストがかかると疑う。そして、出発、すべて OK。そしてすべて最善であり、無駄である。

そして、これから
わたしの旅はどうなるのか？

¹ I.B. Singer, *Nemici. Una storia d'amore*, Adelphi, Milano 2018, pp. 145-146 逐語訳

² «There is a crack, a crack in everything / That's how the light gets in» (Leonard Cohen 作詞作曲«Anthem」、アルバム *The Future*, 1992, © Columbia Records)

何もわきまえず、入念に勉強し過ぎた。

想定外のことが唯一の希望である。

しかし、こんなことを言うのは愚かなことだと言われる》³

わたしたちは人生の旅、日毎の旅、あらゆる時間の旅に立ち向かうために、予定に合わせてすべてを準備することができます。にもかかわらず、どんな旅になるかわからないうちに自分自身に《すべて最善であり、無駄である》と認めることができます。どんなに無意識であっても、気が散っていても、わたしたちは自分の期待の大きさを予感し、すべて準備したことが目的にかなわないこと、期待しているものに応えられないこと、朝起きた時や旅を始めた時の期待を満たすことができないことを、前もって確信しています。これまでの経験から学んでいるのです。だからなぜ《想定外のことが唯一の希望である》かわかります。つまり、わたしたちの計画に含まれていないこと、わたしたちの準備や予測を超えることが起こらなければならないのです。《求めてもいないのに、無償で、不意に、偶然の贈り物として外からやってくるものだけが、純粋な喜びである。同時に、本当に善良なものは外からのみ与えられるものであり、自分の努力では決して得られない。どのような場合でも、自分より優れたものをつくり出すことはできない》⁴のです。

この予想外のことが起こり得るとするのは人間の期待の頂点を表します。《しかし、そう言うのは愚かだと言われる》とモンターレは締めくくっています。そのことは、一方で、そのような不測の事態が《唯一の希望》だと主張しながら、他方でそれが起こる可能性を否定しているのです。“学識豊かな人々”は、不測の事態が実際に起こり得ると考えるのは子供じみていて、経験の浅い人が考えることに過ぎないと断言します。わたしたちも、何度もこの誘惑を感じ、《そうだよね、そう言うのは愚かだよね》と同意してしまいます。しかし、そうでしょうか。もし、理性を経験に従わせてこの言葉に挑むならば、唯一の真の愚かさは、可能な限り境界を自分で線引きしながら、現実をわたしたちの《すでに知っている》という狭い視野の中に閉じ込め、もうすべてを知り尽くしていると思込み、結局何も期待しないことだと気づくでしょう。

ミシェル・ウエルベックは最新の小説の中で、責めさいなまれた主人公に《真の夜、半年続く極夜の中でも、太陽のイメージや思い出は残るのではという気がした。ぼくは終わりのない夜に入りこんでいたが、それでいながら、自分の奥底に何かが残っていた、希望と言っては言い過ぎの、不確実性とでもいべき何か。同様に、個人的に勝負に負けて、最後のカードまで出してしまっても、ある人たちには[...]天で何かもう一度状況を作り直し[...]神などというものの介入や存在さえ人生で一度も感じはせず、自分に好意的な神の采配に特に値しないと感じていても、そして自分が人生を構築する上で限りなく過ちを重ねてきたとみなし、誰よりもそのような采配を受けるに足りない気が付いていても》⁵と言わせています。

本当の意味での愚かさとは、その出来事が起こる可能性を否定することです。ジュッサーニは理性に対する本当の意味での罪は《理性の最高のカテゴリーである可能性のカテゴリーを否定する》⁶ことだと言っています。懐疑的な態度はもっとも理性的に見えるにもかかわらず、実際には理性に対する犯罪です。すべてを知り、すべてを支配し、起こるかもしれないことをすべて予見できると主張することは、それこ

³ E. Montale, «Prima del viaggio», da *Satura II*, in Id., *Tutte le poesie*, op. cit., p. 390 逐語訳

⁴ S. Weil, *L'ombra e la grazia*, Bompiani, Milano 2002, p. 85 逐語訳

⁵ ミシェル・ウエルベック、セロトニン、関口涼子訳、河出書房新社、2019年、p.252

⁶ ルイジ・ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、ドン・ボスコ社、東京 2015年 p.42

そが愚かなことであって、誰にもできず、モンターレが言うような予期せぬ出来事の可能性を排除してしまうのです。可能性のカテゴリーは、理性の本質に属しています。したがって、唯一真に理性的な立場は、可能性を残しておくことです。最初だけではなく、常に、今、生きているどの瞬間にでもです。

わたしたちの能力を超えた予測できない何かが起こる可能性を残しておくことは、理性を放棄することではなく、現実に向けて開け放たれた窓であり尺度ではない理性をその本来の性質と原動力に従って、最大限に生かすことです。わたしたちの尺度を超えるすべてのものに対して先立つ懷疑は、理性の頂点ではなく、理性を阻止し、わたしたちが考える以上に影響を与え、ほとんど気づかないうちにわたしたちの中に入り込んでいきます。⁷

ある若者が《今回のフラテルニタの黙想会の問い“希望はあるのか”を読んだ後、自分がどのように過ぎて来たかを簡単に話したいと思います。この数か月をよりうまく表しているのが、キエッフォの *Amare ancora* なお愛するという曲の“けれども愛しい人よ、何という苦々しさだろう/わたしが見るように物事を見ることは”という歌詞です。わたしは大学を始めた頃のみずみずしさがなく、まなざしにはあの頃と同じような素朴さがなくに気づきます。世界に侵入する懐疑的な見方は、わたしにも侵入しているのです。物を与えてくださるのは神であり、それが贈り物であるということに大きな抵抗を感じるが多々あります。美しい風景を見た時、その美しさが自分の心に一致するという体験に微かな疑念を抱く自分がいます。その疑念は、わたしの心を傷つけ、大きな悲しみをもたらします。このように物事を見るのは何と苦々しいことか！わたしがこのような苦い思いをするのは、わたしが勉強する音楽、空、海、山、木、すべては、何よりもわたしを愛し、わたしを全宇宙で唯一無二のまたとない存在として肯定される「方」のしるしとして認識されている現実に対する別の見方の証人であり、主人公となってしまったからです。この仲間のうちに存在すると認識しているキリストに対しても、同じように懐疑的になり、非常に苦しい思いをしています。この曲は、“子供に戻って、すべてが与えられていること、すべてが新しく解放されていることを思い出すだけで十分なのだ”と続けています。わたしは CLU[CL の大学生会]の最初の数年にこのことを経験しましたが、それは本当に地上での天国でした。》そして、《子供のようになり、以前のように物事を見るようになる希望はありますか。墮落してしまったこのまなざしを回復させるのは可能なのでしょうか》と問うて来ました。

不信がわたしたちを襲い、その不信がわたしたちの歩みの中に現れるどんな美しさの手がかりをも台無しにしてしまうのです。⁸そのような疑念が、目の前に現れる美しいものすべてに、わざわいのように影を落としているのです。そして、それがもたらす悲しみの底から《子供のようになり、以前のように物事を見るようになる希望はありますか。墮落してしまったこのまなざしを回復させるのは可能なのでしょうか》という問いが生じるのです。これは《けれども、年をとっているわたしが再び生まれることができますか》⁹という年老いた律法学者のニコデモの問いと同じです。

これを引用句の一つとして、あたかも一握りの教養で自分たちの貧しさを覆うかのような修辞学的方法ではなく、わたしたち自身の深みからその真実のすべてにおいて湧き出るのを見出しながら《けれ

⁷ ワシリー・グロスマンは、彼のすばらしい小説の登場人物の言葉として《ここでは人間には疑惑以外何も残っていないのではないかという気がしてきた》と述べている(V. Grossman, *Vita e destino*, Jaca Book, Milano 1998, p. 317) 逐語訳

⁸ ダニエルは《これは現代人の人間のドラマである。わたしたちはあまりにも騙されすぎてきたので真の言葉が信じられなくなり、今日、不信の世界に生きている。そんな世界は恐ろしいものである。》と指摘する。(J. Daniélou, *La cultura tradita dagli intellettuali*, Rusconi, Milano 1974, pp. 28-29) 逐語訳

⁹ 《年をとった者が、どうして生まれることができますしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができますでしょうか。》(ヨハネ 3,4)

ども、年をとっていても再び生まれることができますか》という言葉を繰り返すことができるのは、何という恵みでしょう！

わたしたちは、自分自身の中に、可能性への心の開きの欠如や閉じてしまうことへの傾き、起こることに対して扉を閉めようとする態度をしばしば見出します。ある大学生は、《第2波までの数ヶ月間、どれだけ多くの時間を無駄にしたことでしょうか！すべてがわたしには何の関係もないように思えました。そして、11月には様々なことが重なり、それらが突破口を開きました。まず、新型コロナウイルスの陽性反応が出たので、25日間自室での隔離生活が始まりました。逆説的ですが、慣れ親しんだ顔や新しい顔の両方に、もっとも寄り添ってもらったと感じた時間でした。まさに隔離された月に、わたしは大学の選挙の準備に関わることになり、とても忙しい日々でした。11月に寄り添ってくれた仲間は、わたしにとって本当に特別なものであり、すべてが起こった特殊な状況を考えてなおさらです。隔離されていた最後の数日間にわたしの誕生日もありました。友人や家族から完全に隔離され、距離を置いていた状態で、非常にクリエイティブな方法で一日中わたしに寄り添ってくれた人々のわたしに対する大きな無償の愛情を再確認することができました。自分はラッキーで、感謝で一杯です。アズルメンディ¹⁰はラジオを通して運動に出会い、一方、わたしは部屋に一人でいるときにZoomでの呼び出しと選挙によって引き上げられました。物事に向き合って生きるためには、新型コロナウイルスが必要だったのででしょうか。実際に「神秘」がわたしたちに触れる方法には、予測可能なものやふつうはありません。ですから、開いた心構えを願うことが基本的な問題だと自分に言い聞かせています。けれども、時にはまさにそうした心構えはドラマチックに感じられます。無が日々を襲えば襲うほど、苦勞します》と書いています。

この開いた心構えがいかに基本的なものであるかに気づくことは、すでに大きな一歩です。多くの場合、心を開くこと、開いた心構えは些細なことのように感じられますが、これこそが根本的な問題であるがゆえに、イエスは《心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たち[のみ]のものである》¹¹と言います。つまり、心の期待を満たすことができるものが、わたしたちの中に、それを受け入れるための心の開き、開いた心構えを、その光を通すための《裂け目》を見出す必要があるのです。¹²

わたしたちには不可能に思えると言いました。しかし、もしも起こったら？もし出会ったら？もし彼がわたしたちを探しに来たら？マヌエル・ピラスがエル・パイス紙に書いているように、《天国の美しさがこの地球上のすべての男女のために落ちてきたら》¹³どうでしょう？もし不測の事態が起こったとしても、理性の行使と密接に結びついている究極の開いた心構え、誠実さが必要であり、決して当然のことではありません。《“理性的”とは、自分の理性を経験に従わせる者のことである》¹⁴というジャン・ギットンの言葉は、生きていく上で決定的であるため、わたしが自分自身に絶えず繰り返す言葉です。予期せぬことが起こったとき、人はそれぞれ、自分の理性を経験に従わせる心の開きがあるかどうかを確認する、

¹⁰ バスク地方の人類学者であり、哲学者でもあるミケル・アズルメンディは、その長いキャリアの中で、移民、ナショナリズム、ジハード主義、宗教的経験の公共的価値など、現代社会の最も差し迫った問題を扱ってきた。CLとの出会いに、彼はこの本、*抱擁 出会いの文化に向かって*を捧げた。(L'Abbraccio. Verso una cultura dell'incontro, pubblicato in Spagna dalla Editorial Almuzara nel 2018 e in Italia dalla Bur-Rizzoli nel 2020 3章2 (予期せぬことが起きたという人がいる)を参照)

¹¹ マタイ 5,3

¹² これについてルイスは《真摯に道徳的な努力をすることで、自分自身に新たな動機を与えることができるわけではない。キリスト信者の生活の第一歩を踏み出した直後に気づくように、わたしたちの魂にとって本当に必要なことは、神によってのみ成し遂げられるのだ[...]. わたしたちは、せいぜい自分の中でこのことすべてが行われるのを許すくらいだ。》(C.S. Lewis, *Scusi, qual è il suo Dio?*, GBU, Roma 1981, p. 190). 逐語訳

¹³ M. Vilas, «La Poesía», *El País*, 29 dicembre 2020 逐語訳

¹⁴ J. Guignon, *Arte nuova di pensare*, Edizioni Paoline, Cinisello Balsamo (Mi) 2009, p. 71 逐語訳

つまり試すのです。こうした開かれた心は、人が子どものような心を持っていない場合、長い歩みの後にのみ到達する成熟した態度です。¹⁵

自分の態度に気づかされる場面はたくさんあるでしょう。《わたしは手術室の看護師ですが、11月に文字通り新型コロナウイルスICUに投げ込まれました。わたしは、自分が持っている「助けたい」という気持ちから、それができると思っていました。まったく間違っていました！わたしが直面した現実は、耐えられないほど厳しいものでした。自分自身についてのすべての認識、すべての確信は、その病棟の敷居をまたぐ度に一掃されてしまいました。このままではいけないと思い、病棟の変更を要請しました。けれども、痛みを伴う問いには答えが必要であって、状況を変えることはできないのです。ですから、問いはそこに残っていました。新型コロナウイルスの病棟に戻って気づいたのは、まず、緊急採用された非常に若い同僚たちがいて、彼らは仕事に満足し、わたしを驚かせるほどの情熱を持っていて、そこにいたいという気持ちを蘇らせてくれました。わたしたちは、顔にはっきりと希望が現れている人に従う必要があります。もう一度、視野を広げてくれる人が必要なのです。》

2. 予期せぬことが起きたという人がある

《わたしたちはメシアに出会った》¹⁶これは歴史を貫く告知です。つまりわたしたちの心が期待していたことが現れ、モンターレが言っていた予期せぬことが、ある時ある場所で起こったのです。この告知は、ヨハネとアンデレがナザレのイエスにヨルダン河の川岸で遭遇した日から、二千年余りの歴史を貫いています。

この告知が届いたわたしたちは、その信憑性の問題、つまり、ナザレのイエスは本当に自分が主張している人物なのか？真に人となった神なのか？という問題に直面しています。告知の内容を考えてみましょう。何が起こったのでしょうか？わたしたちが期待する未知のもの、わたしたちの心が切望する無限のもの、《限りないもの》が人となり、現れたということです。《^{ことば}言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。》¹⁷

わたしたちの暦は、いまだにその事実、その出来事の日に合わせて設定されています。今は紀元2021年です。しかし、単に言葉での伝達だけでは、わたしたちにとってその告知が信憑性のあるものにはなりません。何らかの宗教的書物や歴史書に書かれていたり、毎年暦に書かれていたりするだけでは、十分ではありません。どのようにしてその内容を確認することができるのでしょうか？彼が地上から姿を消した翌日であっても、あるいは二千年後にやってきた人であっても同じことですが、《自分は真実であるというイエスの主張が本当にそうであるかどうかを、どうやって見分けることができるでしょう？》¹⁸

まず、歴史の中で事実として起こったのだから、今日も事実として遭遇し得るものでなければならぬ、わたしたちの期待に応えるものとして認められなければならないということから始めましょう。キリスト教の告知の本来の特徴を尊重する必要があります。それは、出会いの方法を意味する《人となった

¹⁵ ルイスは、《キリストが言おうとしたことは、決してわたしたちが子供のような知性にとどまるべきだと言うことではない。逆に“鳩のように素直”であるだけでなく、“蛇のように賢く”あれと言われたのだ。「彼」は、子供の心で大人の頭を持つことを求めているのだ。》(C.S. Lewis, *Scusi, qual è il suo Dio?*, op. cit., p. 92 逐語訳)

¹⁶ ヨハネ 1,41

¹⁷ ヨハネ 1,14

¹⁸ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, Rizzoli, Milano 2014, p. 9 逐語訳

神》¹⁹、道端で出会うことのできる人、まったくの人間としての存在ということです。

二千年前に人間の無限の渴望を叶える事実であったのなら、今日において言説やルールであるはずがありません。ですからどんなに権威のある本であっても、その記述を読むだけでは十分ではありません。人間の心は変わっておらず、同じように満足を求めているので、それに一致できるのは事実だけです。新型コロナウイルスのワクチンのように、効力を確認するためには、誰もが手の届く現実的なものでなければなりません。発見されたというだけでは不十分で、誰もがそれを見て、触って、自分への有効性を見出す必要があるのです。

二千年前のあの《事実》は、最初にイエスに出会った人々と同じように、今日でも遭遇できるものであるべきです。しかし、この存在は、二千年後の今日、あなたやわたし、現代の人間にどのようにして出会うことができるのでしょうか。どんな顔、どんな姿をしているのでしょうか。《二千年前のあの男、イエス・キリストは異なる人間性に隠されて、その装いの下に隠れて現われる。異なる人間性と出会い、衝突するのである。それは、わたしたちのどんな考えや想像もはるかに超えて根源的な要求に一致するため、わたしたちを驚かせる異なる人間性との出会いの経験である。わたしたちが予想もせず、夢にも思わなかったもので、不可能で他の場所では見つけられない経験である。》²⁰

ミケル・アズルメンディに起こったように。彼は重篤な病状で入院していた時に、それまでの自分に起こったこととは異なる人間性を持った新しい話し方に遭遇しました。ラジオで、物事を他とは異なる見方をするジャーナリストの話聞いて、ついに自分（の心）と一致すると認めたのです。退院すると、同じグループの別の人と出会い、同様に人間的なまなざしで見つめられたため、自分の根源的経験にまったく応える経験をしました。さらに別の人、またもう一人と出会っていくうちに、その人たちが皆同じ話し方で、同じまなざしを持ち、より人間的な態度で現実立ち向かっているのを目の当たりにしたのです。そして、それが彼を魅了し、称賛させ、心の奥底から挑発したのです。²¹

それは、すでにある出会いを経験し、キリスト教のような体験に浸って生きている人にも起こり得る、いや、起こらなければならない躍動です。さもなければ、出会いの後、モンターレの懐疑に陥ってしまいます。

一人の大学生が《数日前まで、わたしの人生は輝きを失い、しばみ始めているように思えました。ある日、父は職場から電話を受け、無症状の陽性顧客と接触があったので予防措置としてPCR検査を受けるように言われました。2日後、結果は陽性で、全員隔離されました。翌週、危険を逃れたわたしは、ほとんど無気力で生活を続けました。友人と話をする気力もありません。なぜなら、わたしの家庭には、あなたが「出来事」と呼ぶようなものは存在しないからです。数日後、この足が地に着かない状態が続くことに嫌気がさし、一瞬でも真のいのちを取り戻そうと具体的な行動（家事の手伝い、家族のための料理）に全力で打ち込もうとしました。効果はなく、むしろ限界によってさらに沈んでいきます。今度は読書に没頭しました。しばらくして時間を見ると午後6時半で、あなたと大学たちとの集いがあることを思い出しました。“参加するか、参加しないか”という2分ほどの迷った後、接続しました。ある時点で誰かが、“大学の選挙で、予想外の大満足の結果を得て充実感を味わった後、妙な気分の悪さに襲われました。通常の日常生活に戻った今、どうすればあの充実感を再び味わえるのでしょうか。”と言うのを耳にしまし

¹⁹ 同上、p. 24 逐語訳

²⁰ L. Giussani, *Un avvenimento nella vita dell'uomo*, Bur, Milano 2020, p. 201 逐語訳

²¹ フリアン・カロン、人には称賛するもののみ見える、2020年CL年度始めの日 参照 26 settembre 2020. Pubblicato su: it.clonline.org/publicazioni/altri-testi/varia/vedi-solo-quello-che-ammiri

た。そして、あなたは“妙な気分の悪さを残す個々の事柄は決め手となる…”と答え始めました。電源が入ったかのような瞬間の後は、ずっとパソコンに張り付いて、自分にいのちを取り戻すための言葉を待ち構えている状態でした。Zoomでの集まりが終わり、“本物の生活”に戻りました。夕食をとり、テーブルを片付け、テレビの前にしばらく座っていると、すべてが普通のことに思えました。けれども、ベッドに入ると眠れなくなってしまいました。あなたが話したことを思い出し、今思い返しても感動するほど、自分のプライドを捨てて人間らしい祈りを捧げました。次の日、わたしはもうわたしではなかったのです！わたしは“信じられない”落ち着きを感じ、そのことは、家族に接する態度や、料理をしたり、不思議にも想像を絶する喜びをもって勉強をしたりすることに変わりました。集まりには接続したくないと思ったわたしです！感謝の気持ちでいっぱいです。このように生きることは素晴らしい！》と書いてきました。

今日わたしたちに届く告知の真実を認識することができるのは、新しい人間性を持つ出来事に遭遇し、それがわたしたちの中にもたらす変化、《“信じられない”—今の若い人たちが驚くほど素晴らしいものを表現するときを使う形容詞—落ち着き》を経験することによってのみで、人間はそれを自分に与えることができないから《想像を絶する喜び》なのです。それは、カバシラスが、《新しい人生・いのち、それは古いものとは何の共通点もなく、人間の本質でありながら、神のいのちであるために、想像以上に優れたものである》²²と述べていることです。

3. キリスト教の事実は矮小化不可能

新しい人間性を生み出すこの《事実》とは何か、もう少し詳しく見てみましょう。わたしたちは皆、キリスト教の告知を多少なりとも伝え、様々な反応を引き起こす歴史の中に身を置いています。再びアズルメンディの話になりますが、彼は認められた人類学者および社会学者であり、キリスト教を、その教義や道徳、価値観についても知っていました。しかし、すでに歳をとっていた彼にキリスト教への興味を再び起こしたのは、そのような知識ではなかったのです。逆に、彼は何年も前から距離を置いて、俗に言う封印をしていたのです。何年前かに彼の中で、以前の知識が築き上げた壁を壊して、もう一度キリスト教とは何かを知りたいという好奇心と望みに火をつけたのは何だったのでしょうか？何が彼の考え方や姿勢を挑発したのでしょうか。彼の学者として、また人間としての説明に矮小化することのできない、キリスト教を含め、それまで現実を見る時に用いていたカテゴリーには収まりきらない《事実》です。

それは、彼の一般的な発想の一部と見なすことができない、組み込まれたりすることのできない《事実》であり、彼が用いていた概念的な枠組みや思考パターンでは説明できないものでした。アズルメンディは、ジュッサーニが言う²³ように、あのラジオ番組が表した事実、そして退院後に起こった他の出会いに表れる事実を、まさにその異例さによって、自分の持っていた概念、一般的な抽象概念の一つとして《包括する》ことが、つまりその事実を組み入れながら結びつけることができなかったのです。その事実の異例さのあまり、彼はそれに心を引かれたのです。つまり、その事実で惹きつけられ、興味と愛着を持ち、心をつかまれていることに驚いたのです。そして、このことが彼に新しい認識と、あらゆる物事に対する新しい接し方をもたらし、彼を生まれ変わらせたのです。彼はより自分らしくなったのです。先に引用し

²² N. Cabasilas, *La vita in Cristo*, op. cit., p. 126 逐語訳

²³ 《一般的な考え方[...]は、判断するために、常に抽象的な普遍性の中に個別のものを包含しようとする傾向がある。》L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, pp. 90-91 逐語訳

た友人の言葉を借りれば、《次の日、わたしはもうわたしではなかったのです！》つまり、より自分だったのです。

既成の概念や自分たちの慣れた枠組みに、起こるすべてのことを包括することはできません。矮小化させず、それ自身の中に何か異議を持ち、突破し、利用可能な概念的枠組みを超える事実があります。たびたび言っているこれらの《事実》は、新しさと、比較することができないほど不可能と思えるような非常に望ましい人間の真実とを自分自身のうちに伴っている《人、または人のその瞬間》²⁴です。ですから、聖パウロは《新しく造られた者》と言うのです。《新しい人であるというのは、自分の中にすでに存在しているものを通して、自分の人生・いのちすべてで、来るべき「方」を告知する人だという意味》²⁵です。このような事実に出会い、それに惹かれた人は、現実の生き方で同じような新しさを自分の中で経験し始め、《このように生きることは素晴らしい！》とまず自分が驚くのです。

《親愛なるフリアン、この半年の間に、すべてに立ち向かうわたしのあり方に大きな影響を与える出来事がありました。わたしたちがよく話題にしている無が暴力的にわたしの人生・いのちを襲ってきたのです。6月のある日、姉妹の彼氏が突然自殺したという知らせが届きました。大きな悲しみと混乱の日々でした。わたしは出かけないで家で姉妹に寄り添っていました。宗教的なものであれ、そうでなかれ、どんな言説（言葉）も、この出来事がもたらした癒えない傷に苦しめられながら、わたしたちに引き起こしたドラマから、わたしたちを救うことができないことは明らかでした。今日、何がわたしを耐えさせるのでしょうか。二千年前にキリストが死に打ち勝ったのは、今、どのような意味を持つのでしょうか。特に死を選択した人の前で、死がすべての最後の言葉ではないというのはどういうことでしょうか。どうしたら、人生・いのちはより豊かになるのでしょうか。どうすれば、今この世で百倍を生きることができるのでしょうか。》キリスト教の約束として彼女に伝えられてきたすべては、その衝撃に震えますが、それらすべては真実ですか。《姉妹はどうなるのでしょうか？つまり、希望はあるのでしょうか？すぐに、しかしゆっくりと、寄り添ってくれた何人かの友人によって、キリストがわたしのために肉となったという意識を育て始められたということを認めなければならなりませんでした。なぜならそれは、キリストとの関係の親密さと具体性を経験するためだからです。あなたがまなざしの輝き (p.37 注108の箇所) に書いていること、“キリストは今起こっている存在です。[...]その存在に気付くことは、二千年前とまったく同じ経験をするを意味します。すなわち、他とは異なる人間性を持つ存在と巡り合うことです。その存在は、人生・いのちに対して新しさを予感させ、わたしたちのうちにある構造的な意味と満足への渇きに他のどんなものよりも一致するために心を打ちます。[...]今日においても《すべての意味、すべての価値、すべての望ましいもの、すべての正義に叶ったもの、すべての美しさとすべての愛し得るものを含む》出会いの経験を指すのです”を経験しました。キリストは、あの友人たちの人間性を通して、あの数ヶ月間のわたしの傷や抵抗に、わたしの中で「彼の」同時性によって勝利していたのです。そのまなざしは、無駄にされたかに見えるあの命も、それが姉妹や自分の命と交わり合ったことも、何も失われないのだという希望をわたしに抱かせました。このようなことを言うのは、何かにとりつかれているからではなく、これがわたしの経験だからです。わたしにとって、“希望はあるのか”という問いと、今ここに存在する主の肉を切り離すことはできません。》

新しく造られた者というのは、この出来事の結果です。わたしたちは、最初の出来事が今日、それによ

²⁴ L. Giussani, *Un avvenimento di vita, cioè una storia*, op. cit., p. 459 逐語訳

²⁵ P. Evdokimov, *L'amore folle di Dio*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2015, p. 69 逐語訳

って生じた新しい主体のうちに見え隠れするのを見ます。もう一度ジュッサーニの言葉に戻りましょう。新しく造られた者は、《他の人とは異なる現実を知る能力》を持っています。その能力は、《ある出来事に従うことから、自分が「はい」と言う愛着を感じる出来事への愛情 *affectus* から生じる。この出来事は、歴史の中の特定のものである。普遍的な主張をするが、特定の点である。ある出来事を出発点として考えるというのは、まず、わたしがその出来事を決定するのではなく、むしろその出来事によって決定されることを受け入れることである。その中で、わたしの本当の姿や世界観が浮かび上がってくる。これは、判断するために、常に抽象的な普遍性の中に特定のものを包含しようとする一般的なメンタリティーを挑発するものである》²⁶と述べています。

その出来事が人生にもたらす新しさは、最初の出会いの真実性の確認、検証でもあります。わたしが出会った特定のもので、今日におけるキリストの出来事であるかどうか、実際にはどうやって知ることができるのでしょうか。先に挙げた証言のように、《普遍的な主張》、つまり、死というもっとも衝撃的な状況であっても、あらゆる状況や状態を照らすことができるということを証明する場合に知ることができます。

《わたしは、希望とは、心と完全に一致する矮小化できない存在が継続的に起こることにその起源があることに気づいて、ますます驚いています。わたしは、自分を支える事実が与えられていることに気づきました。それは、人々の善意や気質によると言って片付けられるものではありません。12月の初めに、わたしの大切な友人が修道院に入りました。彼がわたしに証してくれた豊かな人間性と人生・いのちへの愛、神に出会ったという確信、そしてこの愛によって“自分にはすでにすべてが与えられている”という確信、“何も失われることはない”からこそすべてを捨てられるほどの確信は、わたしの日々の揺るがないポイントであり続けています。彼が修道院にいることだけで、その生活の形態によって、わたしの心の期待に対する完全な答えが存在し、それに出会うことができるのを力強く思い出させてくれるのです。それはとてつもない記念の助けです。つまり、わたしは、すべてのものとの対話が可能だというたまたまない期待を持って日常生活や物事に立ち向かうのです。しかし、彼の“完全に魅了された”存在と希望にはどのような関係があるのでしょうか？数ヶ月前、別の友人は筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic Lateral Sclerosis (ALS)）を患っていることが判明しました。このような状況のドラマの中で、彼は何度も何度も、夜わたしのところに来て、“今夜も、自分が見たことや起こったことで、感謝しながら喜んで床に就くことができるよ。主は約束を成就しようとしている。”と言う彼のあの顔を脳裏から取り去ることができません。病気がどんどん進行する中で、彼は感謝しているのです。まったく何もできないという状態の中で、彼の心の完全な幸福の可能性を支えているものは何でしょう？彼が見ているものをわたしは見ることができませんが、わたしに与えられている彼をわたしは見ることができます。年末に、わたしが生きるためにもっとも役立つ手段として見出しているもの—「心」—を伝えたいという望みから、共にスカウトの経験をしている若者たちに、『宗教心』の第1章をテーマにした夕べを提案しました。そして12月の終わりに、その年でもっとも美しかったことを分かち合っていて欲しいと頼んだところ（コロナ禍の年なので、苦難、否定的な事柄、苦痛の話しか聞けない可能性がありましたが）、その中の一人が“集会や集いで誰かと心について話すたびに、わたしは「自分の心に耳を傾けているのだろうか。心に従うことができるのだろうか」と自分自身に問いかけます。今年一番の貴重な発見です！”と言いました。わたしは教師ですが、数週間前に学校が閉鎖された時、最初の不満の中で、「今日そこにいて明日にはいなくなってしまう生徒たちを

²⁶ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., pp. 90-91 逐語訳

愛することを学ぶ機会が、もう一度与えられているのではないか。」という問いが浮かびました。このように問かけながらミサに行くと、緊急事態宣言下でも、学校が休みでも、キリストは自分自身をわたしに与え続けられていることに気づき、感動しました。“キリストよ、あなたが生きておられるので、わたしの心は喜んでいきます”、これこそが希望です。どこで生きているのですか。あり得ないと思えるような存在ですが、修道院にいる現実的な友人の存在の中に、病気の中で運命に向かって歩んでいる喜びに満ちた友人の顔の中に、わたしを生み出し、これらすべてのことに気づかせてくれ、世の中に“翻弄されている”若者たちの心に賭けることまで可能にする運動の中に。わたしは、毎日、心との一致を経験させ、キリストが生きていて、すべてであることを思い出させてくれる数多くの事柄を見ているではありませんか！これだけがわたしの支えです。先日、わたしが参加している“カリタティーヴァ（CLのボランティア活動）”として、ある家庭に小包を持って行きました。コーヒーを飲んでいくように勧められ、今話した経験に目を留めて、わたしは初めて勧めに応じることにしました。十分な距離を置きながら、家族全員が部屋にいました。娘の一人が黙ってわたしを見ていましたが、彼女の心の中には“なぜあなたはここにいての？なぜわたしたちに関心を持つ？”と言う問いがあるようでした。キリストが心に宿ると、すべての現実が、たとえなじめないものであっても、住み家となり得るのです。わたしはひざまずいて、この人間的に生き生きとした希望に満ちたまなざしの擁護者である運動に感謝します。なぜなら、運動は、わたしの人生・いのちにおいて肉となる「彼」の存在そのものだからです。》

皆のメンタリティーに挑戦するために、《できごと》はセンセーショナルなものである必要はありません。その特定のできごとの力は、その騒がしさによりません。単なる一陣の風であるかもしれませんが、そこには惹きつける異例さがあります。その力、独自性は、その異例さに起因するのです。アズルメンディは、ラジオで話しているジャーナリストにその異例さをキャッチしたのです。このできごとを示すために、ジュッサーニは1980年のジョバンニ・テストーリとの対話の中で、《存在》²⁷である人について語っています。

話してきたようなできごとを目の当たりにすることはよくありますが、アズルメンディのように単純に従うのではなく、自分の思考体系や既知のものに組み込んでしまうことが少なくありません。したがって、どんな新しさももたらさないのです。このようなできごとを多く目にする事ができるキリスト教の歴史に属しながら、キリスト教を、倫理や儀式、あるいは一般的な想像力から得られたステレオタイプに矮小化し続けるのです。しかし、これらの矮小化はどれも希望を起こさせることはできません。

キリスト教が出来事として起こり、受け入れられると、人生・いのちにもたらされる違いに気づきます。出来事としてのキリスト教の性質を帯びる人は、そのどんな矮小的なイメージをも見破ります。それは、若い友人にも起こりました。彼女は《数日前、あることによって、自分の人生に起こったことを理解することができました。母とクリスマスについて話していて、ある時点で母が冗談めかして、心の底ではサンタクロースの存在を信じたいと言っていたのです。それは、希望をもたらず人物、“この人は何でもできて、すべてのことがうまくいくという希望を置ける”と言える顔が必要だと。この母の一言は、運動に出会ったことが、自分は誰よりも愛されているということだと理解させました。わたしの母は信者であり、毎週日曜日にミサに行っているのにもかかわらず、彼女はサンタクロースに希望を託しています。それは彼女にとって輪郭がはっきりした具体的な顔だからです！わたしにとって、時には神が抽

²⁷ 《わたしは、このような存在である人たちが増えていくこと以外に、希望の兆しを見出すことはできません。こうした人々が増えること[…],そしてその人々との必然的な共感に。》(L. Giussani - G. Testori, *Il senso della nascita*, Bur, Milano 2013, p. 116 逐語訳)

象的なもの、つまりアイデアに矮小化されていることを証明するものでした。むしろ、わたしは毎日神に出会っています。特定の歴史に帰属しているお陰で、存在しているのを認めることができます。この特定の歴史との出会いの中で神を見出したことは、わたしのうちに希望を生じさせました。》と、書いてきています。

矮小化できない存在に遭遇することは、一般的なメンタリティーによるイメージに屈するつらい打撃から解放してくれます。これらの存在だけが、自分の中に、その奥底に希望の基盤を根付かせているのです。

《“希望はあるのか”これは、わたしに決断を迫る問いです。このような時世（わたしは医学を学んでおり、医療状態はこの問いをより身近に感じさせます）では、理論的な答えでは少しの間しか持ちこたえることができません。一日が終わると、数々の問題に睡眠と体力を奪われます。当然、ドラマチックな日常に持ちこたえ得る本物の答えが必要です。そうでなければ、理論的な答えはすべてを重くするだけです[ニヒリズムを煽ることになると付け足しておきます]。 “父の病気を前にして希望はあるのか”という問いに答えようとする、父を見る以外に答えることはできません。このパンデミックの前に希望はあるのか。すぐに思い浮かぶのは[“一陣の風”のように思えますが]、病院で働く疲労感の中で、尻込みしない友人の熱心なまなざしです。その他色々あります。わたしが苦勞しているすべての状況を細かく調べてみると、唯一、いくらかの希望があると言うことを可能にするのは、この希望が見られる幾人かの顔です。けれども、これではドラマは深まるだけで静まりません。彼らを見ていて、自分も彼らのようにになりたい、彼らと同じ目で人生に立ち向かいたいという大きな願望が湧いてきます[アズルメンディが“このジャーナリストが見ているように、わたしも世の中を見てみたい！”とつぶやいていたように]。けれども、それは自分の努力ではできないことに気づくのです。自分の努力によるなら、一日の終わりには、成功や失敗を数えることで疲れて、ベッドに入るだけになってしまうでしょう[それは、すべてを再び倫理に矮小化するようなことになります]。そこでわたしは“何になるの？”と自問します。わたしは毎日、真摯に生きている人に驚かされています。その人はわたしを惹きつけ、動かします。なぜなら、わたしが朝の8時にはすでにうんざりしてしまっていることとまったく同じことを見ているその人の見方を羨ましく思うからです。ほとんどの場合このような魅力は、2時間後には消えてしまうのですが、時には、わたしを奮い立たせてくれるのです。そこで、わたしは自分自身に「彼らに従うだけでいいのか」と問います。わたしの毎日を彩り、たとえ一瞬でもわたしの苦悩やドラマをすべて理解してくれていると感じさせる、実際の存在に関わるだけで十分なのでしょうか。》

この問いに対する答えは、自由を問題にします。希望の礎を持っている存在を前にして、人はまず、その人たちのようになり、共にいたいと望むか、そうではないかを決めなければなりません。

4. 経験と心の基準

しかし、これらの存在をありのままに、本来の違いに至るまで本物の価値を認識するにはどうすればよいのでしょうか。それはわたしたちに関わる問題であり、使徒たちも免れなかったことです。むしろ、彼らが最初にこのことに立ち向かわなければならなかったのです。

イエスが発言や行動によって一目置かれる存在になり、その名が知られるようになると、律法学者、ファリサイ派、知識人、民衆の指導者など、自分たちの権力や“権威”が脅かされていると感じた人々に助長されて、イエスについて様々な解釈が広まり始めました。最初に彼について行った人々は、どのようにし

て彼に従うこと、関わること、自分の人生のすべてを彼に賭ける価値があると理解することができたのでしょうか。

多くの似たような人間の顔の中から、どのようにしてその顔を見分けることができるのでしょうか。わたしたちはどのような基準で判断すればいいのでしょうか。わたしたちにとって、経験から学んだはずなので、今では親しみのあるものであるはずですが。人生に適切な意味をもたらす存在を認識するための唯一の適切な基準は、自然が、遭遇するすべてのものとの普遍的な比較へとわたしたちを導くものです。それは心、つまり自分が経験していることに全身全霊をかけている時に浮かび上がる真実、美、正義、幸福といった明確な事実と要求の集合です。《経験の中で、あなたが心を打たれ、衝撃を受けた(*affectus*)現実とは[…]心の基準を飛び出させ、それまで混乱して眠っていた心を目覚めさせる。つまり自分自身を目覚めさせるのである。そこからあなたの歩みが始まる。なぜなら、あなたは目を覚まし、評価できる状態だからである》²⁸とジュッサーニは述べています。

それは、自分の思いにかかわらず、わたしたちの中で働く客観的で信頼できる基準であり、手加減しないのです。パヴェーゼはそれをドラマチックな言葉で裏付けています。1950年7月14日、ストレーガ賞を受賞した後、《少し前にローマから戻ってきた。ローマでは神のようにあがめられた。だから何?》²⁹と記しています。それは、何年も前に彼自身が日記に記した《自分の理想が失敗することよりも悲しいことがある。それは成功することだ》³⁰という言葉が現実したかのようです。そして亡くなる数か月前に、彼は《この数年間に君はこの日記に何回 それから?と書いたらどう?わたしたちは檻の中に入り始めたかな?》³¹と告白しています。1950年6月22日、大成功のニュースを聞いた彼は、実際に《至福の時だ。疑いなく。でも、あと何回味わうことができるだろうか?それから?》³²世間的にこれほど成功している彼の人生に、何が足りなかったのでしょうか?1950年8月17日には《名前は重要ではない。わたしは幸運の名前、偶発的な名前以上のものなのだ。これらでないなら、他は?要は、自分の最高の勝利が何であるかを知ったことだ。この勝利には肉、血、いのちが欠けているのだ》³³と書いています。その欠乏感の重圧により、10日後には自ら命を絶っています。

カミュは、大成功を取めた日に、同じような経験を手帳に《10月17日。ノーベル賞受賞。落胆と憂鬱の奇妙な感覚だ》³⁴と記しています。

わたしたちは、意味、正義、幸福、愛の要求である心の構造的な基準をごまかすことはできません。ある程度は黙らせたり、抑圧したりすることはできますが、根絶することはできません。それらは経験の内側にあるのです。ジュッサーニは、《経験に対する判断の原理は、経験そのものにある》ということを経験することの難しさを訴えています。しかし、《自分の経験を判断するための原理が、経験そのものの中にあるということが真実でなければ、人間は疎外されてしまう。なぜなら、自分自身を判断するために、自分以外のものに頼ることになるからである》³⁵と強調します。こうした要求(意味、正義、幸福、愛)は、人が試みることで自らから生じるのではなく、《その試みを前にする人の中に、自分が試みていること

²⁸ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, Bur, Milano 2011, p. 83 逐語訳

²⁹ C. Pavese, «14 luglio 1950», in Id., *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 516 逐語訳

³⁰ C. Pavese, «18 dicembre 1937», in *Ibidem*, p. 108 逐語訳

³¹ C. Pavese, «16 ottobre 1949», in *Ibidem*, p. 488 逐語訳

³² C. Pavese, «22 giugno 1950», in *Ibidem*, p. 515 逐語訳

³³ C. Pavese, «17 agosto 1950», in Id., *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 518 逐語訳

³⁴ A. Camus, *Taccuini. 1951-1959*, III, Bompiani, Milano 1992, p. 223 逐語訳

³⁵ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., pp. 83-84 逐語訳

に真摯に立ち向かっている人のうちに生じる》³⁶のであり、それが試みることを判断するのです。

判断基準は《人間の本质に内在するもの》でなければならないのです。それは《生まれながらにして人間に備わっている根源的要求と基礎的経験という客観的な基準である。それは、すべての母親が自分の子に与える共通の基準なのである。この究極的な共通のアイデンティティーを認めることによるのみ、アナーキズムを克服できるのである。》³⁷そして、主観主義が克服されるのです。

経験については、単に何かを試すことと同一視して語ることはできません。《わたしたちが使う経験というカテゴリーには、徹底的に評価を伴う価値がある》とジュッサーニは断言します。それは《通り一遍の感情的》なものとして理解されるべきではなく、《現実との衝突が人間の心の構成的な要求を挑発し、現実が突きつける挑発への応えの探求を進展させる場》として理解されるべきです。その結果として、《経験とは、真の偉大な仕事の仮説であるキリストの事実が、提起された質問に答えることができるかどうかを確認するために人が呼ばれる領域である。要因を見極めることにおいて、他のすべての提案にはない真正性と完全性をもって》確認するのです。そのすぐ後に《それゆえ CL は、正統性という水路に保たれたキリスト教の信仰が、他のどんな提案よりも人間の深遠な要求に応えるということを、より確かな方法で再び発見し、生きようとする意向以外の何物でもない》³⁸と付け加えています。

だからこそ、今日の本当の災いは、これらの要求に対する意識の弱まり、および自分自身のアイデンティティーについての自覚の曖昧さなのです。実際、キリストは人間に応えるために来たのであって、《ロボットのような生気を失った存在》に応えるために来たものではありません。すでに引用したことがありますが、ラインホルド・ニーバーが書いているように《問われていない質問に対する答えほどばかばかしいものはない》のです。よって《CL が唯一意図する》のは、《信仰が理性的なものであり、*理性的な従順*として信仰を証しすることである。ここで言う理性的とは、聖トマス of アキナーの考えに沿って、信仰の提案と人間の意識の構成的要求との間の一致の経験のことを指す》³⁹ということです。

キリスト教の出来事の違いは、それが生み出す経験にあります。イエスとの出会いの事実は、弟子たちに《わたしたちはメシアに出会った》という比類のない一致の経験をもたらします。人生で起こってほしいと期待する他のどんな好ましいことも、手に入れた成功も含めて、それらは期待を満たさず、約束を守らず、最終的には深い失望の原因となるのです。そうすると、わたしたちもまた、パヴェーゼの《それから？》という反応に自分を重ねることができます。

話を戻します。意識と確認の場としての真の意味での経験は、単なる主観的な印象や感情的な反応と同一視することはできません。経験とは、次の《3つの要素から成る生死に関わる統一的行為である。a) 客観的な事実との*出会い*[...]その体験をする人に左右されない[...]. b) その出会いの意味を適切に認識する力[...]. c) 遭遇した「事実」の意味と自分の存在の意味との間の一致の意識を持つ[...]。経験という現象に不可欠な自己の成長を確認するものは、この一致の意識である》。従って、本物の経験においては必然的に《人間の自意識と判断能力》⁴⁰が働かなければならないのです。

このことは、別の言い方で預言者イザヤが《もしあなたが天を裂いて降りてきてくださるなら！》と言っていることです。つまり、予想外のことが起こったなら、神がわたしたちの期待に本当に応えてくださ

³⁶ 同上、p. 82 逐語訳

³⁷ ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ポスコ社、東京 2007年、p.19、24

³⁸ L. Giussani, «Il ragionevole ossequio della fede», intervista a cura di A. Metalli, *30Giorni*, n. 5, 1988, pp. 40-41 逐語訳

³⁹ 同上、逐語訳

⁴⁰ L. Giussani, *Il rischio educativo*, Rizzoli, Milano 2014, pp. 130-131 逐語訳

ったなら、《御前に山々が揺れ動く》⁴¹というのです。約束が果たされたことを示すのは、小躍りすること、その出来事によって引き起こされる衝撃です。エリザベトに起こった《マリアの挨拶をエリザベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった》⁴²とされていることです。それは、イエスに遭遇し、午後の時間をずっと「彼」と一緒に過ごした後、皆に《わたしたちはメシアに出会った!》と言ったヨハネとアンデレが感じた同じ衝撃です。《自分の人生でこのことに会うなどまったく予想外だった。とても驚いた。まったく並外れたものだった。[...]徐々に称賛モードに入った》⁴³と、アズルメンディも経験した衝撃です。衝撃は、この出来事が再び起こった時のしるしです。

ですから、エリザベトがマリアの胎内にいるイエスを認識したように、わたしはある存在の中に、彼らとの出会いの中で経験するわたしの心、わたしの人間性との一致によって、存在する神を認識することができ、それは《衝撃》として表れます。そして、このような出会いをしたという確認は、わたしを現実全体へと導き、あらゆる状況に立ち向かわせ、どのような状況にも挑戦させることです。キリストは《自分をもたらすことによって、あらゆる新しさをもたらした》⁴⁴と聖イレネオは言っています。すべてのものの新しさをもたらしたのです。キリストをこのように表現する初期のキリスト信者たちは、何という経験をしたことでしょう!

それは過去に起こり今も起こり続けているのです。数カ月前に、大学がある地域の中心部にあり、主に学生が利用するカフェの店長に起こった出来事です。

《わたしたち CL の大学生会のメンバーは、大学の中の開いている数少ない教室に通い続けています。毎朝、同じカフェでテイクアウトのコーヒーを買うので、店の人と仲良くなりました。金曜日の朝、わたしのいところが最後に入ってきて、1982年からそこで働いている店長に状況を訊ねると、彼は次のように答えました。“人出は少ないけど、幸運にも君たちがいる。君たちが CL だってすぐわかるよ。30年前の CL の学生と同じように君たちだけがこの地域に息吹をもたらすから”。この人はどうしてわたしたちが CL であって、30年前と同じだと言い切ることができるのかと自問しました。それよりも、わたしも含めたわたしたちが、この地域に息吹をもたらす唯一の存在だと言われるのは、どうしてなのかということです。わたしやわたしたちの能力に理由があるわけではありません。そうではなくて、他の人と同じ現実を見るわたしの見方を変えてしまうほど、わたしの心に永久に痕跡を残すような出会いをしたからです。つまり、わたしが人を驚かせるようなことをする必要はなく、わたしは単に有りのままの自分でいいのです。わたしの中には、最終的にキリストがいるか、*nada* (スペイン語) 無かという信頼と意識とが深まりました! そのわけは、わたしの経験に、今まで以上に“「彼」から離れてどこへ行こうか”と言わせるほど、この仲間“接着剤を上塗りする”かのように結びつける多くのことが起こったからです。わたしは経験していることによって、色々なことが起こる今この時を失望せずに生きています。それは、将来的にもわたしの信仰を広らせるものです。わたしが日常生活の中で挑発に立ち向かう武器は、信頼、信仰です。この確信を持って、特別な何かをするわけではなく、有りのまま自分自身でありながら、自分を超える何かを伝えるのです。今は、希望を持って現在を生きることができます》。

この店長は自分の人生・いのち・生活にもたらされる息吹によって、この異例さを容易に認めることができたのです。

⁴¹ イザヤ書 63,19

⁴² ルカ 1,41

⁴³ フリアン・カロン、人には称賛するもののみ見える、2020年 CL 年度始めの日 参照

⁴⁴ Ireneo di Lione, *Adversus Haereses*, IV, c. 34.1 逐語訳

希望の花

ここで、いわゆる西欧文化の落とし子であるわたしたちにとってもっともデリケートな点である本当にやっかいな問題に取り組まなければなりません。

1. 確信の必要

今の時代、この文化に生きるわたしたちは、どのようにしてキリストについての確かさに到達することができるのでしょうか。特に若い人たち、一方では科学と技術の計算可能な合理的な枠組みに慣れ親しみ、他方では知識として知ってはいても即効性に欠け、測定不可能なものに対して本質的に耐えがたい経験をしている若い人たちのことを考えています。この必要性（キリストについての確かさに到達すること）は、今日、特に顕著です。若い人たちと接している人たちはそのことをよく知っています。ジュッサーニはそれをあらかじめ把握していましたが、この必要性は今、さらに強くなっています。今日では、キリスト教信仰への前提（周囲、家族）としての後押しはまったくなくなりました。ルーチョ・ブルネッリは、最近、*オッセルヴァトーレ・ロマーノ*紙に、現代の若者について、《死んで復活したキリストは、人間の救いである。あなたは彼らに向かってこの真実を叫ぶことができます[…]が、若者はおそらく[…]無関心な目であなたを見るでしょう》。《理解できない》¹ものを前にしているかのように、と書いています。キリスト教の信仰は、もはや社会的な事実ではなく、明白な前提でもなく、教育によって与えられるものでもありません。したがって、わたしたちはそこに到達するための方法を再発見することを“余儀なく”され—それは幸いなことだとわたしは思います—、ある意味では、理性的で根拠のある信仰を持つことを強いられているのです。

イエスに従った最初の人たちの信仰の根拠は何だったのかと自問してみましよう。そのことは今のわたしたちにとっても同じことです。ジュッサーニは、教育活動を始めた当初から、信仰が理性的であるべきとの緊急性をとっても強く感じていました。これは、カリスマの恵みを明らかにし、ジュッサーニ神父に与えられた恵みが、現代人（抜け出す方法がわからない不確かさの中に身を置いているわたしたち）であるわたしたちの必要に関連していることを示すものです。前に引用した箇所では彼が述べているように、この恵みから生まれた現実（CL）の唯一の目的は、信仰が理性的であることを証しすること、つまり、キリストの事実が、わたしたちの人間性の深遠な必要性に、他のどんな提案よりも適切に答えることを証しするのです。キリストの出来事が人間の意識の構造的な要求に一致していることが示される限りにおいて、実際、信仰することは理性的なことです。そして、理性的である必要性が切実であるか否かは、《若い者たちに提案することによって明確になる》²のです。

若者であっても大人であっても、人々にとって信仰が理性的であることを見出すためには何が必要なのでしょう。1987年の信徒に関するシノドス（1987年10月1日～30教会と世界における信徒の召命と使命）で、ジュッサーニは《今日の人間は、歴史上かつてないほどの技術上の可能性を備えているが、自分の才覚に意味を与える明確で確実な答えとしてキリストを認識することは非常に困難である。色々

¹ L. Brunelli, «Le chiese vuote e la fantasia di Dio», *L'Osservatore Romano*, 10 aprile 2021, p. 9 逐語訳

² L. Giussani, «Il ragionevole ossequio della fede», intervista a cura di A. Metalli, *30Giorni*, op. cit., p. 40 逐語訳

な機関は、そのような答えを根本的には提供しない。言葉や文化による告知の繰り返しが欠けているのではない。現代の人々は、おそらく無意識のうちに、自身にとってキリストという事実が人生を変えるほどの現実であるという人々との出会いの体験を待ち望んでいるのかもしれない。現代人を揺さぶることができるのは、イエスが顔を上げて“ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい”と言った最初の出来事を反響させる人間的な衝撃である》³と述べています。

出会いの体験が出発点です。2000年前のように。さもなければ、もはやキリスト教ではなくなってしまうからです。《これが宗教心から信仰への移行の決め手となる方法の逆転である。もはや謎めいた探求ではなく、人類の歴史上に起こった出来事への驚きが変わるのである。》ここで引用されている証言は、このことを裏付けています。《この条件を無視しては、イエス・キリストについて話すことさえできない。この道をたどることによって、キリストとの関係は、自分の父母との関係のように親密なものとなり、時間が経つほどにより自分をなすものとなるのである。》具体的な人物としての姿や仲間としての顔を持つ彼（キリスト）の人間性との出会いの経験における一致の体験を通じて、わたしたちは《彼の神性という最大の問題点》⁴へと導かれます。

信仰が理性的であることの切実さは、老若男女、あらゆる年齢層や社会的地位の人々に関わることで

ある女子大生は、ここで取り上げている問題について象徴的に意義深く《キリストについての確信の問題は、わたしにとっては未解決の問題です。長年運動にしながらも、もはや信じていないため、わたしにとってミサと聖体拝領は深い違和感を覚える瞬間です。わたしを繰り返し驚かせ、連れ戻してくれる運動の友人の熱意に溢れる生き方に感謝していますが、わたしには運動が、わたしには信じられない、受け入れることができないキリストの“信じられない”事実に基づいていることを取り消すことはできません。わたしは自分自身に、キリストはどのようにそこにいるのか、どのようにわたしのうちにいるのかと問いかけます。わたしたちは皆、人間であり限界があるからキリストがどこに、誰の中にいるのか理解できません。これは懐疑主義ではないように思います。腑に落ちないことがあることを隠さないことであって、これ以上見て見ぬふりはできないということだと思えます。まるで自転車の車輪の前にいるかのように、すべてのスポーク、つまり人間のスポーク、わたしに起こったすべての出来事や人々を見ることができず、これらのスポークの中心は見えません。わたしにはこじつけや自己暗示のように思えます。わたしが経験する愛は、時には多かたり少なかたり、母や父、友人から来ることはわかります。けれども、ある時点でキリストがそこにどのようにして関わって来るのか、よく理解できないのです。》と書いてきています。

わたしは、この友人の大胆で率直な要求に感謝しています。それは何よりも、彼女が過激な質問を自由にすることができる仲間のうちにいることの証です。そして、誰もが認めていると思いますが、人が疑問を持ち、自分をさらけ出し、恐れずにリスクを負うことができる場所があることは、決して当たり前のことではありません。

今取り上げている問題の本質に入る前に、同じ視点を持つ別の証言を紹介したいと思います。

《多くの人が新型コロナウイルスにかかり、また多くの人が“普通”の病気に苦しみ、医療制度が通常の基準に沿って機能していないので、十分な治療を受けられない大変困難な時世です。経済的困難は言う

³ L. Giussani, *L'avvenimento cristiano. Uomo Chiesa Mondo*, Bur, Milano 2003, pp. 23-24 逐語訳

⁴ L. ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、ドン・ボスコ社、東京、2015年 pp. 4-5

までもなく多くの人にとって一大事となっています。生きていくことや、死ぬことへの恐怖は、一見大きな問題がないように見える人の身体や心もむしばんでいきます。人は、不安や苦悩の原因となる、人生が“一時停止”しているような状態を生きています。このような状況では、以前にも増して、何が本当に必要なかを自問せざるを得ません。わたしたちのスクオラ・ディ・コムニタでは、このことについて多くの問いが出ています。個人的な愛情（人間）関係や自分の仕事は当然誰もが大切に思っていますが、それ以上に、自分が属する共同体は不可欠なものだと皆信じているからです。しかし、ここで、少なくともわたしたちの一部には、共同体が不可欠だとはどういう意味かという疑問が生じます。わたしたちは、スクオラ・ディ・コムニタの時だけでなく、毎日、具体的に共同体として生きています。それはわたしたちの家であり、助言、慰め、具体的な支えをも得る源です。触れることのできる兄弟愛の場です。大きな問題は、言うならば神に対してです。わたしたちの中には、主との確かな関係を生きている人もいます。また、苦おしいほど主を必要とし、無尽蔵の懐かしさを感じる人もいます。つまり、彼らにとって信仰とは、単に主を信じて頼ることではなく、探し求めることなのです。わたしたちは、古代イスラエルの人々のように神を求める者となり、もしこれが何の根拠もなく自分で作り上げた幻想に過ぎないとしたら？と、恐れを抱いているのです。これが大きな恐怖なのです！誰も神を見たことはありませんが、御子が来られてからは、神のしるしを見ることができ、それだけで十分なはずですが、しかし、日々の恐怖の暗闇の中で、自分自身だけでなく、すでに身体的に苦しんでいる友人をどうやって慰めることができるのでしょうか。神のことをどうやって伝えればいいのでしょうか？どうすれば、どんな状況においても、それがもっともネガティブな状況であっても、穏やかさと信頼を持って立ち向かうことができるような平和を見つけることができるのでしょうか？主を見ず、触れず、周りの人を見ることだけで、どうして救いの確信が持てるのでしょうか。神がいなければ、すべてのものは意味を失うということについては議論の余地はありません。しかし、信仰を求める望みが、本当に生きた信仰になるにはどうすればいいのでしょうか。》

これらの証言は、叫びを表しています。彼らは懐疑的なのではなく、自分の焦燥感を鎮めるための答えが何でも良いと考えない若者や大人たちです。彼らには、ドストエフスキーの《教養のある人間が、現代のヨーロッパ人が、神の子イエス・キリストの神性を信じることができるだろうか、本当に信じることができるだろうか》⁵という問いかけが響いている人たちです。ドストエフスキーはどの天才もそうであるように、そのことが予言的にすべての人にとって切実なものとなることを先取りしたのです。

この《探求者たち》が求めているのは、自分が出会ったことについて理性的な確信を得るための道筋です。この確信がなければ、望んでいる希望は十分な根拠を持たず、自由は自分が遭遇した現実そのものに愛着が持てず、従うことができなくなります。明らかに希望の問題が信仰の確かさに関わることはすぐにわかんと思います。

このような実際的な切実さから、わたしたちはジュッサーニが紹介してくれた方法をより意識的に把握し、用いられる概念に慣れ親しんでいるという名目で、すでに知っているという棚に納めることを避けながら、その価値を認識することができます。彼に倣いながら、彼が示す道が、わたしたち一人ひとりを《信仰を望む》ことから《真に生き生きとした信仰》へと導くものであるかどうか確認することができます。

a) モラルに関わる確信を得る方法

⁵ ドストエフスキー 悪霊、*Taccuini per "I demoni"*, a cura di E. Lo Gatto, Sansoni, Firenze 1958, 1011 参照 逐語訳

各自は自分なりに、自分のうちにある完遂、真実、正義の要求に正面から向き合うため、また人生が絶え間なくわたしたちに突きつけてくる問題に直面した時に立ち向かうためにキリストについての確信を得る必要があると感じています。では、今までの証言が求めている要求に焦点を当ててみましょう。つまり、どうすればキリストを確実に知り、認めることができるのか、ということです。すでに言ったように、これは信仰の問題です。信仰とは、理性をもって知る方法の一つであり、安っぽいセンチメンタリズムではありません。それは、他の人を介して目に見えないものを知ることです。わたしはじかに、直接対象を見るのではなく、証人を通してその存在を知ります。《文化、歴史、人間の共存は、信仰と呼ばれるこの種の知識に基づいている[……]証人を媒介としたある現実の認知である。》ここでは、《人生の最大の関心事、つまり運命に関わる》⁶特定のレベルにおける信仰の問題を取り上げていきたいと思えます。

ジュッサーニは《わたしたちは、証拠によっても、経験の分析によっても、キリストを直接知ることができない》と続けます。2000年前のヨハネとアンデレが、自分たちが遭遇した男ナザレのイエスのうちに神を直接見なかったように、わたしたちも同じ状態です。キリストがわたしたちの信仰の全面的な対象であるからこそ、人生のすべてを《キリストに委ねるに至るために、どうすればキリストを知ることができるのか》⁷という問いが生じます。信仰が証人という仲介に基づく認識であるとすれば、第一の問題は、この証人の信頼性について確信を得ることです。

人について確信を得る方法とはどのようなものでしょうか？理性が現実の様々な領域で確信を得るために用いる多様な方法のうちで、ここでは人間の行動に関する方法に注目します。ある方法は数学的な確信に、別の方法は科学的な確信に、また別の方法は哲学的な確信に導きますが、人間の行動に関する確信、つまりモラルに関わる確信に導く第4の理性の方法があります。ある意味、しるしから真理を直感する《天才や芸術家の方法に匹敵する》ものです。《ニュートンはかの有名な1個のリンゴが落ちるのを見ながら、このしるしを通して、あの優れた仮説に至ったのである。このように天才は些細なしるしを基に普遍的な真実を直観するのである。だから、母に愛されているということが理解できるのも、また、わたしの周りにいる人たちの中でこの人は友人だと確信を持っていえるのも、機械的にわかるというのではなく、いくつかのしるしから確信を得るという方法によるものなのである。すなわち、表れるしるしの意味することを考えたとき、それらのしるし・行為の理由を適切に説明するのは「わたしに対する親しみ・愛」だと直感的に理解するという方法である。母のわたしに対する思いやりは、無数の「しるし」として表れるが、それらがいわんとすることが収斂する点は、唯一「わたしを愛している」ということである。母の態度を説明するものは、わたしへの愛である。》⁸

わたしは何度かこの母親の例を使って、他者について確信を得るための明確な方法、つまりしるしを読むことを強調してきました。もし誰かに《母がわたしを愛しているということは、何によってわかりますか》と聞かれたら、わたしは《しるしを見ればわかります。お母さんがあなたにしてくれることを誰もがしてくれるわけではありません》⁹と答えるでしょう。多くのしるしを見た後、見たものに誠実であれば、あなたの母親がすることすべてを説明することは一つしかなく、前に引用した友人の言葉で言うなら、

⁶ L. Giussani, *Si può vivere così?*, Rizzoli, Milano 2007, pp. 27-28 逐語訳

⁷ 同上

⁸ L.ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ボスコ社、東京2007年、p.41

⁹ フォン・バルタザールは、《必要なのは、問題を提起する人の中に、神秘に対する初歩的な感覚と敬意を呼び覚ますことである。ほとんどの人間が一度は愛したことがあるのだから、愛のある種の法則や経験を思い出させ、そこから神の愛へと導くことができる》と述べている。H.U. von Balthasar, *Il chicco di grano. Aforismi*, Jaca Book, Milano 1994, p. 42 逐語訳

自転車のスポークのように、一つの収束点しかないことが、つまり愛と呼ばれるものだけだと認めることができるでしょう。愛という言葉の代わりにXと呼んでもいいのですが、お母さんの行動はあなたの存在を無条件に肯定しているしるしであり、あなたに彼女を確信させ、信頼させていることに変わりはありません。愛とは、科学的な測定器が何らかの分析や実験によって証明できるものではありません。愛は数々のしるしの意味です。

ジュッサーニは《モラルに関する確信を検証するものは、複数の手がかりであり、それらの唯一の適切な意味、唯一の適切な理由、唯一の理性的な解釈は、その確信である》。この《モラルに関する確信は、*経験的確信*》とも言えます。《あなたが実生活の中でしるしを読み取る瞬間、つまり無数のしるしを総合的にとらえる瞬間にかかわる[...]たとえば、わたしは自分の目の前にいる人が、わたしに対して殺意を持っていないと確信している。おそらく、わたしの確信が誤っているということを証明するために彼がわたしを殺すことはないだろう。彼の行為に対するこの確信は、現状の判断から得たものである。だからといって、将来に関して同じ確信がもてるわけではない。つまり、状況が変わればどうなるかわからないのだ！》¹⁰と続けています。

ここでジュッサーニは二つの重要なことを付け加えます。

第一に、わたしが《あなたと生活（喜びや悲しみ、悩み）を分かち合い、あなたの生活に注意すればするほどあなたについての確信が与えられる。しるしはその中に無数に表れるからである。たとえば、聖書に描かれている人たちの中で、イエスが信頼に値する人だと理解したのは誰であったか。病気を治してもらおうとあとを追っていた群衆ではなく、彼と共に生活していた人たちである。重要なのは、共同生活と生活の分かち合いなのである！》¹¹傍らで見ている《すばらしい！》と言って、その後どこかへ行ってしまえばすべてを失ってしまいます。ある存在が引き起こす反動やはっとさせられることに向き合わなければ、それを失います。わたしに起こったことの最高のものを失うことになるのです。一度会った人と二度と会うことがないなら、真実を直観していたとしても薄れてしまうでしょう。わたしたちは、関わる前、巻き込まれる前に、すぐに理解したいと思います。しかし、巻き込まれることなくどうして確信を得ることができるのでしょうか。それは偽りでしかありません。逆に、巻き込まれることで、経験した反動に向き合うことで、しるしは、無数に増え、確信は深まります。そして、経験はわたしたちを欺くことはないので、たとえ間違えたとしても、すぐに《ああ、いや、これはわたしが直観したものとは違う》¹²と気づくでしょう。

第二に、逆の方向からジュッサーニは《人は、人間として成長すればするほど、相手の態度に表れるわずかなしるしから確信を得ることができる。これは、相手の態度や、生き方からその真実を読み取る能力、つまり、人間がもつ才能である。要するに、ある人が人間として成熟していればいるほど、確信を得る能力に優れているのである。「信頼することは良いことだが、信頼しないほうがもっと良い」という、浅はかな知恵に基づくことわざがある。相手を信頼することが、自分に確固とした自信のある人でなければできないことだからである。自信のない人は、自分の親でさえ信頼できないだろう。人間性が豊かであればあるほど、相手を信頼するための適切な理由を見いだす能力を備えているので人は相手を信頼するこ

¹⁰ L.ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ボスコ社、東京 2007 年、 pp.41-42

¹¹ L.ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ボスコ社、東京 2007 年、 p. 42

¹² 《<ここ>での解決策には、思考によってではなく、<むしろ>理性、物事の真相、そして経験によって到達する》Guglielmo di Saint-Thierry, «Natura e valore dell'amore», 31, in Id., *Opere/3*, Città Nuova, Roma 1998, p. 97

とができるのである》¹³と指摘します。

b) とても人間的な道のり

人を知るためには、その人と共に生活することが必要だと言いました。共に生活するには時間を要するので、必要な時間を費やす心構えがある人だけが、相手について理性的な根拠に基づいたふさわしい確信を得ることができるのです。時間をかけて共に生活するためには、その人が自分自身について表すしに注意を払う必要があります。それは、取り違えようのない出発点を持つ、非常に人間的な道のりです。《自分自身の人生にとって重要な人物に出会う時には、まず直観が働き、自分の中の何かが認めざるを得ない明白さによって「彼だ!」、「彼女だ!」とわかるものである》¹⁴のです。

《認めざるを得ない明確な事実》という表現にあるように、ある意味で最初の時点にすべてあるので、認めざるを得ないということには、その道のりがすでに終わり、最終的な認識に到達したと思わせることがあります。そうではないことは、各自の経験に裏付けられるでしょう。相手に対する確信を得たいのなら、最初の明確な事実は、進むべき道のりの始まりなのです。ですからジュッサーニは《それが時間の中で繰り返されることによってのみ最初の印象に重みもたらされる。つまり、かかわりを持つことによってのみ、その印象はわたしたちの根底にまで深く浸透し、ある時に確信となるまでに至るのである》¹⁵と続けています。

広い意味で重要な人物との出会いの場合でも、キリストとの出会い、キリスト信者の仲間との出会いの場合でも、問題は同じです。ヨハネやアンデレにとっても、ペトロや他の人々にとっても、わたしたちと同じように、出来事の繰り返し、しるしの積み重ねによって認識を深める段階的な道のりが必要でした。

《この《認識》への道のりは福音書の中では何度も確認され、多くのよりどころが必要であることは「そして使徒たちは彼を信じた」という表現がこの福音書の最後まで繰り返されることからわかる》とあるように。これを避けることは有益ではないので、わたしたちにはできません。《その認識は時間をかけて得心することであり、後から起こることが以前に起こったことを否定することはまったくなかった。つまり、以前も彼らは信じたのである。ともに生活することによって最初に受けた、まったく特別である、尋常ではないという印象が確認されていくのである。生活をともにすることで確信は増す》¹⁶のです。

最初の知覚、明白な事実にみちた最初の印象と確信とにおける距離は、《認識の連続的な繰り返しによって確信に至る道にかかわることが裏付けられており、それが実現するためには時間と空間が必要とされる》のです。この法則に例外は認められません。《対象を知るためには時間と空間を欠くことができないのは事実であるから、唯一だと主張しようとしている対象がこの法則を否定するはずがない。あの唯一である対象に最初に出会った人々も、この道をたどらざるを得なかった》¹⁷のです。わたしたちにとってもこの道のりは必要です。各自、それに従うか、手放すかを決めることができます。すべては、わたしたちが出会いの時に覚えた心への一致や反動、最初の衝撃に従って、無理をせず、確信に至るために必要な時間をかけて、その価値を確認するという心の開きにかかわっています。

¹³ L.ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ボスコ社、東京 2007 年、p.42

¹⁴ L.ジュッサーニ、*キリストの主張の起源に*、ドン・ボスコ社、東京 2015 年、pp.68-69

¹⁵ 同上、p. 69

¹⁶ 同上、p. 69

¹⁷ 同上、p. 69

c) 他とは比べものにならない存在

愛情関係で起こるとまったく同じです。子供が母親に愛されていると確信し、信頼できるようになるには、どれほど共に生活することが必要なのでしょうか。ふつう、このプロセスは気づかないうちに起こるため、意識することはありません。同じことがキリストと共に生きること、今日におけるキリストの存在の人間的な姿と共に生きることにおいても起こります。つまり、わたしたちは毎日、母親ができるような行為やするしただけでなく、どんな母親にも自然に与えることができるものとは異なるものを含んだしるしに圧倒されているのです。

マルコによる福音書を読みましょう。《数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、四人の男が中風の人を運んで来た。しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかつたので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ていた前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。》¹⁸

体の不自由な人が癒されたことで、その場にいた《人々は皆驚き》言葉を失いました。しかし、この不思議なことを目の当たりにする驚きは、罪を赦すという《主張》によって倍増します。中風の人に《人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい》と言うのです。イエスは、他のものを通してあるものを認識することへと導きます。そして、奇跡を目撃した人の中には、《驚き[…]神を賛美した》という言葉に見られる突破口が開かれます。彼らが見たものは、神を指し示すしるしであり、神は彼らの目の前の存在の異例さを通して働き、彼らに《このようなことは、今まで見たことがない！》と叫ばせたのです。それでは、毎日イエスと一緒にいて、イエスが中風の人を癒したり、生まれつき目の見えない人に視力を回復させたり、船の中で嵐を鎮めたりするのを見ていたペトロやアンデレ、ヨハネたちの立場で考えてみましょう。彼らが見ていたのはそうした奇跡だけではありません。イエスは、彼らや他の人々、そして現実の全体に対して、他の誰とも異なるまなざしを持っていたのです。それは比類のない人間的なものでした。彼らは、母親が与えるような具体的で矮小化できないしるしに直面していたのですが、同時に比類のないものだったのです。それは異例さのしるしであり、他の何よりも彼らの心に一致する存在のしるしでした。弟子たちも他の人々と同じように、いや他の誰よりも《このようなことは見たことがない！》と驚いたのです。

弟子たちの歩みの中で、イエスに対して得た確信、その比類のなさの認識が明確になる瞬間がありま

¹⁸ マルコ 2,1-12

す。ジュッサーニがわたしたちにその瞬間を再現させる方法をもう一度たどってみましょう。

その日、《話を聞くために、もはや食べることを忘れ、疲れを感じることもなかった》群衆はイエスの後を追って来ました。人々は3日近くも彼を追いかけていたのです。丘の頂上に着いたとき、イエスは《丘一面を覆うほどの人々を見て[…]、“彼らを憐れんだ” […]そして使徒たちに“全員を座らせなさい”と言った。》彼らは座り、イエスは皆を満腹させたのです。「彼」が行ったことを見て、「彼」の話聞くためについてきていた人々は、抵抗できないほど魅了されて《高揚感が最高潮に達し、彼らは皆、来るべき王としてキリストに向かって叫び始めた》のです。翌日は安息日で、彼らは会堂に行く習慣がありました。その日の《聖書の箇所は、民が砂漠で神からマナを食べさせてもらったという箇所だった。イエスは“あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。わたしが与えるマナ、わたしが与えるパンを食べる者は死なない。” […]“わたしの肉を食べ物、わたしの血を飲み物として与える。そのパンを食べ、その血を飲む者は永遠に生きる。”》このような言葉を聞いた聴衆は、律法学者やファリサイ派の人々を先頭に、激しく《“聞いたか？気が狂っている、狂っている！誰が自分の肉を食べ物として与え、自分の血を飲み物として与えることができようか？彼は気が狂っている、狂っている！” […]人々は皆、しだいにファリサイ派や律法学者に従って会堂を出て行った。》しかし、あの12人の小さなグループは残っていました。皆黙ってそこにいたのです。イエスは視線を彼らに向け、《“あなたがたも離れて行きたいか？”彼は自分の言ったことの不可解さを和らげることなく、“あなたがたも離れて行きたいか？”と繰り返した。そこでシモンは、いつものように全員の代弁者となって、衝動的に“先生、わたしたちもあなたのおっしゃることはわかりませんが、あなたを離れてどこへ行きましょうか。あなただけが永遠の命の言葉—本当の翻訳は次のようであるべき—、心に一致する、人生に意味を与えるものを持っておられます。”と言った。しかし、心に一致する言葉、それは何を意味するのだろうか？理に適った言葉だ！理性の役目は、一致を見出すことである。[…] “「彼」が言っていることは理解できないけれども、もし離れれば、もう誰もわたしの心に適った話をしてくれる者はいないだろう。》¹⁹

ですから、彼らの即座の反応は、ペトロの《“わたしたちは、あなたに従う必要があります。なぜならば、あなたは常に心に一致する話し方をする唯一の並外れた人だからです。今違うことを言われても、今のところ、わたしたちにそれは理解できないということです。あなたが説明してくれるのなら、明日には理解できるでしょう。けれども、今の言葉がわからないからといって、あなたから離れることはできません。” […]、実際に去っていった人たちは、自分自身に背いて、背きながら去って行ったのです》という言葉に表れています。どちらがより理性的な態度でしょうか？《理に適っているのは、ペトロとその仲間たちがしたことであり、彼らは以前と変わりなく従った。“たとえわたしたちが理解できなくても、あなたのように人の心に一致する話し方をする人はいません。だから、あなたから離れて誰のところへ行けばいいのでしょうか？人生・いのちに意味がなくなります”》という態度です。ジュッサーニはこれが《愛情を伴う態度の起源である。他の人たちは、見聞きしたことにもかかわらず「彼」を拒絶して去って行ったが、この小さなグループは、「彼」に同調し、従い続けた。[…] それは、理性的な態度としての […] 従順という概念の始まりである。従うことは理に適っていた。さもなければ、「彼」と一緒に過ごし、この人が他の人とは違うということを明らかに認めたそれまでの数ヶ月間をすべて否定しなければならなくなるからである》²⁰と指摘しています。

¹⁹ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., pp. 133-138 逐語訳 ヨハネ 6,49~参照

²⁰ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., pp. 138-140 逐語訳

弟子たちのした歩みがはっきりとわかります。その結果、彼らはますます「彼」を慕うようになりました。日に日に“とらえられて”いったのです。イエスは彼らの人生・いのちの愛情の中心となりました。《人間の人生・いのち、特にそれを支える愛情によって成り立ち、その愛情によって最大の満足を得る。》²¹わたしたちが歩むよう呼ばれているのは、まったく同じ道です。ジュッサーニがかつて《フリアン、見てごらん、結局は継続的に‘しごと’をした人とそうでない人の違いだよ》とわたしに言った言葉をこれまで何度も思い出しました。

d) 信仰とは、ある「存在」を認識すること

「彼」の異例さのしるしが増えれば増えるほど、周囲の人々のうちに《いったい、この方はどういう方なのだろう》²²と矛盾する問いが力強く生じていました。なぜなら、「彼」について知り得ることはすべて知っていたにもかかわらず、この問いには答えようがなかったからです。しかし、答える必要がありました。この問いは「彼」の並外れた存在に絶えず驚かされることから生じました。イエスと共に生きる経験の中で、この人物について、いくら説明しても説明しきれない要因、しかし同時に消し去ることのできない要因がどんどん浮かび上がってくるのでした。

ある時、フィリポ・カイサリア付近で一緒にいた時、イエスが弟子たちに《人々は、人の子のことを何者だと言っているか》と訊ねると、《『洗礼者ヨハネ』だと言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに『エレミヤだ』とか、『予言者の一人だ』と言う人もいます》と彼らは答えました。すぐ後にイエスは《それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか》と同じ問いを彼らに向けました。今度はペトロが勢いよく《あなたはメシア、生ける神の子です》²³と言い切ったのです。ペトロのこの言葉についてジュッサーニは、《多分イエス自身から聞いた言葉一意味は明確に捉えていなかっただろうが—》²⁴を繰り返したのだと指摘します。なぜ彼はこのようなことを言ったのか、なぜ彼はあの男が自分について語った言葉を繰り返したのだろうか、と自問してみましよう。彼がそれを繰り返し、自分の言葉にしたのは、イエスと共に過ごした3年間と、目の当たりにした数々のしるしの後、あの人が信じられないのなら、自分自身さえ信じるできないということが明らかになったからです。イエスについての確信が得られたことにより、イエスが自分について語ったことを真実として受け入れたのです。これが信仰です。

《歴史上の「存在」が自分について語ることを真実と認めること》²⁵、つまりその「存在」が語ることを真実と認めて、その「存在」に従うことです。《信仰とは、ある「存在」の異例さに動かされた理性の行為であり、それによって人は“話しているこの人は本物であり、嘘を言っていない。わたしは彼の言うことを受け入れる”》²⁶とすることができるのです。

2000年後の今、わたしたちはまったく同じ状況にあります。ペトロやその友人たちが、ナザレのイエスという人—幻想ではなく、一人の人だった—に関わったように、わたしたちは今、キリストが自分の姿を現す現実、人々、わたしたちに触れた顔（姿）に応じて、歴史におけるキリストの「からだ」である教会という仲間と関わらなければなりません。わたしたちも、この仲間によって経験したことを通して、単

²¹ San Tommaso d'Aquino, *Summa Theologiae*, II, II^o, q. 179, a. 1 逐語訳

²² マタイ 8,27

²³ マタイ 16,13-16

²⁴ L.ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、ドン・ボスコ社、東京2015年、p.98

²⁵ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 34 逐語訳

²⁶ 同上、p. 35 逐語訳

純に帰属する人々の中に見られる人間的な変化を通して、そこに開花する喜びや無償の気持ちによって、たとえそれぞれの限界やもろさや惨めさがあつたとしても、この《わたしたちの経験の中には、自分の経験を越えたところからやってくる何かがある。想定外で不思議だが、わたしたちの経験の中にある》とすることができます。《この中にはある要因、この仲間、この仲間による特定の結果によって、この仲間の特定の響きを決定する要因がある。それはあまりにも意外なので、わたしが他の何かを認めなければ、自分が経験していることが説明できなくなる。なぜなら理性とは、経験可能な現実を、それを構成するすべての要因を考慮して肯定することだからである。すべての要因を。現実を構成する要因のうちには、その反響を聞き、その実りを感じ、その結果を見ることもできるが、それを直接見ることはできないものもある。もしわたしが「見えないから、存在しない」と言うなら、それは間違いである。なぜなら、経験のうちの何かを排除しているからであり、もはや理性的ではなくなるから》²⁷なのです。

それでは、どのような手段・道具でその要因を知ることができるのでしょうか？それは、わたしたちが信仰と呼ぶ現実を知る知性です。《信仰とは、理性の限界を超えた認知の方法》であり、《理性が把握できないものを把握する》のです。信仰とは、《理性では捉えることできないあの「存在」を捉える認知行為である。捉えることができなくても肯定しなければ、経験の中にあつて経験そのものが示す何かをごまかし、排除してしまうことになる》とジュッサーニは言います。キリストが今、ここに、わたしたちの間にいることを《理性は、あなたやわたしがここにいることを知覚するにはキリストを知覚できない。それは明らかだろう？だが、わたしは「彼」が存在することを認めないわけにはいかない》²⁸のです。

信仰の問題は、2000年前と同じように、今も《この人は一体何者なのだろう？》という問いから生じます。それは、《言葉には出さなくても、ある人々やある共同体、あるいはある生き方を見て、人の心の中に生じる“どうしたらあのようにできるのだろう”》²⁹という問いです。それは、あの喫茶店の店長が、常連客の大学生を前にして、暗黙のうちに発した問いかけですが、わたしたちが遭遇した人々の現実を前にして、まずわたしたちの中に生じた問いです。それぞれが自分で答えを探すのです。しかし、もしこれらの答えが、自分たちが見て、参加している人間の新しさを説明できないのなら、教会の生きた伝統がわたしたちに提示する、わたしたちには想像もつかないような答え《キリストがわたしたちの中におられるので、わたしたちはこのように振る舞うのだ》という答えに心を開くことは理性的であり、それまで歩んだ道のり全体との一貫性が保たれます。教会は、時間と空間におけるキリストの延長として、キリストの現存の場所とするしとして、自らを差し出しており³⁰、わたしたちはペトロのように、認めた異例さの力、経験した想像を絶する一致の力、主の恵みの力によって到達した確信によって、この人間の現実の中にいるキリストを認めることができ、一番にペトロが口にした言葉を自分のものとするのできるのです。

e) それでは、真実に対する疑惑はどこから来るのか？

わたしたちの多くの人のように、人はこの道のりをたどってきたのに、なぜ不確かなままなのでしょう？

²⁷ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., pp. 271-272 逐語訳

²⁸ 同上, p. 272 逐語訳

²⁹ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., pp. 130-131 逐語訳

³⁰ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, op. cit., p. 266 参照 逐語訳

多くの場合、わたしたちはこの不確かさをしるしの欠如や明確な事実の弱さ、あるいは自分が認識した明確な事実に対するわたしたちの矛盾に原因があると考えます。しかし、ジュッサーニは、《真実に対する疑惑を持つのは、明確な事実や根拠の不足ではなく、真実に対する愛着の欠如によるものだ。常に、まったくいつもそうである。なぜなら、真実は自ら明確なものであり、はっきりしているものだからである》と指摘します。真実は《道端で美しい女性を通りかかると驚いて、“なんと美しい！”と言うのとまったく同じである。それと同じ性質と即時性を持つものであり、ためらう可能性はない。こうなのだ！真実は、それ自体に、その様相に、明確さを、それ自体の明確さを有している》。したがって、わたしたちに忍び寄る不確かさには《理由がなく》、不確かさは告知の内容を《直接の対象》とせず、常に間接的なものであり、《わたしたちの視界を横切った確かな真実を前にして、わたしたちがすべき労苦、気まずさ、不本意さ、疲れ》によるものです。つまり、不確かさは《嘘偽り》として入り込み、《倫理的な態度である嘘偽り》は、わたしたちが取る立場であり、《知性の行為ではない》³¹と指摘しています。

現実への共感、驚きと愛着のある関り、注意を向けた対象に《素直な態度で目を見開いて》³²立ち向かわず、愛情や感動を伴わなければ認知的な確信は得られません。《認知は愛情を伴う。愛情 *affectus* という反動を伴う。わたしたちの魂は、触れられる *touchée* ののである。真の認知とは、この2つの要素の組み合わせである。》³³

このことすべての貴重な裏付けは、ある出来事にまったく虜にされた時、目の前で起こっている真実への愛着が抑えられない《人の瞬間》に見出すことができます。

《親愛なるフリアン、月曜日に行われた大学生とのミーティングで、あなたが“もしイエスが今やって来て、『わたしを愛している？』と聞かれたら、君は何と答える？”と発言者に問いかけた時、わたしは言葉よりも先に、全身全霊で“はい”と叫び、涙を流している自分に気づきました。他のことはそっこのけにするほどの衝撃を受け、ただただその“はい”に応えたいという気持ちで一杯でした。このような反応は、いつも起こることではありませんでした。1年前、奉獻生活への召し出しを確かめる歩み始める決心をしようとしていた時、継続的にそれは起こっていました。わたしは多くのことを理解しておらず、疑問だらけで、自分が認識したことを何度も疑いましたが、絶えず、自分に起こる素晴らしいことの前で、“はい”と言えるようになりたいという願望が湧き出ていました。それは、説明ができる以前に自分の中から出てくるものです。事実、記憶、思考を並べ立てる以前に、わたしの自己はすでに“はい”と答えているのです。これらのことを出発点として、その反応や愛情を生じさせたわたしの人生のすべての事実を見ると、わたしの歴史、歩みが明らかになり、称賛と感謝の気持ちが増して、ますます興味深いものとなります。けれども、そうした衝撃が起こり得るといっただけで、わたしにとって真実は起こり、わたしを惹きつけるということを示しています。》

信仰の確信を得た人は、希望についての問いに立ち向かうことができます。希望はどこから生じるのでしょうか？

³¹ L. Giussani, *Uomini senza patria (1982-1983)*, op. cit., pp. 255-256 逐語訳

³² L.ジュッサーニ、*宗教心*、ドン・ボスコ社、東京2007年、p.61

³³ L. Giussani, *Si può (veramente?) vivere così?*, op. cit., p. 61 逐語訳。エフドキーモフは《現代人にとっての難しさは、知性と心の分離、認知した事柄と価値判断の分離にある》と述べている。(P. Evdokimov, *Le età della vita spirituale*, Il Mulino, Bologna 1968, p. 219) 逐語訳

2. 信仰の確信は、希望の確信の種

ペギーは《我が子よ、希望を持つためには、人はとても幸せでなければならず、大きな恵みを受けていなければならないのだ》³⁴と書いています。わたしたちが今読んだ証言には、このように、わたしたちを躍らせ、希望を呼び起こす恵みが起こっていることがあらわになっています。

わたしたちが受けた最大の恵みとは何でしょう？あらゆる状況、あらゆる関係、あらゆる状態に《自分自身をもたらすことですべての新しさをもたらした》キリストとの出会いです。わたしたちは、どきっとさせるような存在に出会い、今まで知らなかった優しさで見つめられ、どんな想像をも超えて抱きしめられ、赦されたのです。

キリストが自分の人生・いのちにもたらす新しさを目の当たりにし、キリストの存在を確かに認識できるようになった時、人は聖パウロの経験に自分を見出さずにはられません。それは《では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし、神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。だれが神の選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。患難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています》³⁵というものです。

主と共にいることを経験した人、主がわたしたちのために命を捧げたことを認めた人は、この存在を目に焼き付けてすべてを見るのです。《わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。》³⁶

よって、希望はどこから生まれるのでしょうか？希望は、異なった人間性の中に存在するキリストを認めることによって生まれるものであり、それは信仰が咲かせる花のようなものです。単純です。善良な存在として認めている母親に対する子供の確信を考えてみましょう。子供は、何が起ころうとも母親は常に自分のそばにいるという確信なしでは、母親の存在という確かなものに頼らずには、将来のこと、明日のことを考えることができません。子どもについて言えることは、わたしたち一人ひとりにも当てはまります。

ある人は、《わたしは悪いことが何も起こらないということに希望を置くことが多いのです。“Sperem”（スペレム、そうなることを願う）と言っていますが、これは物事がうまくいくことを願うという一般的でやや迷信的な信頼を表しています。しかし、この立場は明らかに成り立ちません。なぜならば、実際、わたしたちは無に対してまったく保護されていないからです。ある時、7歳の娘に、遠く離れた両親との

³⁴ Ch. Péguy, *I Misteri*, Jaca Book, Milano 1997, p. 167 逐語訳

³⁵ ローマの信徒への手紙 8,31-37

³⁶ ローマの信徒への手紙 8,38-39

再会の可能性について話していたとき、“Sperem!”と言いました。彼女は、わたしがその可能性に懐疑的であることを完全に見抜いて、“お母さん、その言い方で期待しているということは、信じていないということよ”と言いました。彼女の言うとおりに、「希望」は「確信」と関係があるのです。どんな確信なのでしょう？希望を持つためには、どのような確信が必要なのでしょう。それはわたしやわたしにとって大切な人に何が起こっても、闇や、苦しみや絶望が勝らないという確信です。この確信が今必要なのです。わたしの子供たちはこの確信の生きた例です。彼ら、子供たちにとって、人生は常に確信を持って未来を見据えている現在です。暗闇以外、彼らはほとんど何も恐れないのです。わたしたちがそこにいるからこそ、彼らは落ち着いているのです。そうです。では、わたしはどうなのでしょう？》と、問いかけています。

パンデミックの中でもそのことを確認できたと思いますが、わたしたちも出会いを通してわたしたちの人生・いのちに入ってきた「存在」であるキリストがわたしたちを絶対に見捨てないという認識のみに基づいて、何が起こっても未来を前向きに考えることができます。

希望は、わたしたちがほとんど意識することなく、信仰が咲かせる花として、キリストが現存しているという確信から生じ、どんな疑念にも挑みながら、わたしたちの中に生じます。《希望が生じる大いなる恵みは信仰の確かさであり、信仰の確かさは希望の確かさの種である。》つまり希望は、種のようなタイミングで成長するのです。《今日土に蒔いた小さな種は、来年の9月になって初めて芽を出し、4～5年経ってから、あのような愛らしい不思議な特徴を持った小さな植物の形になっていくのだ。》³⁷

希望を持つためには、《大きな恵みを受けていなければならない》、現在において確信を持つという恵みです。このことがいかに決定的であるかは、現在の状況を見ればよりはっきりと理解できるでしょう。

《現在に確信を持っている人はいない。皆は何も考えていない時には現在に確信を持っているだろうが、考えてみると…全然確信を持ってないのだ。》多くの人は、お金やキャリア、良い健康状態に力づけられているかもしれませんが、誰かが彼らに真剣にそのことについて質問すると、《生きることの究極の意味に関わる真の確信》がいかに稀であるかに気づかされるのです。しかし、《現在の確信、つまり現在における意味の確信のみが、時間の中で未来に対する確信を生み出す》³⁸のです。

《パンデミックが始まって以来、わたしは“重篤化のリスク”のグループに属するので自分が抱えている健康上の問題に恐怖を感じていました。夏の間は、すべてがある程度コントロールされていると思えました。ワクチンのニュースも届き、心の中で“大丈夫！もう心配しなくていいんだ”と自分に言い聞かせていました。要するに、わたしはワクチンに希望を置いていました。しかし、その直後にすべてが逆転しました。妊娠したためワクチンを接種できなくなりました（イタリア保健当局の指示に従って医師の意見を求めたところ、リスクがあると言われたからです）。幸いに、夫は新しい仕事に就いたのですが、そのため昨年のように家にいることはできません。そして、新型コロナウイルスの新しい波の中にあるわたしの町では、過去最高の感染者数が記録されました。それではわたしの希望はどこにあるのだろうか、と考えました。この問いは日常的に、自分の身の回りで起きていることを確認するためのきっかけになります。この問いはわたしを再出発させます。たとえば、性格的に憶病なわたしたち夫婦が、不安に取り込まれてしまった時、“希望はあるのか”と繰り返すだけで、何か別のもの、いやわたしたちの人生に起こって、わたしたちをとらえた「他者」に再び目を向けさせるのです。そして、「彼」に、わたしたちの希

³⁷ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 184 逐語訳

³⁸ 同上

望である方に願います！これはわたしたちにとって、日々確認する仕事となっています。希望の問題をより深く理解させてくれたエピソードがあります。先日、生まれつき障害のある長男が8歳になりました。その日の夜、誕生日ケーキを食べる前に、子どもたちにいつもとは違う祈りをしようと言いました。それぞれに感謝したいことを言ってもらったのです。誕生日を迎えた8歳の息子は、「僕は自分の存在を神様に感謝します。僕は生まれたかった、僕は存在したかったから！」と言いました。その言葉に、わたしと夫は衝撃を受けて顔を見合わせました。この子の妊娠中のこと、珍しい奇形が見つかった時のことを思い出したからです。わたしは、医師たちから中絶するようにと圧力をかけられ、知り合いからもそのような子供を産むということは、その子を不幸することだと言われたことを思い出しました。8年後、その子が言った言葉は、母であるわたしの心に強く突き刺さりました。わたしはこのことにショックを受け、感動し、恵みによってわたしと夫が彼のいのちに「はい」と言ったことを神に感謝しました。そして、希望があることにも気づきました。どんな複雑な状況であっても、常に希望はあります。なぜなら、現実には肯定的なもので、人生・いのちは善に向かっているからです。ですから、コロナ禍や、困難や疲労、限界を感じさせるドラマチックな状況であっても、現実には究極に肯定的なものがあるという希望をわたしから奪うことはできません。なぜならそれを成しているのは「他者」だからです。物事の外見に隠れていて、わたしを決して見捨てない「他者」が、わたしに無償で与えられている夫や子供たち、起こった出来事や、「ほら、雲の上には太陽があるよ」と言って助けてくれる仲間を通してわたしに会いに来て、毎日優しく寄り添ってくれるのです。》

わたしたちがパンデミックに立ち向かうために《たゆまず熱心に現実を生きる》‘しごと’の仮説とした深い理由はここにあります。これに従った人は、この手紙の人が言っているように、自分が置かれている状況の中で、自分のうちに見出す希望によって‘しごと’をしたことを確認することができるでしょう。まさに皆がこのような経験を強いられたからこそ、わたしたちは自分自身に問いかけることができるのです。この数ヶ月間はわたしたちにとって牢獄のようなものだったのか、それともヴァン・トゥアン枢機卿³⁹のように監禁された《鉄格子》の中で自由を体験したのかと。

《希望とは、現在における確信の上に成り立つ未来への確信である。》⁴⁰これは、未来への想像力に偏った希望ではなく、ある存在の確信に基づいた希望のもう一つの考え方です。この考え方では、未来との関わりは「ある方」の現存を経験することによって完全に決定されます。未来を肯定的に見ることができるのは、この矮小化できない肯定性をすでに経験している現在があるからです。つまり、約束が今実現し始めなければ、それは信頼に値しません。運命の確かさは、現在の確かさの上に成り立っているのです。従って問題は、《現在》の確信に至ることです。希望の実質のすべては、信仰に置かれています。

この確信を得た人は、どんなに衝撃的な事態に遭遇しても、異なる立ち向かい方を体験することができます。

ある人が《クリスマスの時期、わたしたちの幼い娘が癌と診断されました。毎朝、心に重さを感じながら目を覚まし、自分を意識した最初の瞬間から自分を委ねます。毎朝ひざまずいて祈ります。わたしはそこから、神秘との関係から再びスタートします。これとは違う生き方ができるとは思えません。「あなた」から離れてどこへ行けるでしょうか？わたしは、子であること、つまり「善良な父」に愛されていることから再出発します。わたしは瞬間毎に、自分はすべてを必要とし、すべては与えられていることに気づき、感謝の気持ちを見出します。自分に、そしてすべての人々に対する善の要求が拡大します。病院で出

³⁹ T. Gutiérrez de Cabiedes, *Van Thuan. Libero tra le sbarre*, Città Nuova, Roma 2018 参照

⁴⁰ L. Giussani, *Si può vivere così?*, op. cit., p. 186 逐語訳

会う人たちを見ながら、皆が自分の望みに応えてくれる「人」を知ってほしいと思うのです。わたしにとっては、それが唯一の道です。理解できないこの傷から目をそらさせるものは何もありませんが、2ヶ月経った今、わたしを抱きしめる「神秘」に委ねることがより理性的であるように感じています。イエスが娘を見るようにわたしに与えているのです。手術後、いくつかのメッセージを読みながら、娘は“多くの人がわたしにすぐ過ぎ去るから、よくなるから、治るから…後で、後でと言うけど…でもわたしは今生きたいのよ！”とわたしに言いました。わたしにとって、現在に留まるということは、すべての望みを持って生きることであり、理屈を考えるのではなく、執拗に願い求めることです。血液検査、治療の開始、CTスキャンやPETスキャンの結果など、わたしは常に待っている状態です。けれども、それは決して不確かな状態ではありません。なぜなら、わたしは起こっていることに執着して生きていて、イエスを乞い願いながら、待ち続けているからです。このように、イエスからのしるしに注意しながら生きると、現在はより生きやすくなり、イエスへの愛情が深まります。このような状況の中であってどうやったら落ち込まずに生きていけるのかを見るために、色々な人が、たとえわずかな時間であっても、部屋を訪れます。誰もが「彼」を探しており、彼が勝利するところを見たいと望んでいるのです。自分は無力なのに「彼」がすべてを行っていると分かるから、このことに感動します。その時わたしは「彼」を見ている人たちを見るのです。うまく説明できませんが、こうして寄り添い合うことによって互いを育てているのです。出勤することも自分が生きていくことから目をそらすことにはなりません。現実には複雑で、多くの側面で構成されていますが、家にも、病院にも、オフィスにも、買い物をしていても、常に主を探しているので、自分は結ばれていると感じます。行動している自分を見ると、自分はより自分であることに気がつきます。すべてがわたしの関心を引きまします。自分特有の歴史に気づかせてくれるわたしたちの歩みは、なんと恵みでしょう！わたしに、わたしの運命に関係があるから、何も見落とさずに歩みのこの部分をたどる価値があるようです。すべてに重みがあり、永遠の価値があるのです。たとえわたしがすべてを理解できなくても、それは重要なことではありません[これがたゆまず熱心に現実を生きることです！]。わたしは、はっきりと言葉にすることも少し怖いのですが、娘の健康よりも何かもっと大きなものがあるのではないかと直観しています。もちろんわたしは、娘の回復のために何でもお出来になる「方」に執拗をお願いすることをやめませんが、神がわたしをこのようにご覧になるなら、同じようにご自分のものであるわたしの娘をも愛してくださるのではないのでしょうか？「彼」の存在がわたしの希望です》。

この手紙から読み取れる確信に至るのは、わたしたちの間でも広まっている宗教的な感傷的傾向によるのではなく、先に述べたように、わたしたちが主の生きた存在に常に支えられ、たどることを受け入れる歩みによって得られるのです。そのため、飽くことなくわたしたちに証し、導いたジュッサーニに対して果てしない感謝の気持ちが増すのです。

《父や母があなたを見捨てることがあっても、わたしは決してあなたを見捨てない。》⁴¹これだけが希望の礎になります。人生のドラマを明らかにする出来事が起こると、未来に対する見方も変わります。わたしたちが希望を託すのは、どんな存在でもいいという訳ではないのです。人生・いのちを挑発するような出来事が起こった時にそれを見ることが出来ます。

しかし、わたしたちが持っている望み、期待そのものであるわたしたちの期待の完遂の形はどんなものでしょうか？多くの場合、わたしたちは限りのない自分たちの期待に応えるのはある特定のものと決

⁴¹ イザヤ書 49, 15 参照

めつけますが、ストレーガ賞を受賞した日にパヴェーゼが《ローマでは礼賛。それから?》⁴²と言ったように、自分が思い描くものが実現した時には失望するのです。完遂の形は、わたしたちのどんなイメージとも一致しません。完遂の、つまり希望の形は、キリスト自身なのです。にもかかわらず、これほど当然でないものはありません。それを以下の手紙が裏付けています。

《わたしの周りには、パンデミックとそれに伴う孤独に怯え、落胆している人がたくさんいますが、それぞれの状況の中で、紛れもなく今まで以上に人生の喜びと強さに溢れる魅力的な人もいます。にもかかわらず、わたしには未来への確信は得られないように感じます。その平和は、少なくともわたしがよくイメージするような、すべてに対する即時の応えとしての“穏やかさ”としてはまだ訪れていません。何事も常に迷いとドラマだらけの戦いです。おそらくこれがアウグスティヌスの言う“わたしの心はあなたに憩うまで安らぐことがない”ということなのでしょうが、わたしはこの安らぎのなさを愛せるかどうか分かりません。わたしはまだ“将来の確信”について未熟な考えを持っているのかもしれませんが。わたしが想像する“確実な点”を持たない「この安らぎのなさ」は、強力な探求の道具ではなく脅威に変わってしまい、煩わしいものになります。それを刹那的なもの（仕事を整理すれば落ち着くだろう。家族の平和の維持をするのは当然だ。次のパンデミックに備えてより広い大きな家を買って、友人たちが集う場になるかもしれない…）で補い、自分の心の要求に対する解決を期待します。しかし、しばらくすると、それらはすべて、わたしを以前のまま、いやより冷笑的にします。あるいは、慈善行為に励んだりしますが、そうした自発的なパフォーマンスは将来に対する確信を与えてくれません。最終的な結果、つまり成果がわたしの能力に依存するならば、それは脆弱なものです。結果的には常に虚無感に陥らなければなりません。そして確信には至らないのです。欠けているステップは何でしょうか？現在のある現実が未来の確信となり、心を魅了することを可能にするのは何でしょうか？》

10 人目の皮膚病の人は、自分に何が足りなかったかをよく理解していました。病気から解放されたと感じた途端、癒されたことに満足せず、イエスのもと⁴³に戻る切実さを感じたのです。彼は、自分が期待していたものは病気の完治で得られるのではなく、あの男によって成就するのだということに気づいていたのです。彼はサマリア人であったから、癒されることを当然のことと思わずに済んだのかもしれませんが。彼には癒される理由がなかったのです。このことで、彼は癒されたことと、特にあの存在によって体験した今までにない一致を失いたくないと思うほどに感謝したのです。「彼」との関係が喜びであり、完遂であり、豊かさだったのです。《永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです》⁴⁴これが永遠の命、つまり命のいのち、唯一期待に応えるものです。

わたしたちの期待に対する応えの形は、わたしたちがよく歌う *Jesu dulcis memoria*（イエス、甘美な思い出）⁴⁵にあるように、キリスト自身であり、《「彼」の甘美な存在》です。聖アウグスティヌスは同じこ

⁴² 3章4、注29参照

⁴³ 《イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、らい病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうかわたしたちを憐れんでください」と言った。イエスはらい病を患っている人を見て、「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい。」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」》(ルカ 17,11-19)

⁴⁴ ヨハネ 17,3

⁴⁵ 《*Jesu dulcis memoria*》, Inno gregoriano sec. XII, in *Canti*, Soc. Coop. Ed. Nuovo Mondo, Milano 2014, pp. 23-24

とを《あなたの神である主をあなたの希望としなさい。あなたの神である主から何かを望むのではなく、あなたの主ご自身をあなたの希望としなさい》⁴⁶と勧めています。またフーゴ・ディ・サン・ヴィクトルは別の言い方で、キリストは《望みを満たすために来たのではなく、愛情を引きつけるために来た》⁴⁷と述べています。わたしたちが味わうすべてのものにおいて《でも、わたしを恋しく思わないの?》という問いを生じさせるために来たのです。

最近の長い期間、それに伴うドラマや試練の中で、わたしたちが行った確認の内容は、どれだけ話や言説を繰り返せるようになったかではなく、わたしたちのうちにキリストへの愛情が育ったかどうかです。キリストがわたしたちの全人格を魅了し、ペトロのように《わたしが人として何よりも好むのは、キリストよ、あなたです!》とわたしたちも言えるかどうかです。重要なことはこれだけです。

主の存在がわたしたちを満たすものであるならば、*Veni, Sancte Spiritus* (聖霊来てください) と乞い願うことがキリスト教の希望の形です。《主イエスよ、来てください!》⁴⁸というのは、聖書を締めくくる呼びかけです。なぜなら、主イエスの存在は、わたしたちの心の望みを常に満たし、高める唯一の存在だからです。わたしたちが味わうすべてのものにキリストが欠けていると感じるなら、わたしたちのキリストへの愛情が増したと認めることができます。わたしたちがキリストに出会っていないからではなく、まさに、キリストに出会ったからこそ、毎日、再びキリストに会いたい、毎日キリストを探し求めたいという抑えがたい願望がわたしたちを襲うからです。なぜなら、わたしたちはもはやキリストなしでは生きられないからです!

《わたしたちの主イエス・キリストの神が、[...]心の目を開いてくださるように。[...]どのような希望が与えられているか[...]悟らせてくださるように》⁴⁹という聖パウロの願いが、わたしたちの人生に実現するように願いましょう。

⁴⁶ Sant'Agostino, *Enarrationes in Psalmos* 39,7 逐語訳

⁴⁷ Ugo di san Vittore, *De arra anime. L'inizio del dono*, Glossa, Milano 2000, p. 1 参照 逐語訳

⁴⁸ ヨハネの黙示録 22,20

⁴⁹ エフェソの信徒への手紙 1,17-18

希望を支えるもの

《教会は、信仰を当然のものともみなすことはありません。》¹希望についても同じことが言えます（だからこそ、希望に対する2つの罪は、うぬぼれと絶望²なのです）。

信仰と希望は、一度きりで獲得されるものではなく、常に様々な出来事や状況に挑発されています。多くの人の経験に証してされているように。

1. 道のりの苦勞

ある人が《今日、わたしが心に抱いている問いは、希望があることを何度も経験しているのに、人生の試練の前でいつも足が震えてしまうのです。希望があることは知っているけれど、それを信じ切れていないのではないかと思います。わたしは信仰が薄いのでしょうか。どうすれば、毎朝、希望があると確信してスタートできるのでしょうか。自分に起こったことは非常に重要で、わたしを生み出したにもかかわらず、十分ではないようです》と書いて来ました。十分でないことはとてもいいことです！あなたには、わたしたち皆と同様に、今起こることが必要なのです。起こったことすべてが、今の自分を生み出すのにとっても重要だったからこそ、希望の唯一の礎である主の存在を再発見し、自分の信仰を深めるために、毎朝、その一日をいまだたどるべき歩みの決定的な部分として見る事ができるのです。ですから、付け加えておきますが、ありがたいことに冒険は毎朝再び始まります。なぜなら、もしわたしに苦勞が免除されたりしたら、わたしが生きるために今必要なキリストの勝利が再び起こるのを見ることはできないでしょう。

また別の人は、《今年、国立の学校に就職し、とても熟練した新しい仲間に出会い、多くのことを教えてもらっています。彼らの根底に漂っている絶望感に少し驚いています。一方では、わたしたちが経験していることや、身近な人たちの病気を前に生じる深い問いからくるものなので、理解できます。他方で、わたし自身には見出しませんが、彼らの中には本当の絶望があり、無に向かって転がっていくような感覚があるのだと感じます。わたしは自分が何か特別な喜びを持って動いているとは思いませんが、わたしの中には無の波に押し流されず、抵抗して守る最後の堀があることがわかります。それは、わたしが“そうである”のであって、そうすることを知っているわけではないのです。それは、わたしをとらえた出会いに起因するとしか思えません。わたしと彼らの違いはそこだけだからです。わたしは得るに値することを何もしていないのに希望を持ち続けています。けれども、再び見いだすことがなければ自動的に持ち続けることはできないし、一生持ち続けることができるものではないことを理解しています。この点を明確にする必要があります。というのも、わたしたちが直面している状況では、わたし自身にも、他

¹ 教皇フランシスコ、回勅 *信仰の光* 6

² 《絶望やうぬぼれなどの希望に反する罪 [...] 絶望とは、人間が自分の救いや、それを得るための助け、あるいは自分の罪のゆるしを神からただけると期待するのをやめてしまうことです。それは、ご自分の約束に忠実であられる神のいつくしみや正義、また、あわれみに背く罪となります。うぬぼれには二つの種類があります。その一つは自分の能力を過信すること、すなわち、神の助けがなくても自分を救うことができると考える) ことです。他の一つは神の全能とあわれみを過信すること、すなわち、回心しなくてもゆるしが、いさおしがなくても天の栄光が受けられると考えることです。》(カトリック教会のカテキズム 2091 - 2092)

の友人たちにも、疲労感や曖昧さが見られるからです》と指摘しています。

それが自動的に維持されないということは、逆に言えば、曖昧さを克服するために、わたしたちは希望の内容を再び発見せざるを得ないのです。

それは、教皇フランシスコが2020年3月27日の夜、サンピエトロ広場での証言を通して気づかせてくださった実存的な状況です。《「その日の夕方になって」(マルコ4・35)。このように、先ほど朗読された福音は始まります。ここ数週間は、いつも夕方のような感じです。深い闇が、わたしたちの広場や通り、町を覆い、わたしたちの生活を奪っています。異様な静けさと悲しい喪失感がすべてを覆っています。闇はそれが触れるすべてのものを麻痺させます。そのことが大気中に感じられます。人々の態度やまなざしもそのことを物語っています。わたしたちは恐れおののき、途方に暮れています。福音の中の弟子たちのように、思いもよらない激しい突風に不意を突かれたのです。わたしたちは自分たちが同じ船に乗っていることに気づきました。わたしたちは皆、弱く、途方に暮れています、大切にかけがえのない存在です。わたしたちは皆一つになるよう招かれ、互いに慰め合うよう求められています。この船の上に……わたしたちは皆、ともにいます。「わたしたちが溺れ死んで」(38節) しまうと不安げに一齐に叫んだあの弟子たちのように、わたしたちも、一人で勝手に進むことはできず、皆が一つになってはじめて前進できることを知ったのです。》³

わたしたちも弟子たちと同じように、四方八方から押し寄せてくる出来事に挑発されています。人間の人生・いのちは歩みであり、闘いであり、《それは歴史の海原の航海のようなもので、しばしば暗く、荒れ狂っている》⁴のです。状況によって引き起こされる挑発のためだけではなく、人間の経験の本質のため、それがもたらすドラマのためでもあります。ヨゼフ・ラツィンガーがキリスト教入門で引用しているマーティン・ブーバーの話にとってもよく描かれています。

《ある啓蒙的碩学が、このベルディッチェフのラビのことをきいてかれを訪ね、いつもの通りかれとも議論して、かれの信仰の真理の時代おくれの証拠を粉碎しようとした。かれがラビの部屋に入ると、ラビは一つの書物を手にして思索をめぐらしながらあちこち歩きまわっていた。ラビは珍客に目もくれなかった。とうとう立ちどまって一べつをくれてから云った。“でもおそらくそれは真実なのだ”学者は気を取りなおそうとしてもだめで、ひざはがたつき、こわくてラビを見れずラビの短語もきけなかった。しかし今度は、レビ・ジズシャクがかれの方にふりかえってしずかによびかけた。「わが子よ、お前が論争した経典の学者たちは、お前に何をいってもむだだった。お前はそこをでると笑いとぼしたからだ。かれらも神とそのくにを、卓上におくことはできなかつたし、私にもできはしない。しかし、わが子よ、『考えてもみよおそらくそれは真実なのだ』。啓蒙学者は気力をふりしぼって反論しようとしたが、このおそろしい『おそらく』がくりかえしかれの耳にひびいて抵抗力をくじいたのである》。⁵

ここまではブーバーの物語です。それについてラツィンガーは《この『おそらく』は、脱出できない試練であり、その中で拒否してはじめて信仰の不拒否性を経験すべきものなのである。いいかえれば信者も不信仰者も、自分自身や人間存在の真実の前から逃避しないかぎりそれぞれのしかたで、懷疑と信仰とを分担しているのである。懷疑や信仰から全く逃避できるものはだれもいない。あるものにとっては、懷疑に対立して信仰があり、またある人にとっては懷疑を通し懷疑という形で信仰があるわけである。

³ 教皇フランシスコ、2020年3月27日 新型コロナウイルスの感染拡大にあたっての「特別な祈りの時」でのことば（ローマと全世界へ）カトリック中央協議会

⁴ ベネディクト16世回勅 希望による救い49

⁵ ヨゼフ・ラツィンガー キリスト教入門 小林珍雄訳 エンデルレ書店、東京1991年、p.6

原姿として懐疑と信仰、試練と確実性とのこの果てしなき競争の中においてのみ人間生存の終局性はみいだせるのである。多分、両者を自分だけの世界に密閉されてしまうことを防いでくれる懐疑が情報伝達の間となれるのはまさにこうしてなのである。懐疑は、両者が完全な自己満足にやすらぐことを防ぎ、信者を懐疑者に対し、懐疑者を信者に対しけしかけ、信者には不信仰者の運命を分担させ、不信仰者はそれでも信仰は自分への挑戦だとしらせる形式なのである》⁶と考えています。

信仰と希望についての問題は、最終的には存在と無の二者択一に関わるので、賭けるものは考え得る最高のものです。つまり、《人生は過ぎ去る時間の塵の中で終わり、その過ぎ去る時間は、わたしたちが窒息してしまう墓や牢獄を作っているかのようで、そしてそこで、意味なく死んでしまうのか！あるいは、時間は未来をはらんでいて、アダ・ネグリの言うように、すべての瞬間には永遠の重みがある》ということが問題の核心です。一方は《完全な無、無の無》、他方は《永遠に向かう、永遠に対する責任》。そして、わたしは、わたしたちの自己—あなたとわたしの自己—は、毎朝、《無に終わるすべてを選ぶか[……]目的のある人生を選ぶか》が迫られる《存在と無の分岐点》⁷なのです。

最近の挑発は、このことをこれまでになく発見させてくれたかもしれません。信仰を持つ者も持たない者も、困難の中で一体感を感じてきました。状況に応えることによって、信者は、未信者を含むすべての人の前で自分の信仰を確認します。つまり、人生の試練や疑問に直面しても、信仰が自分を固く立たせるかどうかを見極めるのです。こうして、信者ではない者も、信者の歩みの仲間となるのです。それと同じように、信者はその証しによって、信者ではない者の運命を共にするのです。

ルシア・メンデスの言葉《現在の暗闇に投げ込まれ、首まで不確かな状態に浸っている[……]後を絶たない死者のために喪に服し、道のりの中に正常の兆候を見ることを切望している》⁸は、広範な状況を捉えています。はっきりした立場や、異なる経路や到達点を超えて、ジョアナ・ボネが書いたように多くの人々の心と口には、おそらく直接または間接的に受けた教育の反響として、《天におられるわたしたちの父よ[……] 今日、あなたが星か、火星か、あるいは無限からわたしたちを見ていると、あなたがわたしたちのわめきや被造物の孤独に心を動かされていると知ることは慰めとなります。[……] わたしたちは窓やベランダからこのように見上げたことはありません[……] わたしたちを悪からお救いください。これは、常に「主の祈り」の最高の箇所です。その祈りは、信じていない人、あるいは控えめに信じている人の間でも、一般的な接着剤として祈り続けられています》⁹という訴えが再び響いています。

作家のシルビア・アバローネは、パンデミックの第2波は、心の準備ができていない状態で、まるで突然の襲撃のようにやってきたので、自分自身のうちに立てこもることができなかったと言います。娘が公園で遊んでいるのを見て、彼女はラツィンガーが言っていた‘おそらく’に自分なりに心を開いたのです。《感染者の数を表す曲線と死者の数が再び増え始め、活動が停止され始めたとき、わたしは血も凍る思いがしました。自分の人の好きをばかにされ、わたしは愚かだと思いました。[……] わたしたち人間は皆、空虚さを受け入れるようにできていません。空虚を感じるとすぐに、まずそれを埋める必要に駆られます[……] わたしたちはもう子供ではないし、子供に戻ることはできません。彼らにとっては自然なことでも、わたしたちにとっては大変な労力を必要とします。それは、現実をありのままに受け入れ、それに従い、石やみずばらしい花の中に抵抗する理由を見出すまで深く掘り下げて、前に進むことです。つまり希

⁶ ヨゼフ・ラツィンガー キリスト教入門 小林珍雄訳 エンデルレ書店、東京 1991 年、pp.6-7

⁷ L. Giussani, *Attraverso la compagnia dei credenti*, Bur, Milano 2021, pp. 19, 31 逐語訳

⁸ L. Méndez, «Sin tregua y sin pudor», *El Mundo*, 9 gennaio 2021 逐語訳

⁹ J. Bonet, «Padrenuestro», *La Vanguardia*, 8 aprile 2020 逐語訳

望です。でも今は、大人の本能に逆らうことが、唯一意味のある行為のように思えます。》¹⁰

2010年にノーベル文学賞を受賞したマリオ・バルガス・リョサ氏は、わたしたちの歩みの初めに指摘したことを反映して、最近《わたしたちは科学技術が自然を支配しているという印象を持っていたので、パンデミックは皆を驚かせました。それが事実でないことを知ってショックを受けました。想定外の事柄が如何にわたしたちを奈落の底に導くかを見たのです。今わたしたちは、これがいつ、どのようにして終わり、どのような結果になるのかと問うています。世界は、この歴史の始まりとはまったく違うものになるでしょう。そして、経済危機で大打撃を受けることになるでしょう。わたしたちは、繁栄と自由に向かって進んでいると思っていたところに突然の衝撃を受けたのです。わたしたちは戸惑っています。もしかすると、楽観的ではない方法で現実を直視することは、悪いことではないのかもしれませんが》¹¹と語っています。

(このような見解を) 延々と述べることはできますが、問題の核心は明らかです。それは、誰も現実とそれに伴うものを免れることはできないということです。信仰を持っていようが、持っていまいが免れることはできないのです。日常生活の経験やニュースはそれを絶え間なく見せつけています。

2. いと高き神のすまい

イスラエルの民に同じことが起こりました。神への信仰が、イスラエルの人々にどんな歴史的逆境をも免除することはなかったのです。信じるということは、わたしたちが信仰を縮小したイメージによって望むように、ワクチンのように一度で完全に免疫ができるわけではありません。人生の困難から免れるためのワクチンはありません。イスラエルの全歴史はこのことを語っています。

イスラエルの民の始まりは、神がアブラハムと結んだ契約です。《わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。》¹²しかしながら、この契約は、歴史の中で、不測の事態、不利な状況の中で試されます。そうであるなら、信仰や希望を持って生きることと、それらを持たずに生きることの違いはないのではないか、という問いが生じるかもしれません。違いはあります。もちろん、ですが、それは挑発の質や量によるのではなく、歴史の中に介入し、アブラハムの子孫をご自身の民とされた神がもたらす新しさによって、それらに対する立ち向かい方が違うのです。つまり非常事態や逆境に直面しても、希望を持ち続けるために頼ることができる「方」がいるという違いなのです。

モーセはそれを直観していました。神を直視し、神の恩恵を受けたとしても、彼が「約束の地」に向かう途中で直面したすべての困難を免れることはできなかったであろうことを。ヤン・ドブラジンスキーは小説『砂漠』の中で、モーセとイスラエルの民の一筋縄では行かない、起伏の多い道筋を鮮やかに描いています。そこで、モーセは主に向かって言います。《“もし、あなた御自身が行ってくださらないのなら、わたしたちをここから上らせないでください。” […] 主はモーセに言われた。“わたしは、あなたのこの願いもかなえよう。わたしはあなたに好意を示し、あなたを名指しで選んだからであ

¹⁰ S. Avallone, «Resistere affidandosi ai tesori di ogni giorno», *Corriere della Sera*, 28 dicembre 2020, p. 5 逐語訳

¹¹ M. Vargas Llosa, «La “ley Celaa” es un disparate absoluto», *entrevista di P.G. Cuatango, ABC*, 17 gennaio 2021. Traduzione nostra 逐語訳

¹² 創世記 17,1-2

る。”¹³しかし、神の同行の約束や、旅立ちの際に見たファラオの軍勢の敗北による驚異も、十分ではないように思えるのです。すぐに主の存在への信頼のもろさが明らかになり、食べ物がないことで、エジプトの玉ねぎが懐かしいと嘆くのです。そこで即座に神は、彼らの飢えにマンナで応えます。しかし、それも十分ではありませんでした。《民はマンナに唾を吐きかけ、肉を要求し始めた。彼らの泣き声があまりにもしつこいので、モーセは突然、この重荷に耐えられなくなるのではないかと思った。》¹⁴神は再び介入します。《主はモーセに言われた。“モーセよ。いつからわたしはそんなに弱くなったのか。わたしの言うことがほんとうかどうか、今にわかる。”》¹⁵その時、《主のもとから風が出て、海の方からうずらを吹き寄せ、宿営の近くに落とす。うずらは、宿営の周囲、縦横それぞれ一日の道のりの範囲にわたって、地上二アンマほどの高さに積もった。民は出て行って、終日終夜、そして翌日も、うずらを集め、少ない者でも十ホメルは集めた》¹⁶のです。

しかし、このようなしるしにもかかわらず、従うことのもろさは歴史上何度も現れます。エジプトから連れ出し、砂漠を導き、アブラハムに約束の地を与えてくださった主に希望を置くのではなく、人々は絶えず、自分たちが作る偶像や、より強力な民族との同盟に希望の保証を求めようとする誘惑に屈するのです。このような試みの惑わす性質は明らかです。イザヤは次のように書いています。

《わたしたちは光を望んだが、見よ、闇に閉ざされ
輝きを望んだが、暗黒の中を歩いている。
盲人のように壁を手探しし
目をもたない人のように手探しする。
真昼にも夕暮れ時のようにつまずき
死人のように暗闇に包まれる。
わたしたちは皆、熊のようになり
鳩のような声を立てる。
正義を望んだが、それはなかった。
救いを望んだが、わたしたちを遠く去った。》¹⁷

困難に直面したとき、人々の希望はその脆弱さを全面に見せます。預言者によって常に支えられていなければ、崩壊していたでしょう。すでに与えられたしるしや、過去の歴史は現在における希望を支えるのに十分ではなかったのです。常に支えられている必要があったのです。自分の経験によって、自分の弱さを認識することによって、イスラエルの民の状況を理解しないわけにはいきません！

イスラエルの民が直面した希望へのもっとも強力な挑発は、おそらくバビロンへの追放だったと思います。彼らは主からの三大賜物である土地、君主制、神殿を失ったのです。彼らの神はどこにいたのか。こうして、追放はイスラエルの信仰にとって決定的なものとなります。なぜなら、そこでアブラハムの神と他の神々との違いが明確になるからです。他の民族は敗北したとき、自分たちを守ることができなかった神を捨てました。しかし、イスラエルの神は民が敗北しても、敗北しませんでした。追放の地にあっても、これほどまでにその神に執着するには、イスラエルは神についてどのような経験をしていたのだ

¹³ 出エジプト記 33,15-17

¹⁴ J. Dobraczyński, *Deserto. Il romanzo di Mosè*, Morcelliana, Brescia 1993, pp. 225-22 逐語訳

¹⁵ 民数記 11,23

¹⁶ 民数記 11,31-32

¹⁷ イザヤ書 59,9-11

ろうかと自問してみましょう。イスラエルの神と他の神の違いは、生じさせる希望によって見分けることができます。

わたしたちは、希望を揺るがないものにするためには、どんな脆さよりも強い存在、決して不足することのない存在が必要だと言いました。《神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。》無意味な言葉に思えるかもしれませんが、ユダヤ人にとっては経験に裏付けられ、何度も繰り返された経験を指していました。《わたしたちは決して恐れない 地が姿を変え、山々が揺らいで海の中に移るとも、海の水が騒ぎ、沸き返り、その高ぶるさまに山々が震えるとも》と詩篇は続きます。この安心感、恐怖心のなさはどこから来るのでしょうか。それは《いと高き神のいます聖所に。神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。夜明けとともに神は助けをお与えになる。すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。[…], 来て、主の御業を見よ》¹⁸とあるように聖所があるからです。

3. 希望の場

この《聖所》－《いと高き神のいます聖所に。神はその中にいまし、都は揺らぐことがない》－が希望の場です。キリスト教の告知では、その聖所（住まい）は一人の人間、肉となった神、ナザレのイエスです。道を歩き、出会うこと、関わるのが可能だった一人の人間です。彼がいれば、人生のもっとも辛い困難な状況でも、想像もつかないほどの確実な善と、信じられないような心の平和のうちに直面することができたのです。《わたしだ。恐れることはない。》¹⁹「彼」に従った人々にとっては時間の中で、彼らの全人格の抛り所となる岩、希望の要因となりました。イエスは弟子たちの弱さをよく知っていたので、彼らが経験しなければならなかった嵐の中で、彼らをみなしごにしたり、一人にしたりしないと《見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる》²⁰と約束しました。

どのように？どんな方法で共にいるのでしょうか？キリストは《歴史の中で自分が継続する方法として、聖ペトロを頭とする教会という仲間を選んだ。自分の存在が目に見え、手で触れられ、体験できる仲間を選んだ》²¹のです。しかし、教会は何によってできているのでしょうか？あなたやわたしによってできているのです。《洗礼によってわたしたちをとらえ、キリストはわたしたちを同じ体に属するものとした（エフェソの信徒への手紙 1～4 章参照）。主は今ここに、わたしの中に、わたしを通して存在している。主の存在を裏付ける最初の変化の表れは、わたしがあなたと一体であると認め、わたしたちは一つの体だと認識することである》²²とジュッサーニは述べています。したがって、救いであるキリスト、肉となった神秘は、《どんな探求や歴史的記述よりも深い起源を持つ人間のいる場所に、神秘を根源とするが、この救いに出会うのは人間が成している場所に》²³現れるのです。

この場所に留まることによって、わたしたちの人間性は、人生・いのち全体に関わる歩みの中で成長し、増します。

《希望がなければ、開いた傷をそのままにしておくことはできず、気晴らしを求めて目をそらすことしかできないことに気がつきました。ある日、82歳の友人が電話で“わたしは年齢による体の不調を実感

¹⁸ 詩編 46 (45) ,2-9

¹⁹ ヨハネ 6,20

²⁰ マタイ 28,20

²¹ L. Giussani, *L'avvenimento cristiano*, op. cit., p. 60 逐語訳

²² 同上, p. 39-40 逐語訳

²³ 同上, p. 53 逐語訳

しながら、一人暮らしをしているでしょ、説明はできないのだけれど、この数か月ほど運動に寄り添われていると感じたことはないのよ。わたしは、継続的で豊かな提案やスコオラ・ディ・コムニタのグループの勧めにとっても助けられているの”とわたしに話してくれました。このようなことが他にどこで起こり得るのかと思い感動しました。キリストが絶えず働き、わたしたちに確信を与える場所でのみ可能です。こうして希望はわたしたちの手を取って支えてくれるのです。他に言いようがないのですが、フリアン、わたしはあなたのまなざしを通して、そして時間の中で今日カリスマに従うすべての友人のまなざしを通して、常に主に生み出されながら生きています。わたしは、一人では自分自身に確信も希望ももたらすことはできません》とある人が書いてくれました。

また別の人は《最近、わたしの中に大きな無力感が生まれました。わたしは看護師でずっと新型コロナウイルスの病棟で働いています。いろいろな苦労がありますが、それを唯一理解してもらえる場であるこの仲間に投げかけてみる必要があることに気づきました。わたしたちの問いを共有するために、看護師全員が参加できるミーティングを行いました。わたしは疲れた自分を慰め、自分が経験しているドラマを支えてくれたその集まりから大きな驚きを得てその場を去りました。翌日、病棟に入ると、いつも何事にも非の打ち所のない同僚に出くわしました。彼女はわたしを見て、“夕方、家に帰ると吐くことがよくあるの。わたしたちが見ているものや求められている仕事の膨大さに意味があるとは思えないから”と言いました。わたしは一瞬黙ってしまいました。というのも、わたしにもそのような疲労の叫びがあったからです。しかし、わたしは自分が絶望していないことに気づきました。疲れているのは確かですが、絶望してはいないのです。なぜだろう？と自問しました。わたしは彼女と何も変わりません。すぐに“辛いことや苦しいことがあっても、あなたは一人ではない”ということ思い出させるかのように行ったミーティングのことが頭に浮かびました。あのように抱きしめられていることを思い出しながら、わたしはとっさに、自分にとって彼女が必要なので今一緒に仕事ができないかと聞きました。普段はみんな自分の患者を管理して終わりですが、その日は初めて一緒に仕事をしました》と証言しています。

わたしたちが必要としているのは、どんなスキャンダルをも感じずに戻ることができ、わたしたちの尺度や“解釈”に矮小化されず、わたしたちの希望を支えてくれる場所です。わたしたちは、キリストが現存し、生きていることを明らかにし、わたしたちを惹きつけることができることを証明する特定の出会いによって、そこに導き入れられます。《キリストは洗礼によって人間をとらえ、成長させ、育て、それから出会いによって、心に一致し、説得力があり、教育的で創造的な他とは異なる人を身近に感じる経験をさせ、何らかの形で心を打つのである。》²⁴ この出会いによって、わたしたちはある仲間のうちに加えられるのです。それはただの仲間ではなく、教会の中で主の霊によって生み出された仲間です。

キリストの出来事は、人間にとって救いの効果的なしるしとして、信者の交わりを通して歴史の中で存続します。《この仲間は、わたしたちの周りに身を寄せる復活したキリストである。[...]それは、わたしたちが「彼」に触れ、見、感じることができる自ら姿を現すキリストの体である。この仲間の価値は、目に見えるものよりも深いものだ。なぜなら、目に見えるものは、自ら姿を示すキリストの神秘の現れだからである。》さらに、《仲間を通してキリストはわたしたちの周りに身を寄せ、その仲間はわたしたちにキリストが誰であるかをより知らしめ、キリストがわたしたちにとって何であるかを明らかにする。イエス・キリストは、今ここに存在している。その「霊」の働きによって、途切れることなく自分に属する人々を通して歴史に留まるのである。その人々はキリストの「体」の四肢として、時間と空間の中でその「存

²⁴ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 115 逐語訳

在」を継続させるのである。》²⁵

キリストが歴史の中に留まることは、わたしたち人間の心にとって、わたしたちの運命の確かさにとって、わたしたちの完遂にとってもっとも重要な点です。わたしたちは完遂をどのように想像しようと、どのような名前をつけようと、願わないわけにはいきません。ですから、わたしたちの完遂の確信は《神がご自身を「存在」としてあらわにされた歴史の客観性にあり、それゆえ、わたしたちを個人的に巻き込み、導いたその歴史の決定的な形に》あるのです。わたしたちの基本的な希望は、わたしたちが行うことや、行き着くところまで行くわたしたちの試みや、あるいはわたしたちのユートピアにあるのではなく、《わたしたちが創り出すことのできるもの、また他の人たちが[…]わたしたちに保証してくれるすべてのものに挑んできた、そして今も挑み強く存在するものにある》のです。わたしたちの大きな希望は《歴史の中で、時間の中で、空間の中で「存在」となった力》にあります。今日、わたしたちの肉のもろさの中に隠されています。その証拠に、《傲慢であったり、短気であるなら、その力に気づくことなくその中で生きることができる。あるいは、すべてを破壊するためにはわたしたちの一吹きで十分である。けれども、わたしたちの宝は、まさにそのもろさの中に存在する神秘的なものである》²⁶とドン・ジュッサーニは述べています。

わたしたちの希望は、自分の心に再び火が付き、蘇ったことを目の当たりにする場所、自分の限界が最後の言葉ではないことを具体的に体験できる場所に生きているのです。《勝利を得たキリストが人生・いのちに実質を与える同伴者・伴侶として認められ、知覚され、経験される場所、手段がある。サマリアの女に言われたように、受け継がれる根、尽きることのない希望の泉である存在。それは、わたしたちの交わり、他の人ではなく、主の霊によって共に呼ばれた人々、つまり召し出された仲間である。この動機がどんなに弱く、最初はほとんど意識されていなかったとしても、それが互いを知った唯一の理由なのだ。唯一の！他の理由はない。これが復活したキリストを知るための手段である。それはすべての意味を有し、わたしの兄弟や母と同じように存在する出来事である》²⁷とジュッサーニは素晴らしい表現でこのことを言っています。

「彼」から目を離さなければ、どんな状況でも、自分の想像を超えて挑戦することができます。わたしたちのどれほど多くが、—*in spem contra spem*（希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じた）²⁸—まさに《このキリストの神秘的な体の神秘》²⁹に与りながら希望を持ち続けているのでしょうか。この神秘体に属し、希望の新たな魅力を経験し、それによって、もっとも困難で劇的な状況においても自信と行動力を持つことができるのです。まさにこの時世において、そのような例をたくさん見ました。不可能だと思われるようなところででも。教皇フランシスコのイラク訪問を中継していたドメニコ・キリコは《この土地の希望、唯一の希望は、憎しみ、復讐、宗派間の暴力の論理とは別の論理が繰り広げられるのを見ることです…そして、イラクのキリスト教徒、迫害されたキリスト信者において、わたしたちは別の論理、生き方が主張されるのを見ました。キリスト教徒は悪に苦しみ、抵抗することなく、武器を取ることなく、誰も武器を取らず殉教を受け入れました…ここに、別の世界があります…これは、キリスト教徒にだけでなく、すべての人のための具体的な希望です》³⁰とコメントしました。

²⁵ 同上, pp. 55-56 逐語訳

²⁶ L. Giussani, *Alla ricerca del volto umano*, op. cit., p. 98 逐語訳

²⁷ L. Giussani, *Una strana compagnia*, Bur, Milano 2017, pp. 81-82

²⁸ ローマの信徒への手紙 4,18

²⁹ L. Giussani, *Porta la speranza. Primi scritti*, Marietti 1820, Genova 1997, p. 160 逐語訳

³⁰ Domenico Quirico, inviato de *La Stampa*, ai microfoni di *TV2000*, 7 marzo 2020 逐語訳

地球の反対側で、異なる試練の状況の中でも同じことが、《わたしは料理人で、ベネズエラに住んでいて、CL に属しています。「希望はあるのか」という質問に心を打たれたわたしは、自分の国で起きているすべてのことにもかかわらず、自分自身を見つめ直し、「はい、希望はあります」と答えました。あなた方にはここにどれだけ物が不足しているか想像できないでしょう。生活の質は最低です。電気もない、水もない、薬も買えない、お金がかかりすぎるので医者に行くにもできない、毎朝何を食べようかと心配しながら起きるのです。月に 3 ドルの最低賃金で生活することの難しさを想像してください。わたしたちは、新型コロナウイルスの流行のまただ中でストレスや不安を抱えて生きています。それでも希望はがあると皆に言いたいのです。なぜなら、具体的な顔で形作られている「存在」があり、人生・いのちを常に動かしてくれる、時間、空間、愛情、助け合いによる仲間がいるからです。この悲惨な生活の中でも、わたしは一度も孤独を感じたことがありません。神がわたしに与えてくれた出会いは、キリストがいかにわたしたちの人生に入り込み、人間性に変化を生み出すことができることを明らかにしてくれました。わたしは、わたしたちが生きていることについて、これまでとは違った見方をするようになりました。イエスの存在をもっと意識し、あらゆるしるしに注意を払い、より素早く『はい』と言う準備ができました》と、このように起こります。

4. その場を見分けるにはどうすればいいのか

しかし、わたしたちの希望を支えるその場所をどのようにして見分ければよいのでしょうか？まずは、わたしたちの経験が示すように、自分たちが決めるものではありません。《運命への道のりをより説得力のあるものにするために、聖霊の賜物が教会においてわたしたち一人一人のために、具体的な住まい、仲間を選び、決定するのである。》キリストの「出来事」は、実際に、《ある特定の時間と空間の形》を取って起こり、わたしたちを惹きつけます。《その形が（キリストの）出来事に立ち向かう一つの方法を与え、その出来事をより理解しやすくし、より説得力のある、より教育的なものにする》のです。《時間と空間の中で「出来事」を実存的に引き起こす》という、キリストの霊の介入のこの特徴は、カリスマと呼ばれます。そして、この神の愛の賜物こそが、キリストの存在の意識、信仰を可能にするのです。したがって、《キリストが洗礼によってとらえ、自分の一部としたすべての人からなる教会が、世界において効果的に行動する現実となるためには、人々が自分に起こったこと、キリストが自分たちとした出会いを意識し、その意識に基づいて行動するようになること》³¹が必要なのです。

《わたしは運動の中で育ちましたが、様々な理由から離れる決意をしました。ところがこの夏、親友でもなかった GS[CL の高校生会]の 2 人の女の子に医学の受験のために一緒に勉強しようと誘われ、その後、1 週間ほど山で一緒に休みを過ごすことになったのです。彼女らと一緒にいてすぐに気づいたのは、この 2 人だけでなく合流した他の友人たちが、わたしの限界を見るのではなく、ありのままのわたしを見て、大切にしてくれていることです。》この若い友達がこの違いをすぐに理解し心を打たれたのは、他では類似する経験に出会わなかったからでしょう。《大学に入学し、CLU (CL の大学生会) の他の若者にも同じようなまなざしを感じたので、彼らを信じてスクオラ・デイ・コムニタや運動の他の活動に参加し、従うことにしました。彼らと一緒にいると、自分が愛されていることがわかり、自分のあまり好きではない部分も抱きしめられているように感じました。彼らの前では、自分の問いを隠さず、真剣に向き合

³¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 127

えることに気づきました。要するに、希望を見出したのです。以前は見たことがなかった人生の可能性や、一緒にいる方法を発見したのです。この熱意はあつという間に過ぎ去り、日々の生活に追われるようになりました。けれども、わたしが出会ったすべての人々の中に希望があることは明らかでした。わたしはこの希望が存在し、触れることができることを確信していますが、どうしたらそれがわたしのものになり、それに完全に頼ることができるのかと自問しています》と続けています。

彼女は出会った人々の限界や弱さにもかかわらず、彼らの中に、《わたしが出会った人々のうちに》触れることのできる確かな大きな希望の存在を認めるに至りました。けれども、彼女は他の人の中にそれを見るだけでは満足せず、自分のものにしたいと、そしてどうすれば完全にその希望に自分を委ねることができるのかを問いかけます。しかし、彼女が言っている《彼らを信じて、従うことにしました》にはすでに注目に値する道のりが示唆されています。そこで、信頼して従うことの意味について自問してみましょう。

ある場所、ある人を信頼することができるのはどういう時なのでしょう。特にわたしたちが直面している生か死か、わたしたちの存在に関わる問題、存在と無の二者択一を迫られる場合、その人に従うことが理性的であり、自分自身に対して一貫性が保たれるのはどんな場合でしょうか。

ジュッサーニは3つの基準を提示しています。それは、あなたが他の人について行って、従うことに適切な根拠があると言えるのは、第一に、その人が《あなたに示し伝える人生観が、あなたとすべての人に共通する心の根源的な要求に完全に基づくものであることが明らか》な場合です。第二に、その人が《適切な手助けをしてくれる》なら、その人を信頼することができます。そして第三に、《その人があなたにとって有益である手助けを無償で与える場合。会ったときに最初に不思議に思い、心を打たれるのがこの無償であること》です。よってそのような人に従うことは、《理性に適ったことを成すべきであるように、理性的であることを成すのが義務であるように義務》³²なのです。それでは提示された3つの基準を深めましょう。

まず、これまで述べてきたように、他の人について行くこと、従うことが理性的なのは、《あなたに示し伝える人生観と運命についての考え方が、すべての人に共通する心の根源的な要求に完全に基づくものである場合》³³です。ですから、誰に従うのが理性的なのかを認識するためには、目覚めている自己、自分自身の根源的な要求の意識がある自己が必要です。実際、その要求に適切であることを証明する現実、人生・いのちに見合った希望をもたらず場所を捉えることを可能にするのは、まさにこの根源的な要求の意識なのです。よって、最初に目の前に現れたものを追いかけ混乱に陥らないためには、《愛情と情熱がこもった自分自身についての鋭い意識》³⁴が必要なのです。

第二に、その人が適切な手助けをしてくれるなら、その人を信頼することができます。つまり《心の根源的な要求に反することを克服する助けとなり、心の要求に従う時、何かを捨てなければならない、何かを失わなければならないと感じる意識、つまり犠牲することを助けてくれる人》³⁵の場合です。表面的な喪失感を阻んだり、様々な時に求められる犠牲を受け入れることは、特定の人々による適切な助けなしでは困難です。この点について、《あなたは波が砕け散っている嵐の中にいるが、あなたに理性を取り戻させ、波に流されてはいけない、屈してはいけないと呼びかける声が近くにある。仲間は、“見てごらん、

³² L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., pp. 221-222 逐語訳

³³ 同上、p. 220 逐語訳

³⁴ ルイジ・ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、ドン・ボスコ社、2015年 p.9

³⁵ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., p. 221 逐語訳

太陽が出ているよ。今は波の中にいるけど、抜け出したら太陽が見えるよ”と言ってくれる。そして何よりも、“見てごらん”と言うのである。なぜなら、共に召し出され、呼ばれた仲間の中には、常に目を向けるべき人、あるいは人の見るべき瞬間が必ずあるからである。仲間のうちでは、人を見るのが一番大切である。そのため、仲間は友情の大きな源となる。友情は、人が運命に向かって歩むのを助けるという目的によって特徴づけられる》³⁶というジュッサーニの記憶すべき文があります。

仲間や友人の本物の助けは、現実との関係の労を省くためではなく、現実を生きることを支えるためのものです。この場合にもわたしたちの自己がかかっているのです。わたしたちはしばしば、助けにはならない助けを求めてしまうことがあります！ですから、ある場所（仲間）に、自分を現実から身を守り、現実を回避し、現実と直面することによる労苦を免れる助けを求めることと、現実がどのようなものであれ、現実と導いてくれる助けを求めることはまったく違うことです。さらにジュッサーニは、《もし教会が出世や自己表現、探求などの人間的労苦を解決することをその目的と認めるならば[...]それは、子供の問題を代わりに解決できると錯覚する親のようなものである》と指摘しています。それでは、教育上の任務を果たすことができなくなります。なぜなら、教会の任務は《人間がその歩みの途中で遭遇する問題の解決策を提供する》³⁷ことではなく、問題と直面した時、可能な限りその解決策を求めるための最適な条件、現実に対する正しい態度を人間に生じさせることだからです。

最後に、ある人を信頼することが理性的なのは、わたしに対して助言する唯一の動機がわたしの運命、わたしの人生の喜び、わたしの幸せへの愛着のみである時です。聖パウロは《わたしたちは、あなたがたの信仰を支配するつもりはなく、むしろ、あなたがたの喜びのために協力する者です》³⁸と言っています。つまり、わたしに声をかけることに打算がなく、なにがしかの見返りを期待せず、策略せず、無償である場合に、その人を信頼することは理性的なのです。《無償とは、他の人の運命を愛することに尽きる》のです。心に響くものをわたしに伝えてくれる人は、《何も計算せず、自分自身には何の得もなく》、ただ《わたしの人生・いのちの良い結果、わたしの人生が運命に到達するため》にそうしてくれるのです。ここでもまた、目覚めていて、注意深い自己が必要です。実際、ジュッサーニは《この[...]要素は、非常に重要なのだが、すぐには理解できないので、カッコ付けにしておこう。誰かがあなたを無償で愛していると理解するためには、無償で長い間愛し、無償で人を愛することを人生の中で教えられていなければ理解できないのである》³⁹と付け加えています。

そのような特徴を持った人に出会ったとき、その人についていくことは理性的であり、従うことは自分自身との一貫性を持つこととなります。《自分自身に従うことは、他人に従うことである。これはパラドックスであり、エバを屈服させたパラドックスでもある。人間が存在して以来、これこそが自由の試練であるパラドックスである。自分自身であるためには、他の人に従わなければならない（わたしたちの間で起こることである）。》もし、この法則に従っていなかったら、各自どうなっていたか想像できるでしょう。《心に一致する第一のことは、「わたしは存在していなかった。存在したいなら、他者に従わなければならない」ということである。人間のことをこのように話してくれる人は正しい。逆に、人間は自分の運命の主であり、「存在する」ことが可能である－アルフィエーリのように“わたしは望んだ、常に望んだ、

³⁶ L. Giussani, *Un avvenimento di vita, cioè una storia*, op. cit., p. 459 逐語訳

³⁷ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, op. cit., p. 204 逐語訳

³⁸ 第二コリントの信徒への手紙 1,24 逐語訳

³⁹ L. Giussani, *Si può (veramente?!) vivere così?*, op. cit., p. 221 逐語訳

力の限り望んだ”と話す人は、わたしを欺くことになる。ごまかしである。》⁴⁰

要点を繰り返すと、誰でもが、どんな集団でもが従うに値するわけではなく、信頼することがどんな場合にも理性的であるわけではありません。《あなたの従順を求める人が、あなたの心の必要、つまりわたしと同じようにあなたが持っている深い必要に一致する根拠をあなたに示す》場合にのみ、信頼して従うことが理性的なのです。つまり、その人があなたに言ったことは、《すべての人に当てはまることである。ある宗派の概念の提案ではなく、誘拐の試みでもない！みんなのためになる、みんながより満足する価値観を提案してくれる。そのため、心の奥底にあるものに一致する提案であって、状況の仮の分析、空想的な分析の結果を示すものではない。いやいや、これらはすべての人間の基本的な善を育み、高める基本的なものであり、人間の心の要求に応えるもの》⁴¹なのです。ですから、先ほど言ったように、信頼するためには自分自身であることが、騙されないためには目を覚ましていることが必要なのです。

5. どうしたら他の人の中に見るものを自分のものにできるのか

これで、若い友人が提起した問題（4節）の一番目に立ち向かう要素が揃いました。彼女は、出会った人々、心が再び燃えた場所で認めた希望は、どのようにしたら自分のものになるのだろうか。どうすれば理性的にその希望に頼ることができるだろうかと、問うています。

希望は、彼女がすでに歩み始めた道を、これまで以上に意識的かつ意欲的に継続することによって、自分のものにすることができます。つまり、彼女にとって希望が明らかであり、信頼するに十分な理由を認めた人々に従うことによってです。道は従うことです。

また、《従う》という言葉とともに、《責任》という言葉を使うこともできます。これはまず、《シモン、わたしを愛しているか》と訊ねたイエスに対して、ペトロが即座に《はい》⁴²と答えたことによってわかります。それは、数日前の裏切りでさえも止めることができなかつた《はい》でした。なぜなら、それは、その男との最初の出会いから生じた驚きの結果として生まれたものであり、「彼」との数年の生活の中で強まった愛着の結果として生まれたものだからでした。それは、感情的な現象ではなく、理性によるものでした。自分を見つめ、抱きしめ、人生の中で他の誰よりも自分を愛してくれたという判断からその存在に釘付けにされたのです。《愛されているからこそわたしがいるのであれば、わたしはそれに応えなければならない (*respondeo*)。 “責任”はここから生じる。[...] 責任という言葉は真理への、美の魅力への、善に対する感動への、計り知れない幸福への一致の経験の結果を保証するのである。》この責任は、《自分自身の運命に完全に一致するものとして認識されている「存在」の前での自由の決断として表現される。》

⁴³

わたしたちは多くの場合、自由の決断をあたかも主意主義的な行為、《意志の力》と同じ意味であるかのように勘違いします。むしろ、シモン・ペトロにとってそうであったように、それは尊敬や愛情の表れであり、愛着の頂点なのです。わたしたちを魅了した人々の中に見た希望を自分のものにするために必要なのは、この場に留まり、わたしたちの仲間の中にどっぷりと浸かって生きる素朴さのみです。そうすることによって時間の中で揺がない確証を身にまとい、未来に大胆に挑戦するようになれるのです。

⁴⁰ 同上、p. 222 逐語訳

⁴¹ 同上、p. 224 逐語訳

⁴² ヨハネ 21,15-17 参照

⁴³ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 112 逐語訳

ここでは、自由のうちに確認する必要性が高まります。この仲間、この場は、自由の空間であり、一人ひとりが受け取った約束を確認するよう促しています。個人的な確認を促さず、自由を重要視しないなら、キリスト者の仲間とは言えません。CLの大学生会に会った、ある若い女性が《わたしの自由が尊重されるから、ここがわたしの居場所だと理解しました。彼らはわたしに何かを強制するのではなく、わたしの中で何かが起こるのを待ち、わたしがそれに従うのを待っているのです》と話してくれました。これは、自由な存在としてわたしたちをつくられた「神秘」のわたしたちの自由に対する尊重のしるしです。誰もがいつでもこの仲間から離れることができますが、この仲間はなくなりません。それは様々な理由のため離れていく人々に対する最大の友情の証です。つまり、いつでも戻れる場所があるということです。

《親愛なるフリアン神父様、最近、12年ぶりにフラテルニタの黙想会に申し込みをしました！2009年の黙想会が最後でした。その時、わたしは運動の中での自分の歩みについて確かな判断ができず、戸惑っていました。事実、何年も運動に真摯に向き合ってきたわたしは、形式的なものと活動主義に陥っていることに気づきました。なぜなら、運動のためにいろいろなことをしていましたが、それはもはや自分のためではなかったからです。わたしの自由はもはやそこにはなく、おそらく信仰もなかったと思います。それで、すべてを捨てようと思ったのです。その年の12月、わたしは“もういいです”と伝えるためにあなたに会いに行きましたが、あなたの反応は意外なものでした。わたしが“戻ってきました。ここにいたいのです！”と言えるようになる12年後の今日まで、あなたに抱きしめられたことは忘れられず、わたしに寄り添ってくれました。あの時あなたは“行きなさい。一つの形を捨てることは気にしなくていいけれど、毎朝目覚めた時に‘今日、わたしの希望は何を支えにしているのか’という問いを決して忘れないように気を付けなさい”と言いました。それ以来、医師としての仕事に専念する日々を送った結果、わたしは見知らぬ都市で、科学論文でしか知らなかった医師長に出会いました。初めて電話で話した時から、わたしは彼に感銘を受け、魅了されました。しかし、その魅力の背後にあるものを理解したのは、彼と一緒に仕事をするようになってからでした。彼は信仰の人であり、さらには運動の人だったのです！何と云えばいいのでしょうか。イエスに“ちょっとからかわれた”というよりも、大きな贈り物をしてもらったのです。このことはイエスのわたしへの愛のしるし、そして赦しのしるしとして当時も今も受け止めています。「彼」は、仕事の中で、困難で時に無味乾燥とした日常生活の中で、わたしが見失った道を再び見つけること可能にしてくれました。こうしてスクオラ・ディ・コムニタも再開し、数日前にフラテルニタの黙想会へ参加の申し込みをしました。それらがわたしには必要だと確信しています。自分の経験から言えることは、希望はあり、それは無条件であり、わたしの弱さが妨げではなかったように、限界を設けず、ある「存在」のうちに生きていて、毎日、望む“だけ”でよいということです。》

確認の歩みは、誰にとっても必要なものであり、毎日、人生のあらゆる時点で、状況の連続、変化の中で最後の最後まで、誰にでも関わるものです。

《わたしはわずか一年前にフラテルニタに登録をしました。30年前の大学卒業を機に運動を去りました。多くの活動や様々な人と関わる日々を送っていたけれども、すべての意味が消えたようで、すべてが当たり前となり、人生・いのちは潤いをなくしていました[もし、わたしたちの仲間が運命への道でなければ、人生は無味乾燥としたものになり、その仲間はわたしたちにとって興味のないものになります]。みんなと同じように家庭、子どもたち、仕事といった素朴で美しい出来事に溢れた充実した30年でした。そして、3年前に病気が発覚し、人生のスピードが速くなり、それに伴って意味を問うことも切実になり

ました。たまたま、運動の医師に遭遇し助けを求めました。彼はわたしを「年度始めの日」に招待してくれ、そこであなたの言葉に思いがけない一致を感じたことに驚いたのをよく覚えています。自分の心や望むものの本質が描かれ、理解されているように思いました。何年も離れていたのに、まさにこの場で一致を見出すなど、信じられないような驚きです。こんなことがあり得るとは思ってもみませんでした！非常に単純だけれど、本質的で意味深い友情が何人かの人と始まりました。パンデミックのために集まることが少ないこの数ヶ月間でさえ、この人々との関わりはわたしにとってもっとも重要な基準となっていたほどです。わたしの人生にとって良い仮説としての道のりの貴重な可能性が優先される友情であり、こうしたものは他では出会ったことがありません。昨年12月、定期検診のために病院に行き、検査結果を待っている間、自分は恐れていないことに気づき驚きました。自分で納得することや考えること、意志の努力の結果でなかったのは確かです。わたしが参加した活動、共有することができたわずかな友情など、この2年間の経験が「他者」の存在によって、現実の確実性に対する確信を少しずつ築き上げてきたことは明らかです。多くの瞬間の美しさや、真の問いをすることができる場所に出会ったことへの驚きと感謝は、ほとんど無意識と言っているほど、わたしの中に場を広げ築いていきました。希望は達成すべきものではなく、確実な回復やパンデミックの終息といった特定の状況の実現に基づくものでもありません。希望はすでにそこにあり、わたしの人生・いのちに働きかけ、病気の経験にさえ影響を与えます。わたしにとって、今ここで百倍の可能性が具体的で否定できない経験となりました。》

キリストの存在を確かなものとし、この場所で伝えられる希望を自分のものとして生きるためには、明確な事実として初めに認めたものが深まり、確信となるように個人的な確認が必要です。わたしたちが出会ったものは、魔法や感情によってではなく、最初の直感が確認される歩みの経験によって自分のものになるのです。それは、先に述べたように、《そして使徒たちは彼を信じた》⁴⁴という使徒たちが経験した力です。この表現は、彼らの歩みのステップを示しています。わたしたちにとっても同じで、日々の出来事はすべて、この裏付けと確認の機会になります。道のりのどんなことも排除されてはなりません。それどころか、わたしたちにされた約束に対して確信を持つためには、自分の身に起こるすべてのことと向き合うことが唯一の方法なのです。

《この数週間の学内選挙のキャンペーンは、非常に充実したすばらしい日々でした。家に閉じこもり、物理的には一人でコンピュータの前にいたにもかかわらず、具体的な満足感を味わい、自分が何者であるかを、そして、人間関係の価値をより見出すことができました。けれども、このすばらしい日々後、投票が終わったとき、わたしは自分を自身の尺度で計り、落胆しました。結果に左右されないためには力不足だと気づきました。過去数週間のすばらしさは、わたしを虜にしている悲しみの前では持ちこたえられませんでした。同時に、その経験したすばらしさを失うことや消してしまうことを、または敗北感だけが残ることを恐れていました。投票後の数日間は、わたしの中に多くの不快な疑問が浮かび上がり、心穏やかではいられませんでした。なぜ数週間前の満足感だけでは十分ではないのか。結果に落胆する中で持ちこたえられるのは何か。なぜわたしは自分が経験したすばらしさを消してしまおうとするのか。落選したわたしには何が残されるのか。不満や悲しみは当初、他人や、一緒に暮らす両親に対してわたしを閉鎖的にしました。にもかかわらず、数日後には、自分が生きてきた数週間を失わないために判断しなければならないという思いがわたしの中で勝っていました。それがきっかけで、友人に相談し、自分の中で一番違和感のあるスキャンダルも持ち出しました。自分自身に対する尺度、やっていること、感じている

⁴⁴ ヨハネ 2:11、4章 1b 参照

悲しみと、経験した満足感—いつも感じていたい—との間で葛藤が生じました。ある友人は、この状況によってわたしの人間性が高められたことを指摘しました。自分に対するこのスキャンダルには何のプラスも見出せなかったので、わたしは心を揺さぶられました。一方では、もはや無視できない自分の人間的な小ささが浮かび上がり、他方では、単に自分を捧げ、自分が生きていることを他人に伝えることに満足していたという事実に気付かされたのです。》

個人的な確認の過程で行き詰らないためには、常にわたしたちの尺度を壊し、まなざしを開き、見えないものが見えることを可能にする場の中にいることが必要なのです。

イエスが連日ペトロの尺度を挑発している様子はとても分かりやすいものです。いい例は、足を洗うシーンです。《イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを[足を]洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。》この言葉を前にペトロは屈して《「主よ[そのような条件をつけるなら]、足だけでなく、手も頭も》⁴⁵と言います。突然態度を変え、自分の尺度が勝らないようにそそのかす、彼の中で勝っているものは何でしょうか。キリストへの愛着です。

わたしたちが置かれている環境から否応なしに吸収し、自分たちの中で作り上げる枠組みに囚われないうためには、常に生み出されている必要があります。《常に開かれ、偏見のない判断は、実際には、(すべての要因を考慮して現実に開いているものとして) 理性の動きを尊重し、高める唯一のものであるだけに、人間だけの力では不可能なのである。》⁴⁶ それを可能にするためには、わたしたちの理性を常に開いてくれる場が必要です。その場所とは、ジュッサーニがカリスマの経験の特徴とする《全体に対して開くことを可能にする特定のもの》⁴⁷です。わたしたちの判断力を頑なにしようとし、幾度も行き詰らせる尺度に屈しないためには、力を振り絞ることも、抜け目のない戦略も役には立ちません。わたしたちの理性が拡がるように助ける生きた現実から目を逸らさないことで十分であり、理性本来の開きを損なわないように全体を見渡せることを可能にする場への愛着が必要なのです。

自分自身や世界へのまなざしを新たにすることの場の力を体験すればするほど、その場に対する愛着は増していきます。確認は、キリストがわたしたちの人生を惹きつけ、寄り添うために選ばれた道具(運動)に属しているという意識を深め、養い、具体化します。

それは、弟子たちがイエスと共に生活していた最初の頃とまったく同じ動きです。彼らがイエスと共に過ごした日々は、《一握りの接着剤を加えていった》⁴⁸とジュッサーニは美しい表現を用いています。それは理不尽さや強引さのかけらもなく、愛着を深め、理由に満ちた愛情を伴う判断でした。それと同様に、わたしたちが出会った仲間のうちに留まり、その仲間が勧める確認を行うことを受け入れるならば、わたしたちはますます理性的にその仲間へ愛着を持ち、そして何よりも、その仲間がしるしとなり、目に

⁴⁵ ヨハネ 13,3-9

⁴⁶ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 91 逐語訳

⁴⁷ 同上, p. 129 逐語訳

⁴⁸ 同上, p. 113 逐語訳

見える顔である「存在」をより個人的に発見するように導かれます。すなわち、わたしたちの希望であるキリストを発見するのです。実際、そのために仲間が存在しているのです。ですから、弟子たちに起こったことは、今日のわたしたちにも起こります。主の「存在」への愛着から、希望の花が咲くのです。

フラテルニタの黙想の内容を収録した最新著で、ジュッサーニは《ペトロはあらゆることをやらかしていたにもかかわらず、キリストへはこの上ない好意を持っていた。彼は、自分の中のすべてがキリストに向かっている、そのまなざし、その顔、その心にすべてが集中していることを理解していた。過去の罪は妨げにならず、将来の矛盾も妨げにはなり得なかった。キリストが彼の希望の源であり、希望の場だった。彼がやったことが妨げになったとしても、自分がやらかすかもしれないことが妨げになったとしても、その妨げの霧の向こうに、彼の希望の光の源であるキリストは存続するのである。彼は、イエスに見られ、見つめられたと感じた最初の瞬間から他の何よりも「彼」に好意を寄せていた。そのため「彼」を愛していた。“そうです、主よ、あなたはわたしの最高の好意と最高の尊敬の対象であることをご存知です”》⁴⁹と述べています。

キリストは、わたしたちの希望の光の源です。そして、ドン・ジュッサーニに与えられたカリスマの恵みから生まれたわたしたちの仲間は、キリストへの自分自身の回心を生きる助けとなります。《なぜなら、この運動の経験の本質は、信仰がすべてであり、キリストを認めることが人生のすべてであり、キリストが宇宙と歴史の中心であるということだからである。》⁵⁰ わたしたちの間の兄弟愛、運動を織り成している人間関係は、《現存するキリストの神秘をわたしたちが生きる方法》⁵¹なのです。それは、キリストとの個人的な関りのドラマを避けるための抜け道ではなく、逆に、それをより強く、意識的に生きるための助けであり、挑発でもあります。わたしは、毎朝目を開けた瞬間に、キリストに《「あなた」》と言いたくなるような自由に挑戦するドラマを常に生きたいと思います。《朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた》⁵²という、イエスが経験されたのと同じドラマです。わたしたちはこのレベルで命をかけているのです。ジュッサーニは、ちょうど30年前に《運動は、わたしたち一人一人が持っているキリストへの愛情、わたしたち一人一人が持つことを聖霊に乞い願うキリストへの愛情によってのみ歩む時が来た》⁵³と述べています。したがって、わたしたち一人一人のキリストへの愛情によって、この運動は続きます。わたしたちの努力や意図など、その愛情以外のものはあまりにももろいのです。

したがって、これらの人間同士のつながりが「神秘」と関係する労を省かせないだけでなく、絶え間なくその関係を挑発し、絶えず可能にします。実際、もし「神秘」が人間の仲間、ある場、人間同士のつながりを通して、今存在するものとならなければ、関係のないものそのままになり、「神秘」を様々な方法で人生・いのちから追い出そうとし、起こることの打撃に耐えることができない希望を糧とする一般的なメンタリティーがわたしたちの中で勝つことになるでしょう。

わたしたち皆にとって生きるために必要なのは、まさに現存する「神秘」なのです。《人々が老若を問わず必要とすることは究極的にはただ一つである。それは自分の生きている時間、人生・いのち、自分の運命が肯定的なものだという確信である。》⁵⁴ しかし、《希望》と呼ばれるこの確信は、力を合わせても、

⁴⁹ L. Giussani, *Attraverso la compagnia dei credenti*, op. cit., p. 132 逐語訳

⁵⁰ L. Giussani, *Una strana compagnia*, op. cit., pp. 191-192 逐語訳

⁵¹ L. Giussani, *L'opera del movimento. La Fraternalità di Comunione e Liberazione*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2002, p. 71 逐語訳

⁵² マルコ 1,35

⁵³ Corresponsabilità, «Stralci dalla discussione al Consiglio internazionale di CL-agosto 1991, *Tracce-Litterae communionis*, n. 11/1991 逐語訳

⁵⁴ L. Giussani, «Cristo, la speranza», *CL Litterae Communionis*, n. 11/1990, p. 18 逐語訳

連帯しても、すべての努力を結集しても、わたしたちは自分で自分に与えることはできません。人となった神だけが、その死と復活によって、わたしたちを内側から成している運命への渇き、自身の存在が肯定的なものであるという渴望に応えることができるのです。これまで述べてきたように、わたしたちを惹きつけた形における主の存在との出会いは、わたしたちの人生・いのちの恵みであり、わたしたちの無に対する主の無限の憐れみです。しかし、それを特権のように独り占めすることはできないのです。

《大学で勉強していると、何ヶ月も会っていなかった同級生が挨拶しに来てくれました。彼女は、自分自身のこと、パンデミックの状況に恐怖を感じていること、科学の進歩に期待していること、ワクチンによって正常な状態に戻ることを望んでいることなどを話し始めました。その時が来るまでは、人生の中断を余儀なくされるだろうと彼女は言いました。わたしにとって状況は成熟のための要因であることを伝え、自分へのより本物のまなざしを乞い願うために戻ることのできる場所、顔があることが最大の恵みであると、驚きをもって伝えました。その数日後、彼女から届いたお礼のメッセージには、“あのよう”に意味深い”会話は何年ぶりだろうか”と書かれていました。彼女の心が望んでいるのは、わたしが望んでいること、つまり、何事にも恐れずに立ち向かうことを可能にする現在における確信です。都市封鎖が開始されてからのこの数ヶ月間、生き方や自分自身を見つめる誠実さによって、わたしの人生に希望を与えてくれる人々が目の前にいることに感謝の気持ちでいっぱい、わたしは自分があるままの姿で愛されていることに気づきました。わたしの一日の中にキリストがおられることを認めることは、より継続的になり、あらゆることの前でわたしの心を常により真の状態に戻らせる感動を生み出します。クリスマスのポスターに書かれている“キリストの存在は、日常の生活の中で、よりいっそう心の鼓動を介する。すなわち、「彼」の存在による感動は、日常生活の中で感動になる。何一つ無意味なもの、無関係なものはなくなり、すべてのもの、すべてに対して愛情が芽生える”という言葉の真実を発見します。》

単に 2000 年前の現実の出来事としてではなく、今日の現実の出来事としてのキリストは、日常の生活の中に入り込み、その現実を変え、より本物に、より人間的なものにします。キリストがわたしにとって現実の出来事であるならば、もしわたしがキリストを受け入れ、日常生活を織り成す中に入り込むことを許すならば、それはわたしの人生・いのちに起こる変化として示されます。1964 年にジュッサーニは《キリスト教とは、この世で生きるための新しい方法である。それは新しい生き方であるので、何か特定の経験や方法、異なる行為、通常の語彙に追加する表現や言葉を表すものではない》と書いていました。そして《出会いのように、キリスト教の勧めは、今日のわたしたちにとって、周りの人々による呼びかけと重なる。そして、他のあらゆる勧めの中で、この勧めがこのように具体的で実存的な顔を持っているのはすばらしいことである。関心事が異なるから異なるのではなく、共通の関心事を実現する方法が異なるから異なる、この世の中にある共同体、この世における別の世界、現実の中の異なった現実であるべきである。》⁵⁵と続けています。

キリストの出来事、それに遭遇し、それを受け入れる人々の人生にもたらす違いこそが、希望を伝える要因なのです。

しかし、一瞬たりとも立ち止まってはられません。出会いの刷新のために、キリスト信者の仲間の中に留まるために経験する魅力は、わたしたちの中で‘しごと’にならなければならない、警戒（《美しいものを征服した人が、それを守らなければならないように、城壁の上に立って眠らず、つまり、気を散らさず、形式的にはなく、気を張り巡らせている者のように》）しなければならず、記念にならなければなりま

⁵⁵ L. Giussani, *Il cammino al vero è un'esperienza*, Rizzoli, Milano 2006, pp. 139, 145 逐語訳

せん。記念とは、《わたしたちが思い出すというのではなく、一度姿を現すと、もはや立ち去ることなく、現れ続ける存在への継続的な同意である。それがわたしたちの前に姿を現すと、（それがわたしたちを成しているので）もはや消え去ることのない存在として現れ続け、他の人の中で知覚できるようになり、その存在を生きるという目的のためにわたしたちを一つに集めるのである。よって「聖体」と同じように交わり（コムニオーネ）というのである》⁵⁶とジュッサーニは言います。

⁵⁶ L. Giussani, «Tu» (*o dell'amicizia*), Bur, Milano 1997, pp. 318, 319 逐語訳

困難な状況下での希望

《わたしに従う者は、この世で百倍を受ける》¹ イエス自身が、自分に従うことを確認する基準を示しました。それと同じように、しつこいようですが、イエスに対して従順を生きる者に約束された希望も何一つ排除せず状況と照らし合わせて確認することが求められます。

1. 欺かない希望

キリストがした約束を欺かない希望は、人生で直面せざるを得ない挑発に耐えられることを示す必要があります。そして今の時世はそのことを容赦なくわたしたちの目の前に突きつけてきたのです。望んでいようがまいが、誰もが、あらゆる苦境や挑発、特に自分にとってより意味深いものを前に、自分の希望が持ちこたえるかを確認するよう求められています。わたしたちは、ジュッサーニとともに、《人々は、老若を問わず必要とすることは究極的にはただ一つである。それは自分の生きている時間、人生・いのち、自分の運命が肯定的なものだという確信である》と述べました。ある状況に直面したとき、自分の中にこの確信があるのか、それとも不確かさや恐れが勝って、建設的でなくなり、心配事に振り回され自己中心的であることが明らかになります。

ですから、わたしたちの希望を確認するために根本的に貢献するものは現実から来るのです。状況が決定的であるのは、一方で希望の実質を明るみに出し、他方で真の希望が自分自身の奥深くに根付くからです。したがって、キリスト教の希望が欺かないかどうかを確認するためには、状況、特に避けられない状況との遭遇や衝突において、現実がわたしたちに労を省かせない事柄を直視しなければなりません。わたしたちに伝えられ、証しされた希望がわたしたちの中に宿り、わたしたちのものとなるのは、歩いていく中で確認を通して状況と関わる時《のみ》なのです。

a) 死

ある意味では人生の最後に位置していますが、人間の意識の中で不快で邪魔な存在のように、わたしたちの一瞬一瞬に付きまとう難関である死についてまず考えてみましょう。容赦ない敵に立ち向かわずに未来に確信を持つことができるのでしょうか。偉大な歴史家ホイジンガは、死は人生の定義の一部であると、《歴史においても、自然界と同様に、死と誕生は常に隣り合わせである》²と書いています。死は、生きているものに起こるので、生の現象です。よって避けて通ることのできない問題であり、特にわたしたちのような自己意識を持った存在にとっては避けて通ることはできないのです。実際、死について知ることは、様々な方法で排除しようとしても、わたしたちの本質的な自己認識を特徴づけるものです。パンデミックにより、死という基本的で明白な事実がすべての人々の前にクローズアップされました。それ

¹ マルコ 10,29-30 参照

² J. Huizinga, *Autunno del medioevo*, Bur, Milano 1995, p. XXXIII 逐語訳

ほど身近に感じることなく、日常の生活の中では忘れてたり、覆い隠してしまったりすることが多かったとしても、今回はベランダからの傍観者やテレビを観ている人のようにではなく、自分の身にふりかかり窮地に追い込むものとして、死を認識することを余儀なくされました。めいめいは、家族や友人が亡くなったことによって死が身近になり、わたしたちは毎日、死者の数と向き合わなければならなかったし、今も向き合わなければならないので、それを経験することができたと思います。わたしたちは皆挑発されています。誰も現実が《暗黒》ではないふりをすることはできません。

死という挑発をジュッサーニはどのように捉えていたのか一緒に見ていきましょう。彼は、聖務日課を読みながら《神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない。生かすためにこそ神は万物を造りになった。世にある造られた物は価値がある。滅びをもたらす毒はその中になく、陰府がこの世を支配することもない。義は不滅である》という*知恵の書*の一節(1,13-15)に目を留めます。そして1990年に行われた集まりで《わたしは、まるで深い反抗によって打たれたかのように、この言葉は真実ではないと叫んだ。マルコとアンドレアという2人の若い友人が、山に行ったときに転落して死んでしまうような世界で、義が不滅とは言えない》と言った後、すぐに《しかし、この言葉を何らかの形(意味)で受け入れなければ、人は生きていけない。肯定的な希望がなければ、人は生きていけない》と付け加えています。そして、この言葉を受け入れるためには人々は二つの選択肢があると言います。

《一方では、本能的であるだけで根拠のない楽観主義がある。近代のあらゆる文化を支配してきた楽観主義である。わたしたちはそれをギリシャやローマ時代の世界観から受け継いできたが、そのルーツはあらゆる時代にある。それは、人生を考える上での楽観主義であり、それがなければ人は生きていけない。しかし、それは表面的な楽観主義であり、偽りである。この楽観主義を維持しようとする人は、自分の周りで起こっていることにまったく気を取られないので、皮肉った楽観主義である。他方で、自分の意志の強さ、自分の建設的な能力に期待して反応するのである。これも、わたしたちが生きている世界の特徴である。人々はユートピア、つまり自分たちで、個人的あるいは皆で作ったプロジェクトに人生の解決策を託すのである。様々な形のユートピアや夢、つまり、範囲の限られた、特定のものに基づく希望に救いを求める。肯定的なものへの渴望に対する答えとして人間の心で形成されるいかなるユートピア(女性、お金、政治)は暴力につながる》³とジュッサーニは続けます。

これらは嘘と誤解に満ちた選択肢で、どちらも不十分です。

わたしたちが生きるために造られたことは真実です。*知恵の書*の一節には人の心の本質が明言されています。しかし、このような心の本質、つまり、わたしたちを成している議論の余地のない生への望みに対して、誰が答えられるのでしょうか。キリストです。死んで復活したキリストだけが答えを与えてくれるのです。《*知恵の書*の一節への唯一の答えは、「御言葉」が肉となったということだ。》キリスト以外に答えはありません。事実、キリストがいなければ、《偉大な哲学者がつくったものであっても、インチキで、わたしたちは思い上がった冷笑的な楽観主義に陥るか、平凡な、または壮大なユートピア主義に陥らざるを得ないだろう。いずれにしても暴力に満ちたものである》⁴とも言っています。

*知恵の書*の文は、人間の問題の核心に触れるものであり、人間の心の観点からすると急所です。《生かすためにこそ神は万物を造られた。世にある造られた物は価値がある。滅びをもたらす毒はその中になく、陰府がこの世を支配することもない。義は不滅である。》キリストがいなければ、《これは真実では

³ L. Giussani, «Cristo, la speranza», *CL Litterae Communionis*, op. cit., p. 14 逐語訳

⁴ 同上、p.15

ない。なぜならば、矛盾は、人が想像し、構築したすべてのものを破壊することで終わり、人を死の深淵に押し入らせるからである。人はキリストなしには、聖書のこれらの言葉に根拠を与えることはできない》⁵とジュッサーニは先ほど引用した集まりで強調しています。

死んで復活したキリストこそが、*知恵の書*の問い、つまり人間の問題に対する唯一の答えなのです。イエスはニコデモに《神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである》⁶と言いました。ここに、わたしたちが生きている究極の動機、すなわち真の希望があるのです。それは、今ここにいるイエス・キリスト、人間の人生における現実の出来事です。繰り返しますが、しかし、これらはすべて、個人的な経験にならなければなりません。

ある大学生が《“希望はあるのか”という問いに答えるためには、3年前に自ら命を絶った友人の葬儀という、わたしの人生のある瞬間を思い出さずにはいられませんでした。特に、葬儀に参列した時、2つのことを考えさせられました。1つ目は教会でのミサ中のわたしの態度です。わたしはずっとひざまずいて、あの痛ましい悲劇的な瞬間がわたしの惨めさよりも偉大な「方」の手に委ねられ、救われるように祈っていたことです。2つ目は、ミサが終わって友達数名とタバコを吸っていたときのことです。その中の一人がわたしに向かって“なんで泣かないの？なぜわたしたちと同じように打ちひしがれてないの？なんて顔しているの？まるで平穏な日々を過ごしているかのようよ”と言いました。わたしは少し当惑しましたが、自分に起こっていることに驚いていました。わたし自身その時の自分の状態の説明や、理由づけをすることができませんでした。しかし、どんなに悲しくても、絶望はしていなかったことを認めざるを得ませんでした。その自殺は、わたしの人生と心を決定するものではありませんでした。なぜなら、その瞬間にも、わたしの中にはわたしが喜んでいようにさえ見させる“他者”が際立っていたからです。わたしの心は絶望ではなく、わたしと彼女のすべてが救われることを願い求めていました。わたしたちの間に蔓延していた痛みの中で、わたしは完全に抱きしめられている経験をしました！他の人も気づくほどの恵みでした！このエピソードは、それからの数週間のわたしを変えました。日常生活に戻り、小さな十字架や労苦の中でもこの出来事は離れませんでした。人生の中でもっとも劇的で苦しい状況に直面しても、希望はあると言えるのは、なんとという恵みでしょう！それはわたしが考え出したものではなく、心理的な変化でもありませんでした。これは、生きた肉体的な存在によってわたしの中に入り込んだ希望であり、わたしの心の奥底までをとらえ、わたしの人生・いのち全体を変えたのです。このことに気づくことができるのは、本当に恵みです！それは、わたしを包み込んで離れない平和です。この人生にノーと言うことを決めた友人の前でも。すべては大学で運動やキリスト教との出会いによって始まりました。つまり、最初の瞬間からわたしの悪を見ることなく無条件で愛してくれる顔との出会いがすべての始まりでした。わたしは、まさに自分の身に起きたこの出来事のために、*金輪際*、自分の人生に価値がない、意味がないと考えることはないと言えます。》

彼女は自分の身に起こったことから、聖パウロのように、《希望はわたしたちを欺くことはありません。》⁷と覚悟をすることができるのです。《*金輪際！*》というのは葬儀の時に経験した確信です。まさに、どんな状況の中にも、どんな状況にも立ち向かう力こそが欺かない希望を持っていることの証明です。聖パウロが書いているように、《誰がキリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。[…]これらすべてのことにおいて、わたしたちは

⁵ L. Giussani, *Un evento reale nella vita dell'uomo (1990-1991)*, Bur, Milano 2013, p. 149 逐語訳

⁶ ヨハネ 3,16

⁷ ローマの信徒への手紙 5,5

わたしたちを愛してくださった方によって、輝かしい勝利を取っています。わたしは確信しています。死も、いのちも、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。》⁸

このような確信を持ってこの言葉を言えるために、聖パウロはどんな経験をしたことでしょうか。それは二千年前に始まった経験です。ヨハネやアンドレ、ペトロのことを考えてみましょう。あの人が彼らの生活圏に入ってきた瞬間から、彼らのすべての行動、すべての愛情、日常のすべては、「彼」に関わりがありました。「彼」に従ってついて行く場所では、彼らの心には他のどんなものも入る余地はありませんでした。⁹彼らは、十字架にかけられ、復活したイエスを見たのです。彼らが母親や愛する人の死に直面したときのことを想像してみましょう。人間的な悲しみや、その人の気質によっては涙が止まらないことがあったとしても、彼らの中には揺るぎない一つのもの、喜びがありました。なぜなら、彼らの目には死んで復活した「あの人」が映っていて、すべてを見る目からもはや「彼」を取り除くことはできなかったからです。教皇フランシスコが言われるように、《最終的に外部の状況に左右されない、与えられた「存在」に寄り添われていることです。つまり、日ごとに深まるイエスとの親しみ》¹⁰なのです。

ジュッサーニは最後までこのことを証しました。限界と苦しみが明らかな状況の中で、最後の挨拶となった2004年のフラテルニタの黙想会の終わりに《キリストの勝利は、死に対する勝利だ。そして、死に対する勝利は、生に対する勝利だ。すべてにポジティブな要素があり、すべては善だ[……]どんな矛盾や痛みも、この人生という“乗り物”の中でポジティブな答えがある。[……]人生はすばらしいからだ。人生がすばらしいのは、キリストの勝利によって神が約束されたものだからだ。したがって、目に見え感知できる状況がどんなに苦しく想像を絶する状況であっても、毎日ベッドから起き上がることは、人間としての視野の届くところで生まれようとしている善なのだ》¹¹と言いました。

死を前にしてもなお消えないポジティブさは、期待を裏切らない希望を持っている証拠であり、そこにある何かを体験することによる希望です。《未来は、わたしたちが今持っている何かを抛り所とする。わたしたちはその何かに今所有されているのである。》¹²

b) 苦しみ

死と同様に、苦しみは人間の人生・生活の一部です。人間の有限性に起因する苦しみだけでなく、人間の責任に起因する苦しみも同様です。《確かにわたしたちは苦しみをなくすためにできるかぎりのことをしなければなりません。しかし、わたしたちの力では、苦しみを世界から根絶することまではできません。理由は単純です。わたしたちは自分の有限性から抜け出ることができないからです。そして、だれも悪と罪を取り除くことができないからです》¹³苦しみや苦しんでいる人への関わり方は、社会全体とわたしたち一人一人の人間としての経験の真実を示す指標となります。わたしたちの生活環境の中で、苦しみを排除しようとし、自分を苦しませるようなものや、他の人の苦しみに関わりそうな可能性のあるす

⁸ ローマの信徒への手紙 8,35-39

⁹ L. Giussani, *Si può (veramente?) vivere così?*, op. cit., pp. 363-364 参照 逐語訳

¹⁰ Francesco, *Il Cielo sulla Terra*, LEV, Città del Vaticano 2020, p. 272 逐語訳

¹¹ L. Giussani, «Intervento conclusivo», in J. Carrón, *Il destino dell'uomo*, Cooperativa Editoriale Nuovo Mondo, Milano 2004, p. 48 逐語訳

¹² L. Giussani, *Tutta la terra desidera il Tuo volto*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2015, p. 56 逐語訳

¹³ ベネディクト 16 世、回勅 *希望による救い* 36

べてのものから逃避する傾向がますます増えてきています。にもかかわらず、苦しみを分かち合うことなくして、他の人との真の関係は築けないことを目の当たりにします。自分を棄てなければ、愛情関係は築けません。これがもたらす苦しみを受け入れることなくして、善良、真実、正義を主張することはできず(真実や正義よりも自分の幸福を守ることが重要になると、強者の力、威嚇、嘘が支配するようになります)。個人的な痛みについても同様で、どんなに避けようとしても、最終的に避けられません。避けることは人生そのものを避けるようなものです。本当に深刻な試練に追い込まれたとき、わたしたちの小さな希望や大きな希望、楽観的な考えや計画だけでは立ち向かうことができないことに気づかされます。わたしたちのドラマを包み込む(受け入れる)ことができる確かな「存在」、《真に偉大な希望に基づく確信》¹⁴が必要になります。

教皇フランシスコが 回勅 *信仰の光 Lumen fidei* で《苦しむ人に対して、神はすべてを説明する理由を与えてくれません。しかし、神はともにいて同伴するというかたちでこたえてくださいます。いつくしみの歴史というかたちでこたえてくださいます。この歴史が、あらゆる苦しみの歴史を結び合わせ、光の道を開いてくれるのです。キリストにおいて、神ご自身がこの道をわたしたちと共有し、わたしたちが光を見るためにご自身のまなざしを与えてくださったのです。キリストは、苦しみを耐え抜いた上で、“信仰の創始者また完成者”です(ヘブライ 12,2)。痛みは、わたしたちに次のことを思い起こさせてくれます。信仰による共通善への奉仕は、常に希望への奉仕です》¹⁵とされているように。

わたしたちが本質的に必要としているのは、信仰から生まれるこの真の偉大な希望の証人を見ることです。つまり、その人生によって、キリストと、その「存在」と一緒なら、人は孤独、意味の欠如、放置され暗闇に沈むことなく、苦しみを生き抜くことができることを示す人々を見ることなのです。ベネディクト 16 世は、キリストの死と復活によって、《このかたは、人間のあらゆる痛みの中に入ってこられ、わたしたちとともに痛みを味わい、わたしたちとともに耐え忍びます。だからあらゆる痛みは「慰め (*con-solatio*)」で満たされます。「慰め」とは、ともに苦しんでくださる神の愛の慰めです。こうして希望の星が上ります》¹⁶と書かれています。その証拠に、証人は《他の人がその中に置かれた痛みを共有するからこそ、(そこに他者の存在があるからこそ、)この痛みを愛の光が差し込む》¹⁷ことを示します。人の愛を通る神の愛によって共有されない痛み、不足することのない「存在」に包み込まれない痛みは、出口のない、耐え難いものになります。

《2019 年 11 月に、わたしは非常に進行が速い上にすでに進んだ状態のがんと診断されました。最初は、ショックで、わたしも家族も打ちのめされました。まったくコントロールできない出来事に翻弄されているような感覚がありました。すべてが変わり始めたのは、友人がわたしに会いに来て、翻弄されていると感じるのではなく、まさにその状態でキリストに抱きしめられているのだと言ってくれたからです。その時から主の腕の中に身を任せ、わたしは「他者」の計画に信頼し始めました。長年にわたって聞き、読み、繰り返してきたことが、突然、肉となって現れたのです。自分の信仰が問われ、“理論から実践へ”移行することを求められていました。わたしは示された仮説、つまりキリストはわたしを見捨てたのではなく、どのような状況にもわたしと共にいるという仮説を確認することを受け入れました。恵みの実りはすぐに得られました。夫や子供たちとの関係が変わり、もっとも近いキリストの道連れとして彼ら

¹⁴ 同上、 39

¹⁵ 教皇フランシスコ、回勅 *信仰の光* 57

¹⁶ ベネディクト 16 世、回勅 *希望による救い* 39

¹⁷ 同上、 38

を見始めたのです。恐れを抱かせ、わたしたちの弱さをすべてさらけ出す痛み、身体的な痛み、激痛も障害になることはありませんでした。わたしはこの状況を愛するようになり、朝起きると、親からの待望のプレゼントを待つ子供のような熱意を持って一日を迎えることができるようになりました。旧友や新しい友人との関係が大切になり、また、新しくなりました。退屈になっていた友情も、人生の道連れとしての性質が明らかになり、ごくありふれたことにも重要なことにも同じ熱意でかかわることができるようになりました。長期入院した病院では、医師、看護師、同室の人たちとの間に新しい関係や出会いが生まれました。語り尽くせないほどたくさんの出会いがありました。その中でも、特に印象に残っているのは、2回目の手術に臨むことになったとき、前向きな性格のわたしでさえ、本当に怖くて、この手術に臨む気にはなれませんでした。手術の前夜は、闘病中に知り合った友人に付き添ってもらいました。彼との会話の終わりに“たゆまず熱心に現実を生きる”というのは、今の自分にとってどういう意味を持つのかと聞かれ、それまでの経験を胸に、わたしはとっさに、その時のことも含めてすべてに満足するということだけど、そのためには、現実と自分の人生・いのちの中にキリストの存在を認め続けることによってすべての原点に立ち返ることが必要だと答えました。すると、手術前の最後の思いとして、また手術後、目覚めたときにこのことを思い出すようにと彼にアドバイスされました。この手術でわたしは茫然自失となり、医師からはすぐに10日間はベッドで動いてはならないと言われました。麻酔と痛みで現実の認識が混乱し、動けない自分がどうやってたゆまず熱心にこの状況を生きることができののだろうかと思いました。頭を動かすことしかできなかったわたしにとって、キリストに出会うとはどういうことなのか。その瞬間に混乱はしていたけれど、頭を動かして現実はそこにあると気づき、周りを見始めました。部屋の壁が目前に見え、そして何よりも、この部屋にはもう一人の人が入院していて、ベッドのサイドテーブルの向こうにその人の足だけが見えたのです。その新しいルームメイトは、わたしと同じ名前で、わたしと同じ種類のがんを患っていました。わたしたちはお互いの人生について話し始め、一緒に過ごした1か月もの長い間に、彼女がわたしにしてくれたように、わたしも彼女にすべてを話しました。入院していることを利用して、聖体拝領を毎日したいと願いました。最初彼女は興味津々で、いろいろと質問してきました。ある朝、彼女は聖体拝領をしたいと願い出ました。その日から、わたしたちは一緒に祈るようになり、わたしたちが“小さな修道士”と呼んでいた病院のチャプレンとも一緒に祈るようになりました。日が経つにつれて、わたしたちの部屋は、「人生に必要なものは何か」と問いかける場所になっていきました。このわたしたちの関係は、医師、看護師、ソーシャルワーカー、清掃員、親戚、友人など、部屋に来るすべての人を巻き込むほどのものになりました。わたしの夫や友人も、わたしだけでなく彼女にも会いに来るようになりました。わたしたちの部屋は誰でも受け入れる場所になっていました。部屋はみんなを魅了して壁を“拡張”しました。入院中、夫に「あしあと」を持ってきてもらい、友人のために1冊余分に持ってきてもらいました。彼女は興味深そうに読んで、特に手紙を読んでいて、ヴァン・トゥアン大司教のことを話して止みませんでした。彼がローマに埋葬されていることを知り、訪ねたいと言っていました。ある日、CTスキャンの報告書を読んで、彼女は自分の病状の重さを理解しました。彼女だけでなく、何よりも自分自身に対して、“わたしは何に希望をかけているの？回復に？それとも、死や痛みも、すべては本当に善のためであるという確信と、わたしを毎瞬間大切に思い、忘却の彼方に薄れてしまうのではなく永遠のためにわたしを創ってくれた方がいるという確信の中に希望をかけているの？”という問いが生じました。さて、わたしが彼女にもたやすことができる希望は、目を閉じたいと望む人たちの楽観主義とはまったく異なるものです。数日の違いで退院したわたしたちは違う町に住んでいたにも

かかわらず、その後も、関係は続きました。最初はうまくいっているように見えたのですが、数週間後、わたしは彼女がどんどん悪くなっていることに気づきました。彼女はわたしに、病気がどんどん進行して体力が落ちて疲れを感じ、医者もさじを投げた状態だと書いてきました。わたしは悲しみに耐えながら、奇跡が起きるのを祈り続けると伝えました。何かしたいと思いつつも、自分の無力さを感じていました。わたしはそのような考えにとらわれて、彼女がわたしに書いた「主の腕の中に身を委ねたい」という唯一理性的な内容に気付きませんでした。それを指摘したのは夫で、“見てごらん、彼女は安らかだよ！”と付け加えました。わたしは彼女を訪ねることにしました。夫と友人が同行してくれました。彼女は本当に苦しんでいて、何よりも聖体拝領を望んでいることを告白しました。彼女の家を出た後、近くの教会を探したところ、神父さんが次の日に告解と、聖体、そして病者の塗油のために彼女の所に行ってくれることになりました。2日後、彼女は亡くなりました。その数日後、わたしは彼女の連れ合いに、彼女に会えたことを感謝し、彼女が“神の恵みの中で”平穏に亡くなったことを確信していると書きました。彼は、最期の瞬間は意識がなかったけれど、死ぬ前に目を開けて微笑み、安らかに眠ったと答えました。起こったことは驚くべきことです。現実にとらわれようとした小さな意思によって、このようなことが起こったとは信じられません！キリストは、病院のベッドで首を回すことしかできないという、一見すると敵対するような状況の中でもその存在を表したのです。》

c) 悪

よく見られる態度は、自分の失敗に捕らわれてしまい、過ちのために落ち込み、自分の力が及ばなかったことを嘆くか、際限なく自分を正当化し、他人や状況に責任を負わせることです。絶望と思い上がりの間で揺れ動き、後者が前者を妨害しこれに取って代わります。そして、大きな失敗をするたびに、また最初から同じことが繰り返されるのです。自分の後悔にとらわれるのは、なんと簡単なことでしょうか！《わたしは働かなかった。[…]わたしは嘘をついた。[…]わたしは盗んだ。[…]わたしは殺した。[…]わたしは恥ずかしい》と、自分が犯した悪を恥じる気持ちに押しつぶされながら生きていたミロスのミゲル・マニャーラのように。しかし、毎日のように同じ間違いや同じつまづきを繰り返しているのを目の当たりにしたとき、絶望しないことができるでしょうか。誰かが来て、わたしたちをこの状態から引き離し、悪の支配から、自分自身に投影する尺度から解放してくれることが必要です。ミゲル・マニャーラのもとに助けにやってきた修道院長が《子よ、君はもう存在しない（そして存在したことの無い）ものについて考えすぎることが問題なのだ》と言い、《君は自分の苦悩について考えすぎている。なぜ苦悩を求めるのか。なぜ君を見つけてくれたものを失うことを恐れるのか。償いは苦悩ではない。償いは愛だよ》と付け加えたように。このことによって、ミゲル・マニャーラは自分を見つけてくれた主に《はい》と、《わたしはマニャーラ。わたしの愛する方が「それらのことはなかった。もし盗んだり、殺したりしたのなら、それらのことはなかった！」と告げられました。主のみが存在します》¹⁸と言います。

キリストの赦しの無限の力によって、悪は無に帰するのです。ミロスがそのドラマの主人公の口を借りて言わせる《はい》は、イエスに対するシモンの《はい》、《赦しに満ちている意識から“シモン、わたしを愛しているか”と問わせるのである。[…] 聖ペトロの“はい”は、この赦しの上に成り立っている》¹⁹の

¹⁸ O.V. Milosz, *Miguel Mañara, Mefiboseth, Saulo di Tarso*, Jaca Book, Milano 2010, pp. 47-49, 52, 63 逐語訳

¹⁹ L. Giussani, *Attraverso la compagnia dei credenti*, op. cit., pp. 155-156 逐語訳

こだまなのです。したがって、わたしたちが自分自身について現実的に知っているあらゆること、わたしたちが悪と誤りを犯し得る自覚を持って、希望することができ、再びやり直すことができるのは、肉となった「神秘」、今ここに存在するキリストがわたしたちと築いた関係が、赦しによって支配されているからです。その関係は赦しです。この赦しを頼りに、わたしたちは一日に何度でもやり直すことができます。赦しによってのみ、わたしたちの人生は生まれ変わり、進むことができます。

聖ヨハネはその第一の手紙で《御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます》²⁰と述べています。そしてジュッサーニは《わたしたちの希望はキリストにあり、キリストの現存にあり、あらゆる伝統によってわたしたちに伝えられたキリストは、どんなに気が散り、忘れがちであっても、もはやわたしたちの心の土壌から、少なくとも、最後のかけらまでは取り除くことはできないのである。自分の過ちや美德を数える以前に、わたしの希望は「彼」にあるのだ。数字は関係ない。「彼」との関係において、数は何の関係もなく、測られた重さも、測定可能な重さも何の関係もなく、将来わたしが犯すかもしれないあらゆる悪の可能性、これも何の関係もなく、わたしが繰り返すシモンの“はい”がキリストの目にとって第一であることを侵害することはできないのである。すると、胸から湧き上がる息のように、わたしたちの奥底から完全に酔わせ、行動させ、より公正な方法で行動することを望ませる流出が起こる。つまり、心の底から正義の望み、本物で真の愛の望み、無償で行動する望みの花が湧き上がるのである》²¹と目をみはる一節で解説しています。

d) 将来に対する不安

自分の人生が変わるような歩みをしてきた人は、自分でも驚くほど未来への確信を持ちます。明日に不安や恐れを抱くことはなくなるのです。

《この想定外の歴史的な出来事に圧倒されて、半正常の状態に満足したり、泣き言を言ったりかんしゃくを起こしたりしてしまうことがよくあります。けれども、わたしの心の底には、どんなに疲労の多い日々でも消えない、不思議なポジティブさが残っていることに気づかされるのです。数日前、わたしが図書館で夢中になって勉強していると、ルームメイトである後輩がわたしを探し出し、“あなたの意見では、わたしは幸せになれると思う？”と訊ねてきたので、わたしは迷わず、笑顔で、なれると断言しました。けれども、その人が幸せになることを100%保証させるものは何か。なぜ、希望があると確信できるのかと自問しました。そして、自分の歴史こそがそれについて語っているのだと気付いたのです。キリストに従うことでわたしの人生は変わりましたが、それはわたしが自己満足しているからでも、自分の葛藤や疑問が解決されたからでもありません。むしろわたしは簡単に気が散るタイプで、自分の上手く行かなかった計画を思い、ぼんやりしてしまうことがよくあります。キリストに従うことで人生が変わったと言えるのは、何年も何年も試行錯誤を繰り返し、挫折し、疲労に身を任せ、多かれ少なかれ責任を持ってやり直しているうちに、すべては自分のためなのだという意識が自分の中に芽生えてきたからです。自分の考えや計画を手放すことができるのは、常にキリストによって満たされていることを経験するためです。当てもなくさまよい歩いた後、自分の家に戻ってきたかのように、やすらぎを感じ始めるのですぐに気がつくのです》と、ある大学生が書いてきました。

²⁰ ヨハネの手紙一 3,3

²¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 102 逐語訳

キリストに従うと人生が変わる。これは、その場限りの単なる言葉ではなく、体験を描いています。この大学生が言っているように、思考や計画から人を解放するのは、《常にキリストによって満たされる》ことです。《やすらぎを感じ始める》と、自分の中に起こることから、すぐに気がつくことができるのです。現在において経験する変化が、彼女のうちに未来への確信、つまり希望を生み出し、幸せになれるかと訊ねる年下の友人に、はっきりと《なれる》と答えさせたのです。確信を持って未来を見つめることを可能にする現在における確信がなければ、あのような質問に即座に《なれる》と答える大胆さは彼女にはなかったでしょう。《なれる》という答えを支えるエネルギーはないはずですが、それは属する人々の中に《不思議なポジティブさ》を生み出す場において可能になるのです。今存在する現実を基に、未来を賭けるようになるのです。

またキリストの現存は、平和の唯一の源です。死、苦しみ、悪、未来などの、わたしたちのあらゆる不安に応えることのできる存在のみが、わたしたちの注意を自分自身から「彼」へ向けさせ、そして他の人々へと焦点を移すことを可能にし、わたしたちの人生に平和をもたらすことができます。存在がなければわたしたちの中には欺かない希望は根付きません。キリストよ、あなたはわたしたちにとって一体何者ですか。わたしたちの希望の確信です。

2. 人々の希望を支える

先ほど、キリストとの出会いが生み出す違いが、希望を伝達する要因であると言いました。そのため、ジュッサーニは《世界に希望が広がるよう、わたしたちは毎日変化を望まなければならない》と強調しています。その変化は、わたしたち自身、わたしたちの日常生活を第一の対象とし、《他の人々の必要、他の人々の必要に与え得る助けをその無限の展望としている》²²のです。神の目的は、すべての人に達することです。しかし、そのために、「彼」はある人を通してすべての人に達するという、特別な方法を用います。これは「神秘」が、いつの時代の人々にも自らを伝えるために選んだ方法なのです。前に触れたテストーリ氏との対話の中で、ジュッサーニは《もし主が自分の業を守りたいなら、人々を新しくしなければなりません。主はそのような人々や仲間を起こし、わたしたちが話したような運動を生じさせなければならない時が来ているようにわたしには思えます。その時が来たのです。まるで時のしるしのようなのです。ですから、逆説的ですが、危機が底をつく瞬間こそ、希望の最大の瞬間となるのです》²³と述べています。

キリストは、「彼」に出会い、従う人々の人生・いのちにもたらす人間的な変化を通して、自身を世界に伝えます。「彼」の出来事によって生み出されることを許す人々には、他の人々に対する想像もできないような感受性が芽生え、その人々がどのような状況に置かれていても、その運命に対する情熱が、彼らの人間としての歩みに具体的に協力する願望が芽生えます。ベネディクト 16 世は、《イエス・キリストとの交わりは、わたしたちを「すべての人のための存在」であるかたへと引き寄せます。そしてこれがわたしたちのあり方となります。イエス・キリストはわたしたちが他の人のために生きるよう命じます。けれども、本当の意味で他の人のために存在すること、すべての人のために存在することは、イエスとの交わりを通して初めて可能になります。[...]『キリストはすべての者のために死にたもうた。それは生きる

²² L. Giussani, «Cristo, la speranza», *CL Litterae Communionis*, op. cit., pp. 17-18 逐語訳

²³ L. Giussani - G. Testori, *Il senso della nascita*, op. cit., p. 154 逐語訳

人々がもはや自分のために生きることなく、自分たちのために死んでくださったかたのために生きるためである』(二コリント 5・15 参照) キリストはすべての人のために死んでくださいました。キリストのために生きることは、「他の人のための存在」であるキリストへと引き寄せてもらうことにほかなりません》²⁴と述べられています。

キリストとの交わりを生き、「彼」を体験できる人間の場を通して「彼」に属することによって生じる《すべての人のため》の存在であることは、具体的なニーズの多様性(仕事に関わるもの)や個人の状況(放置、孤独、苦しみ)に応じて様々な方法で表現され、社会を内側から変えていきます。

ここでも、再び神の方法が明らかにされます。ベネディクト 16 世は、《キリスト教は、スパルタクス(前七一年没)が主張したような社会変革のメッセージではありません。スパルタクスの戦いは、多くの流血をもたらした後、失敗に終わりました。イエスはスパルタクスではありませんでした。イエスがバラバやバルコクバ(一三五年没)のように政治的解放のために戦うことはありませんでした。イエスが十字架上で死ぬことによってもたらしたのは、まったく別のことでした。それは、すべての主人の主であるかたとの出会いです。生きていた神との出会いです。それゆえ、奴隷の苦しみよりも力強い、希望との出会いです。だからこの希望は人生と世界を内側から造り変えました》²⁵と書かれています。

その意味で、聖パウロのフィレモンへの手紙は代表的です。その状況は、わたしたちにもよく知られています。パウロは獄中から、自分がキリスト教に導いたコロサイのフィレモンに手紙を書き、ローマに逃げそこでパウロに会って回心し、彼に仕えるようになった奴隷のオネシモを引き取ってくれるように頼みます。ローマの奴隷法に従い、パウロはオネシモを本来の主人であるフィレモンのもとに手紙を託して送り返します。²⁶パウロは、キリストの出来事がもたらす新しさに働きかけます。法律上ではこの二人は主人と奴隷の関係でしたが、キリストの虜になった者同士として、二人は一つになったのです。エフェソの信徒への手紙に《あなたがたは互いの一部であることを知らないのですか》²⁷とあるように。

パウロの行為は、奴隷制度という深刻な問題に比べれば、たいしたことではないと思われませんが、この行為によって、《外的な社会構造は変わらなくても、このことは社会を内側から変えました》²⁸という歴史に影響を与える大きな変革が始まったのです。それは、わたしたちにとっては時間がかかり過ぎる方法だと感じられるかもしれないので、時には、誰かが人々の自由を飛び越え、一気に上から物事が変わればと望むかもしれません。しかし、神の方法は、人間の自由を尊重し、それに訴え、根本的な変化をもたらすことができる唯一のものなのです。《外部から人間を救うことはできないのです》²⁹と、ベネディクト 16 世は言われます。アドリアン・カンディアードは『フィレモンへの手紙』に捧げられた著書の中で、パウロの態度は完全に自由を中心に置くものだと言っています。³⁰

現在の状況は、今も多くの場合わたしたちを頓挫させる否定しがたい厳しいものですが、逆に、わたし

²⁴ ベネディクト 16 世、回勅 希望による救い 28

²⁵ 同上、4

²⁶ フィレモン 1,10-17

²⁷ ローマ 12,5、エフェソ 4,25 参照

²⁸ ベネディクト 16 世、回勅 希望による救い 4

²⁹ 同上、21

³⁰ カンディアードは、ドストエフスキーの小説に登場する取調官とイエスの対話を思い起こさせる。《取調官は、イエスはすべてを間違えたと考えた。「彼」は、自分の自由と闘う人間の耐え難い責め苦しさをなだめる手段を持っていた。神である「彼」は、あれこれ命令し、強制し、プログラミングし、人間を自分自身から救うことができたはずだ。[...]イエスはこれらのことを何一つしなかった。取調官は“人間の自由を手に入れるのではなく逆に、「あなた」は人間の自由を増大させ、人間の自由な愛を求め、人間が自由に「あなた」に従い、魅了され、「あなた」に服従することを望んだ”と非難している》A. Candiard, *Sulla soglia della coscienza. La libertà del cristiano secondo Paolo*, EMI, Verona 2020, pp. 118-119 逐語訳

たちが生きていくために必要なもの、希望を支えるものを見出しやすくしています。《人生は、歴史の海を旅するようなものです。歴史の海はしばしば暗く、荒れています。この海を旅するわたしたちは、海路を示してくれる星を探し求めます。人生のまことの星は、正しく生きることのできた人々です。この人々は希望の光です。イエス・キリストが光の中の光、すなわち太陽であることはいうまでもありません。この太陽は何よりも歴史の暗闇の上に昇ります。けれども、キリストに達するために、わたしたちに近い光も必要です。すなわち、キリストの光によって輝き、わたしたちの道を導いてくれる人々が必要です。》³¹ ジュッサーニはこの点について、先ほど指摘したように、存在である人々について語っています。それは、特別な才能を持つ人を指すのではなく、キリストという事実にとらえられ、キリスト信者の仲間になることによって《存在》となった人を指すということに気をつけましょう。そのことは、ある若いお母さんが書いてくれた手紙によく表れています。

《今年出会った幼稚園の一人のお母さんについて話をしたいと思います。登園し始めてすぐ、5歳の息子が、新しく入って来た男の子がとても神経質で自分を何回も叩いたと話しました。その子が誰なのかと思って調べてみると、隔離期間が始まる直前に夫を亡くした母親の子であることがわかりました。慣れないところに来たばかりのこの母親は孤独だろうと思って彼女を探そうと思いました。そこで、ある日、駐車場で新しい顔ぶれを見て、息子のクラスに新しく入ってきた子のお母さんですか。と聞いたところそうだったので、その翌日一緒にランチをしようと誘い、彼女に知り合いができた方が良いと思い、他の2家族も誘いました。食事の席で彼女は、35歳だった最愛の夫を癌で亡くしたこと、4歳の息子と二人で暮らしていることなどを少し話してくれました。現在、遠方ではあるけれど、父の病気に立ち向かっているわたしにとって助けになると思い、すぐに彼女に寄り添いたいという気持ちになりました。わたしたちの間にはすぐに親しみが生まれ、わたしの誘いに感謝した彼女は、数日後、自宅に招いてくれました。わたしは有りのままの自分で彼女と関わりました。無神論者ではあってもわたしの生き方を否定しない彼女を前に、何か自分のたりなさを感じながら、彼女とコーヒーを飲みに行く度にお告げの祈りを通してその時間を委ねました。そして彼女が生きている苦しい状況について話してくれるよう願いました。ある朝、彼女から電話がかかってきました。夜中に強いパニック発作に襲われたので、医療センターに行き、そこから出たばかりだということでした。朝食を摂っている最中に、体調が悪くなったとき、まずわたしに電話しようと思ったことに驚いていると話してくれました。彼女は感動していて、わたしといると、なぜいつも最後には泣いてしまい、自分自身になれるのかわからないと言いました。その会話の中で、自分は子供はいらないと思っていたのに、夫が病気で倒れ、小さな子供と二人で暮らすことになり、一人残されたことに腹を立てていると打ち明けてくれたのです。わたしは彼女に、別の形であっても、ご主人は存在し続け、彼女に寄り添っていると確信していることと、彼女が生きていることに感謝し、もう一度日常の生活の中で何かを期待するようになることを望むと伝えました。わたしは彼女に、“あなたは朝起きたとき、今日も生きていて、息ができることに感謝する？あなたを待っている美しいものがあると思える？”と問いかけると、彼女は、そんなことは思ったこともないし、わたしが言っているようなこと（わたしにとってはとても素朴なことに思えたのですが）は誰からも聞いたことがないと言いました。次の週、わたしたちは再び会っておしゃべりをしました。彼女は家族全員にわたしのことを話したこと、わたしに出会えたことに感謝していること、わたしが彼女を家に招いたことに驚いていること、そしてカウンセラーにまでわたしのことを話したと言ってわたしを驚かせました。彼女は、“生きていることに

³¹ ベネディクト 16 世、回勅 希望による救い 49

感謝しているかと聞いたことを覚えている？先日、セラピーに行ったとき、このことに取り組みたいと頼んだの。もう夫のことや痛みについて時間を費やしたくないって。そして、この数ヶ月で一番興味深いことは、新しい友人から聞いた感謝と人生についての話だったとも。あなたがわたしに言ったように、わたしはこれからも自分の日常の中で何かを期待したいから、それに取り組みたいと繰り返したの。”と言いました。わたしは言葉を失い、わたしの中に生きている歴史と「存在」から再び恵みを受け、それにとられ、圧倒されたように感じました。》

これは、誰にでもある状況、普通の暮らしの中で、存在である人の例です。一人の母親が自分の人生にもたらされた希望をもって、苦しみ、痛みと怒りに閉ざされた別の母親と出会い、その希望を伝播させたのです。《わたしたちが共に（人は他の人々から離れることはできない）生き、成し遂げるよう呼ばれているのはなんと素晴らしいことだろう！》歩み始めた道を進みながらさらに見出すのは《毎日同じことを願い求めること、一日に何度も願い求めることは、あるメンタリティーを、人格を育み、継続的な準備をさせてくれる。それゆえ、どんなことも違和感を覚える思いがけないことではないのである。たとえ仲間一人の死であっても。いたみは感じるものの恐れではない。一人の女性の子どもとなった神でさえ、いたみを経験したので、それを取り除くことはできないが、すべての恐れを根源から取り除く希望がこの世に広まるよう互いに助け合おうではないか》³²とジュッサーニは言っていました。

限界と弱さの重荷を背負ったわたしたちが、キリストの出来事に触れ、それに抱きしめられることを受け入れることによってのみ日常の中で存在になり得るのです。

《数年前から、様々な理由で深刻な経済問題が発生し、フラテルニタにも一時的に支援してもらいました。このような困難にもかかわらず、わたしは長くて高価な治療を受けざるを得ませんでした。先週、支払いを先送りにするために数ヶ月間予約を延期していたわたしは、これ以上延期することができなかったため、最後の治療に行き、請求書の作成をお願いしました。わたしは治療中に、わたしの担当医が教会から離れていることを理解していたので、自分が生きていることを証しするために何かを言ったり、やったりする努力はしなかったことを認めます。彼は最後の処置が終わると請求書を持ってわたしの隣に座って“奥さん、これから話すことを受け入れてほしいと思います。わたしたちは大丈夫なので、あなたからのお金はいりません”と言いました。わたしは理解できずに彼を見つめました。彼は“この2年間であなたが与えてくれたものは、お金よりもずっと価値があるのです”と続けました。わたしにはまだ理解できませんでした。医師はさらに“毎日、あらゆることについて愚痴を言う人々の話を聞きながら仕事をするのがどれだけ疲れるか想像できないでしょう。いつも不満を持っている人に会うのです。あなたはそのポジティブさ、笑顔、病気の娘さんのことを話すときの表情で、わたしをよりよく生きられるように、家族や自分の人生を別のまなざしで見ると助けてくれました。感謝でいっぱいです。あなたは、人生は美しいものだということをわたしに証してくれました。何か借りがあるのはわたしであって、あなたではないのです”と続けました。わたしは涙を流しながら帰りました。とんでもない！わたしはあの医師が描いたような人間ではないからです。彼はわたしを見たのではなく、わたしを通して彼を見ていたイエスを見たのだと確信しています。言葉にできないほどの幸せで胸がいっぱいになり、家に飛んで帰って奇跡が起きたと夫に伝えました。けれども、奇跡は、何千ユーロもの借金を帳消しにしてもらったことではなく、自分の変化、自分の回心という、自分は気にしてもいなかったことで主がわたしを驚かせてくれたことです。主はわたしのうちにおられる。わたしのうちにさえも、こんなに迷惑をかけるわたし

³² L. Giussani, «Cristo, la speranza», *CL Litterae Communionis*, op. cit., p. 18 逐語訳

の人生を通してでも、ほんのわずかであるかもしれないけれど、本当に主を知ってもらうために貢献できるのです。わたしの数々の問題や不誠実さ、惨めさやまったくの無力さの中で、あらゆるものに主を探し求め、できる限り主に祈り求めること以外に何もしないのに、主がそこにいて働いておられるのを見ることによって、他のどのような善よりも貴重な善があることをわたしに理解させたのです。そして主が運動を通してこの善をわたしに与えていることを理解しました。それは主が真にわたしを変えてくださっているという確信です。この確信によってわたしは経験したことのない希望と穏やかさに満たされました。今は一日中、“あなたの恵みは命よりもまさる”と声を大にして言えます。なぜなら、これ以上の喜びは他の何からも得たことがないからです。フリアン神父、あなたに、フラテルニタ（兄弟会）に、そしてわたしが出会ったすべての歴史に感謝します。なぜなら、主を見るためにどこを見ればいいのかを常に示してくれるあなた方がいなければ、わたしの中で起きている奇跡に気づくことはなかったでしょう。》

《わたしたちは、キリストが自分をこの世に伝えるための道具なのである。すなわち、人間のもっとも偉大な原動力が根を張り、養われ、その源を持つのは、平常の日常生活の中である。人が他の人々に自分を伝え、犠牲を払い、他の人のために神聖なものとなり、他の人にその運命の存在を示し思い出させる原動力は、日常生活の中にある》とジュッサーニは言います。《主の「存在」の意識と仲間との交わりとが働く平常の中で、感動と感激を覚える平常の日常生活の中で》わたしたちはキリストを伝える道具とされます。《それは美であるから感動であり、それは真実の美、運命の確信であり、動かすから、すべてを動かす感激になる》と続けます。人生は情熱になります。《存在への情熱》、《真実、美、正義、愛、幸せへの》情熱です。存在に対して想像を絶する情熱が開花します。《これが、キリストに従う人が世にもたらすまなざしと愛情の本質的な特徴である確実性である、[…] 限りなく肯定的であり、すべてになだれ込む波のような積極性である。》³³

1961年のフォンバルタザールの著書に再読に値する一節があります。時代は変わりましたが、現代的意義はむしろ増したかもしれません。《キリストのからだは、「ある」と同時に「なる」のである。よって、パウロはそれを人間のからだにたとえている。つまり、外からもたらされた物質において自らのエネルギーを試し、発揮しながら、完全な背丈に向かって成長するのである。教会の基礎とその構造は成長できないが、もっぱら信徒によって形成される生活の領域は成長できる。役職に就いている人は（メンバーとして、皆と同じように成長しなければならない）成長の管理人であり、庭師である。成長させ、花を咲かせること、キリストの教義が真実であることを世界に納得させることは信徒にだけできることである。》³⁴

³³ L. Giussani, *Un evento reale nella vita dell'uomo (1990-1991)*, op. cit., pp. 105, 107 逐語訳

³⁴ H.U. von Balthasar, «Il laico e la Chiesa» in Id., *Sponsa Verbi*, Jaca Book, Milano 2015, p. 303 逐語訳

質疑応答*

《現実には苦しみがありいたみがあり、闇があり悲しみがあり、何か傷つけられているように感じるようなことがあるのです。こうした側面をも否定することなく生きていくにはどうすればいいのでしょうか。それらの側面をも熱心に生きるとはどういうことですか。そして、すべてを熱心に生きることがどのようにして常に現在における確信への道となり得るのでしょうか。》

皆さんは苦しみ、いたみ、闇、悲しみ、こうした人生のすべての側面、つまり生きることのドラマを本当に否定することができるのだろうか、わたしは自問します。わたしにはできません。わたしが望むと望まざるとにかかわらず、最終的にはわたしに課せられます。最終的には、誰もが避けることのできないこれらの人生の側面と、どのように向き合うかが問われるのです。多くの場合それらの側面は、質問の中に暗に含まれているように自身の歩みの妨げとなるような捉え方をされます。その場合、それらを考慮せず、否定するのがもっとも理性的だと思えるのです。しかし、別の可能性があります。ある種のデータは最終的に消すことができず、障害、詐欺、自分を測る尺度（わたしにはそれらを取り払うことができなかった）として認識していたある事実が、“歩みの伴侶”となった時に、わたしの人生における決定的な瞬間となりました。つまり、自分自身の奥底、現実の奥底、そして自分が出会ったもの、キリストの奥底へと向かう機会となった時に。それは根本的な発見でした。それ以来、わたしは自分自身の経験から、《たゆまず熱心に現実を生きる》ことがなぜ重要なのかを理解し始めました。なぜなら、そうすることによってのみ、物事の深みに入り、人生の中心にあるものを経験することができるようになるからです。

多くの場合、わたしたちは錯乱した恐怖心のため物事の外見に留まってしまいます。リスクを恐れ、理性の要求を恐れ、《造られた》ものとしての自分自身を恐れ、すべてを“ふさごう”とするのです。しかし、こうした態度はわたしたちを弱体化し、ますます萎縮させ、状況に立ち向かえなくしていきます。わたしはそうなりたくはありません！存在は無に勝るということを確信するために、熱心に生きたいのです。ダモクレスの剣（一見した幸せの中で常に危険に脅かされている状態、訳者注）が頭上にあり、無の影に脅かされながら、存在しているのが申し訳ないかのような人生を送ることはできません。そんな生き方をしたい人はどうぞご自由に、わたしには無理です。もうそのような生き方はできません！ですから、障害だと思っていたすべてのものが関りのチャンスとなり、自分自身を懸けて、自分が出会ったものの真相を知る機会となった時が、わたしの人生の決定的な瞬間だったと言ったのです。最初の成果は、現実を新しく発見したことです。だから今、わたしは現実と向き合い続けたいのです。パンデミック発生当初、現実と向き合うことを避けるために、あれこれと隠れ家を探さないように訴えたのはそのためです。この勧めを受け入れた人たちは、自分たちが何を得たかわかるでしょう。しかし、従わなかった人も、自分がより自分らしくなったのか、あるいはより疑い深くなったのか、何を得たかを確認することができたはずで、人生は誰にも息つく暇を与えません。

* 本書はCLの兄弟会の黙想会の内容であるが、その最終日（2021年4月16-18日開催）には質疑応答がリモートで行われ、世界中の参加者から寄せられた2千以上の質問等をダヴィデ・プロスペリがまとめ、わたしが答えた。

わたしはジュッサーニが現実をありのままの姿で見ることを証し、伝えてくれたことに永久に感謝します。わたしの血の中に入り込みました。彼と出会って、彼がどのように見ているかに注意を払いながら、それまで直視できなかったものを見つめ始めることができたのです。運動に参加し始めた頃、イタリア語はよくわかりませんでした。彼のその日一日への向き合い方、話し方、人との関わり方に心を打たれずにはられません。たとえすべてを理解できなくても、その衝撃によって家に帰った時は新しいまなざしに覆われていました。それは自分で自分に与えることのできないまなざしでした。何事にも、まったく物怖じしない人に出会い、わたしはもはや物事に脅かされ、目の前の状況を見ないために肘を目の前に持つてくるのはやめたいと思うようになりました。わたしは、それまで恐怖に満ち、あいまいな見方で障害だと認識していた状況を、人生において確信を得るための道筋、道となる機会だと見なす人に出会ったのです。

これがわたしたち一人ひとりの課題です。この時世で自分が現実をどう見てきたか、各自確認したと思います。ごまかしはききません。引用された証言に見られるように、歩みの結果、確実な希望を得た人たちと、逆に恐怖や無に屈することになった人たちがいます。これは器用さや頭の良さには関係がありません。ただ一つのことの違いをもたらします。出会った出来事のゆえに従うことが理性的である仮説を真摯に受け止め、それを確認することです。それは知能指数の問題でもなければ、倫理的な一貫性の問題でもありません。無に押しつぶされないための自由と、自分自身の人間性に対する愛情の問題です。その結果、選択肢は、恐怖を身にまとうか、あるいは、すべてを、まったくすべてを、何も排除せずに、究極のポジティブさで生きることができるという確信（恵みによる実際の確信、自分の子どもから始まって誰の前でも証できる確信）を身にまとうかのどちらかです。わたしはどこかの隠れ家に避難するのではなく、自分の生きているものが真実なのかどうかを知りたいのです。

《シモーヌ・ヴェイユは、真の豊かさは求めるものではなく、待つものだと言っています。このこととリスクという問題との関連はどうなるのでしょうか？つまり、イエスとの関わりにおいて、イエスに場所を譲ることにおいて、自分の才能を捧げるよう呼ばれているのでしょうか。待つことは、わたしたちを本来織り成しているものだと言われましたね。わたしたちは待つものだと。けれども、このような強い緊張感をもって生きる時、待つことは、今を十分に生きることを妨げる危険性があるのではないのでしょうか。どんな時にリスクを冒すことは真実で有益で、どんな時に愚かなことなのでしょう。わたしたちを躊躇させるのは、リスクを冒すことによって、すべてを失うこと、つまり、心と一致すると直観したものに従うために、家、仕事、場所、友人関係を変えることへの恐れです。身を投じるかどうかを判断するにはどうすればいいのでしょうか。》

わたしはシモーヌ・ヴェイユの意見にまったく賛成です。わたしたちは真の豊かさを待つことしかできません。わたしたちは真の豊かさを探し求めますが、それが見つかるかどうかはわたしたちによるものではないのです。では、問題の本質は何なのでしょう。ジュッサーニは『宗教心』の第4章で《人生・いのちの最終的な意味の探求においては、優れた能力とか、特別な特別とか、何か特別な方法が必要というのではない。真実は、わたしたちが日常の生活の中で出会う美しいものと同じように、注意していなければ見逃してしまうのである。つまり、問題は注意なのである》¹と言っています。人間が望むものは、

¹ ルイジ・ジュッサーニ、宗教心、前出、p.65

自分の力で想像し、手に入れることができるものとはあまりにもかけ離れているため、適切な態度はただ待つこと、目を見開いて待つことなのです。真の豊かさは、愛する人を待つように、待つものです。美容院に行き、新しい服を買い、優しく振る舞うなど、思い当たることを試みることはできますが、それらは自分が待ち望んでいる存在をつくり出すことはできません。それは、まったく予期しない方法で、贈り物としてやって来るのです。待つしかないのです！

この質問にあるように、生きるための基本的な姿勢としての期待と、リスクはどう折り合いをつけるのでしょうか。期待（待つこと）は、自分たちの望みに答える何かに対するものです。愛する女性を待っている人は、目を360°見開いて、その人が現れるのを待つしかないのです。リスクはその人を見つけた時点で始まります。彼女を失いたくなければ、自分の才能、つまり自身の人間性というもっとも貴重なものを用いて、彼女と関わるリスクを冒さなければなりません。さもなければ彼女を失ってしまうのです。キリストとの関係でも同じことが起こります。ヨルダン川のほとりにいた洗礼者ヨハネのもとに出かけた日、ヨハネとアンデレは、自分たちの心がもっとも待ち望んでいたものが、ナザレのイエスという姿をしているとは想像もつかなかったのです。ヨハネとアンデレは「彼」に遭遇した後、自分たちより先に会った人々と同じように、「彼」のことを忘れることもできたはずですが。しかし、ヨハネとアンデレは、自分たちのすべてを賭けたのです！「彼」に従って冒したリスクは理性的だったのでしょうか。誰かに従うことは理性的なのでしょうか。わたしたちが誰に出会うかによります。視界に現れた人が自分にとって興味のない人であれば、危険を冒すことなど思いつくこともないでしょう。しかし、もしその人が自分の関心を引くのであれば、失いたくはないと考えるでしょう。その場合、「身動きを取らない」ことが問題になるのです！ある存在の魅力に直面したとき、もっとも明白で抑えられない行動は、リスクを冒して関わることです。

物事がどのように起こるかに注意を払わないと、すべてを覆し、まるで心理ゲームのように問題の解決に至らず、期待とリスクはどう折り合いをつけることができるのかというように自問してしまうのです。まずは現実を見つめることです。ジュッサーニは、『宗教心』の第一の前提で《その現実をありのままに、細心の注意を払って、余すところなく観察する》²ことを強調しています。ジュッサーニのような人に出会えたという恵みを無駄にすると、わたしたちの歩みはより困難になってしまいます。わたしには歩むために、あなた方が携えている道具以外のものはありません。自分だけのマニュアルはないのです。自分たちの経験を観察してみましましょう。心の期待に答えるものにやっと出会った時、それを失うのは愚かなことだから、リスクを冒すことはまったく好都合なことです。愚かなのは、リスクを冒すことではなく、もっとも関心のあるものを手放すことです。価値のないもののためにリスクを冒すことこそ、適切な理由がないので愚かなことです。

福音書は、この上ない単純さでわたしたちが述べたことを《天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う》³と表現しています。畑を買うためにすべてを危険にさらすことは常軌を逸しているでしょうか、それともいのちの問題でしょうか。

聖パウロは、《わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています》と、このことをはっきりと認識していました。彼は何に出会ったのでしょうか。《キリ

² ルイジ・ジュッサーニ、*宗教心*、前出、p.14

³ マタイ 13,44

ストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたに見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。》⁴聖パウロが出会ったキリストは、わたしたちが出会ったキリストと何ら変わりはありません。存在しているのはキリストただ一人です。生まれ、死に、蘇り、その神秘的な体である教会の中に今日も存在している具体的なキリストです。わたしが考え、想像し、解釈するキリストとは違います。「彼」のために、人がすべてを捨てることができるのは、「彼」がいなければ、他のすべては価値を失うからです。それによって《得るもの》に比べれば、他のすべては無に等しいのです。聖パウロはとりつかれた人だったのでしょうか。ヨハネとアンデレは、イエスに従うことで混乱に陥ったのでしょうか。それとも、誰よりも理性的に行動したのでしょうか。信仰は、理性に関わる問題なのです！

それぞれ自分が出会ったものがリスクを冒すほどの価値があるかどうかを判断するように求められています。その判断については経験によって確認することができるでしょう。そして、キリストがリスクを冒すに値しないとみなしたにもかかわらず、翌日、自分が得たものがパン屑に過ぎなかったと悟ったなら、いつでも戻って来ることができるし、キリストに従い、恵みによって、より望ましい、より劇的で喜びに満ちた人生を送っている人々を探し求めることができるのです。その人はいつでも歓迎されるでしょう。問題の核心は、出会ったものに対する愛情を伴う判断です。安っぽい感情の問題ではないのです！感情は何も動かしません。わたしたちの自己を動かすのは、ようやく見つけた心に一致するものに対する愛情を伴う判断であり、それゆえ、どうしても失いたくないと思うものです。もしそれを見つけたのなら、それに従うかどうかの決断は、わたしたち次第です。もし見つけていないのなら、詩人のアントニオ・マチャドが言うように、《大いなる沈黙の岸で》⁵どんな微かなしるしをもとらえるために、目を見開いて待つしかないのです。

《“結局、継続的に‘しごと’をした人とそうでない人の違いだ”とジュッサーニがあなたに言った言葉を昨日思い出していましたね。ジュッサーニの言う“継続的に‘しごと’をする”とはどういうものか、もう少し詳しく教えてください。‘しごと’を継続的にするために何が助けとなりますか。》

ジュッサーニがヴェネーゴノの神学校を後にして高等学校で宗教を教えるようになった目的は、若い人たちに《信仰が人生・いのち・生活からくる要求に関連がある》ことを認識させるためでした。ベルシェ高等学校の入り口で3段の階段を上った時、これが彼の目的だったのです。彼は初めから《最初に家庭と神学校で受けた教育によって、その後は自分自身の熟考によって、わたしは現在の経験において見出され、裏付けられ、そしてこれによって確認され、必要に答えるために役立つ信仰でなければ、すべて、すべてが反対を主張する世の中では持ちこたえられないと確信していた》⁶とはっきり言っていました。

ジュッサーニは、この目的はある道順、方法によってのみ達成することできると確信していました。彼が提案したのは、基本的には一つの方法です。彼は、ベルシェ高校で出会った若者たちが受けた教育、それ以前に告解をしに訪れる人々を通して把握していたある種の信仰継承の方法が、今では効果がないことに気づいていたのです。信仰を伝授されて間もなく、その若者たちはもはやキリスト教に対する興味

⁴ フィリピの信徒への手紙 3,8-9

⁵ A. Machado, «S'è addormentato il mio cuore?», LX, *Solitudini (1899-1907)*, in Id., *Tutte le poesie e prose scelte*, Mondadori, Milano 2010, p. 107 逐語訳

⁶ L. Giussani, *Il rischio educativo*, op. cit., p. 20 逐語訳

を失っていました。彼は、若者たちの信仰への導入の仕方に問題があること、つまり問題は大人にあることに気づいたのです。わたしたちの友人であるルーチョ・ブルネッリの記事、《“空の教会”の危機は昔に始まっている。教会が満杯だった時に》⁷とあるように。ジュッサーニは、教会がまだ満杯だった頃に教え始めました。彼は、信仰が生活に密着したものでなくなっていること、そのために人々の関心が薄れていることが問題であると理解したのです。キリスト教を本来の姿、つまり人生の出来事として再び提案することが必要でした。キリスト教を言説や倫理に矮小化することは、実際に人間の期待に当時も今も応えることができず、生の人間の興味を呼び起こすことはできません。ですから、《現代の人々を動かすことができるのは、人間的な衝撃である。イエスが目を上げて、『ザアカイ、すぐに降りてきなさい。わたしはあなたの家に行く』と言った、最初の出来事をこだまさせる出来事である》というジュッサーニの箇所を引用したのです。

しかし、まさにこの出来事との出会いから、確認をする歩みの必要性が生じ、可能となるのです。一方で、教会が《いのちであり、いのちを差し出さなければならない》ため、ごまかすことができないとすれば、他方で、人間もごまかすことはできないとジュッサーニは言います。《開け放たれた心構えが必要となる本物の歩みが彼を待ち受けている。》⁸これが、わたしが‘しごと’と呼んできたものです。ジュッサーニが提案した歩みを受け入れなければ、わたしたちは持ちこたえることができないでしょう。その歩みとはどんなものでしょうか。

人生には様々な問題が生じ、人はそれぞれ自分の生きる環境から示唆される方法、仮説を用いてそれに取り組み、何らかの形でそれを自分のものとし、その適否をその場で確認するのです。わたしに起こったことです。1970年代、わたしは自分の召命や司祭としての使命に関連する人生における問題に、自分が受け取った方法、仮説を用いて取り組もうとしましたが、早い時期に、わたしに伝えられたそれらの方法では不十分であることに気づきました。なぜなら、何か腑に落ちないものがわたしのうちにずっと残っていたからです。1970年代の終わり、この時期に運動に出会ったのです。

自分の出発点にあった仮説では実現できなかったことが、ジュッサーニという人物において実現しているのを目の当たりにしたことは、わたしにとって非常に重要なことでした。当時は様々な事情によって、彼と頻繁に会うことも親密な関係を築くこともできませんでした。わたしに起こったことは、感情的な反応ではなく、異なるものへの明確な認識でした。それ以来、あの出会いを抜きにして、自分が体験したことについて語ることはできません。すでに話したように、わたしが運動の国際的な集まりに参加し始めた頃、皆の多くと同じように遠くからしか彼を見ることができませんでした。現実に向かうジュッサーニの姿勢がわたしの中に引き起こした衝撃を覚えています。わたしは《ここには何か違うものがある！》と自分に言っていました。その後、わたしはその方法を学び、そのまなざしを自分のものにする以外に望むものはありませんでした。

彼の主張のポイントは、経験でした。ジュッサーニは、わたしの人生に起こることと、わたしの心の奥底にある要求を照らし合わせるよう、常に促したのです。この照合をするというのは、《わたしは学校で教え始めた当初から「わたしがここにいるのは、君たちがわたしの伝えることを自分の考えだと判断す

⁷ 記事は《サンピエトロ広場が緑のベレー帽で溢れかえっていた50年代、ロンバルディア出身のある若い神父が学問（と教会）のキャリアを捨てて、ミラノでもっとも世俗的な公立高校で宗教を教える決心をした。列車で移動する際、若者たちと話していて、ルイジ・ジュッサーニと言うその神父はキリスト信仰が彼らの生活からいかにかけ離れているかを実感した。キリスト教の伝統が親から子へと何世紀にも渡って伝えられてきた、ほとんど自然なメカニズムに何か支障が起り始めていたのだ》と続く。L. Brunelli, "Le chiese vuote e la fantasia di Dio", *L'Osservatore Romano*, op. cit., p. 9 逐語訳

⁸ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, op. cit., p. 270 逐語訳

るためではなく、わたしがこれから話すことを判断するための真の方法を教えるためだ。これから話すことは、二千年という長い歴史の結果による経験である」といつも言っていた》⁹と、彼の提案を特徴づける方法に属します。何度も繰り返していることですが、ジュッサーニはこうして人間としてふさわしい歩みをするために、わたしに道具を手渡してくれたのです。キリストは、キリストの出来事は、わたしたちの経験の判断に委ねられていると彼は言っていました。¹⁰

この「経験」を基準とすることは、わたしにとって決定的でした。間違った時にも、必ず何かを学ぶことができました。ある友人が自分の研究所の廊下で、見るからに落ち込んでいる研究仲間に出くわし、どうしたのかと聞くと、《実験が失敗したから》という答えが返ってきたと話してくれました。すると彼女は《実験は実験に過ぎないものよ！》と言い返したそうです。つまり、たとえ失敗しても、真理に近づくために必ず得るものがあり、常に何かを学ばせてくれるのです。このように経験をしながら、自分の物事への向き合い方が適切かどうか、それが自分のうちにある要求に答えているかどうか日々注意を払っていました。そして、ジュッサーニに会う機会に、彼の物事への向き合い方と自分の向き合い方を比較し、彼の中で起こることと、自分の中で起こることを確認したのです。わたしは、明らかな違いを、自分が望む新しさを認めざるを得ませんでした。

福音書を見ると、イエスが弟子たちに対してすることです。新しさを感じさせ、もはや決して離れることができなかつた「ある方」に出会うまで、彼らは、イスラエルの民に属することで得た仮説に従って人生に起こる事柄に向き合っていました。その出会いの時から、「その方」と一緒にすべてのことに立ち向かったのです。CLの大学生会と共にした「聖なる三日間」で、わたしはかつてないほど、最初からイエスと関わっていたペトロのことを思いました。《『彼』はペトロの全霊を満たした》¹¹と、ジュッサーニはペトロのイエスとの最初の出会いを回想しながら言います。ペトロが冒すリスク、そしてわたしたちが冒すリスクは何でしょうか。目の前に立っている「方」が誰なのか、もうわかっていると思うことです。イエスは弟子たちに《人々は、人の子のことを何者だと言っているか》と訊ねました。《『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。》《それでは、あなたがたは？》ペトロが一番に《あなたはメシア、生ける神の子です》と答えます。《よくぞ言った、ペトロ！これはあなたの脳みそから出たのではなく、あなたにこのことを現したのは、わたしの父なのだ。》そのすぐ後、イエスは《御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。》すでに理解し、イエスが誰であるかを知っていると思っていたペトロは、《主よ、とんでもないことです。》イエスは《引き下がれ。神のことを思わず、人間のことを思っている》¹²と言いました。

ペトロの全生涯は、現実における自分のあり方とキリストのあり方、自分の尺度とキリストの尺度を比べ続けることによって特徴づけられているのです。この継続的な照合するという‘しごと’がペトロの戦いだったのです。彼がイエスに従ったのは、まさに出会いで経験した自分の心との一致のためだったからです。いつでも、どんなときでも、イエスが提示することを理解していたわけではありません。たとえば、イエスがエルサレムに行つて死ななければならないということは、「いや、いや、それはあり得ない！」

⁹ L. Giussani, *Il rischio educativo*, op. cit., p. 20 逐語訳

¹⁰ L. Giussani, *Perché la Chiesa*, op. cit., p. 267 参照 逐語訳

¹¹ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 100 逐語訳

¹² マタイ 16,13-23 参照

と、納得できなかったのです。しかし、イエスが彼らの足を洗う場面を、イエスに絶大な情熱を抱いていたペトロが、弟子たちの足を洗おうとイエスが食卓から立ち上がるのを見た時のことを想像してみましょう。そこで彼は、再びイエスとの限りない違いに直面するのです。ペトロにとっては、それはあまりにも度を越えたことだったのです。《いやです！あなたがわたしの足を洗うのですか。》《ペトロよ、わたしがしていることは、今はわからないが、後でわかるようになる》とイエスは答えました。その時点では、理解できなくても、従うことが理性的であるかどうかが問題だったのです。ペトロは、《いや、とんでもない！》と衝動的に繰り返しました。しかし、他の場面でもそうですが、決定的な状況に直面したとき、イエスは誰とも、特にペトロとは妥協しようとはせず、《もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる！》と迫ります。するとペトロは、《そんなふうに言われるなら、足だけでなく、手も頭も！》¹³ともはや抵抗することなく従います。なぜ、彼は受け入れたのでしょうか？それは、イエスと共に暮らした三年間、「彼」の言動と自分の心の必要を絶えず照合した結果、たとえ理解できなくても、あるいはまだ理解できなかったとしても、イエスだけが永遠の命の言葉を持っていることを認めざるを得なかったからです。《あなたから離れて、どこへ行きましょう？》「あの方」への理性に満ちた愛着は、あらゆる自分の理解力のなさ、度量の狭さより強かったのです。

ジュッサーニが提案した継続的な‘しごと’は、高度な学歴は必要とせず、すべての人、ペトロ、あなたやわたしのような人にも可能なものです。それは、特別な「知性」の問題でも、勉学の問題でも、こじつけでもなく、存在する者と自分の心とを、存在する者と日々の挑発に向き合う自分の試みとを、「彼」の尺度とわたしたちの尺度とを絶え間なく照合することです。ペトロにとって自分の試みと、イエスが見て、絶え間なく比べること以上に興味深いものがあつたのでしょうか。もし、イエスがペトロの解釈に抵抗しなかったなら、あるいはペトロが自分のイメージとイエスの言動が合致しない度に立ち去っていたら、最上のものを失っていたかもしれません。ここでこの方法の根本的な問題が出てきます。ある時、ジュッサーニは《運動の深刻な問題、責任者の非常に深刻な問題は、彼らが頭で理解していることを話しはするが、[...] 方法を自分のものにしていないことだ》と強調していました。さらに《考えを方法に置き換えるために必須のこと [...] それをスコラ・デイ・コムニタの第一巻¹⁴を終えた人たちさえ習得していないかもしれないことに恐れを覚えるのだが、[それは] 理性の概念や構造に関わるもの [...]、すなわち愛情である。[...] これは方法のもっとも重要な側面を導く。つまり、愛情（愛着）がなければ人は知ることができないのである。[...] 認識は開かれた目であり、訴えるものがなければ現実は無意味である。目の前の現実の反動のことを愛情（愛着）、*affectus* という。[...] したがって、その方法は、愛情（愛着）という言葉と結びついている。愛情（愛着）は、現実の認識を全うするものである。すなわち、人間の心の特徴づける基本的な要求に一致し、それを具体化する [ここに注意！] 方法を明示するものとしての運動に対する認識を結論付けるのである。心は感情の源ではなく、完全な理性の源である》と続けます。そしてジュッサーニは《なぜその方法に抵抗するのか》と自問します。キリストが心に一致すると強く認識した後、人はどうして抵抗するのでしょうか。なぜペトロは抵抗したのでしょうか。なぜなら、《自由は、剣のように知識（認識）と愛情（愛着）*affectus* の間に入り込み、純粋な認識を強調する（合理主義）か、あるいは純粋な愛情（愛着）（本能主義、経験主義）を強調することによって愛情（愛着）*affectus* を切り離そうとするものである》¹⁵からです。

¹³ ヨハネ 13,6-9 参照

¹⁴ 『宗教心』を指している

¹⁵ «Consiglio di Presidenza. 11 ottobre 1994», dattiloscritto conservato presso la Segreteria generale di CL, Milano. ミラノにおける CL の総事務局

その方法に従うためには、《自分自身を肯定するためには、「他者」を肯定しなければならない》¹⁶という法則に従わなければならない、その法則を尊重しないなら自由は誤りを犯します。出会った人のうちに自身の自己がより完遂される（引用したいいくつかの証言にあったように）ことを見た時、他者を肯定することは理性を放棄することではなく、理性を完全に肯定することであることを理解します。なぜなら、その他者を肯定することは自分自身を肯定することだからです。しかし《継続的なしごと》、つまり自分と出会った存在とを照合することを怠るなら、理解することはできません。もし、ペトロがキリストを肯定しなかったら、どうなっていたでしょう？もし、ジュッサーニに従っていなかったら、わたしたちはどうなっていたでしょう？

《わたしから学ばなければならないことは、ただ一つ、いかに学ぶかということだ》¹⁷とジュッサーニは1978年に言っていました。わたしたちは学ぶこと、継続的な‘しごと’をすることに心を開き、受け入れる心構えがありますか。心の期待に応えると認識した存在に従うのではなく、自分の尺度に従うことで何を得ることができるのでしょうか。そのことについては、自分の経験で確かめることができます。自分の尺度を超えなければ、成長することができず、ペトロを新しい民の始まりの主人公とした人間としての背丈を得ることはできません。イエスが一番に氣遣ったのは、ペトロを生み出すことでした。なぜなら、ペトロがいなければ、何も、まったく何も残らなかったからです！ジュッサーニの大きなひらめきは、ペトロの《はい》と民の発生を結びつけたことにあります。ペトロのように主人公になることは可能なのです。わたしたちがすべきことは唯一「彼」に自分を生み出させることです。

《この愛は、母や父や友達から来るものだと思うのですが、ある時点でキリストが登場するのがよくわからないという女の子の質問に対する答えを、もっと説明してほしいと思います。家族の愛情、子供や孫のことを思うのは、キリストの現れではないのでしょうか。キリスト者ではない人々であっても、互いに愛し合っています。わたしにとってキリストは多くの場合、すぐ剥がれる切手のようなものです。》

《証人を通してのみ、キリストは身近な存在になれるのでしょうか。それは出来事の可能性を狭める危険性ではないですか。秘跡、典礼、聖書による啓示、信仰の確信に至るための個人的な祈りの価値とは何でしょうか。》

若い人が最初の質問をしたら、わたしは《夜寝るとき、お母さんはあなたを愛していると、確信を持って言えますか。複雑に考える必要はありません。彼女があなたにしてくれたすべての事柄を、愛のしるし以外の何かで説明できますか。それとも、彼女の行為には利害関係（例えば、彼女が年老いたときに面倒をみてくれるなど）があると思いますか。あなたへの愛のしるしではないという別の解釈で納得できるものがあれば教えてください。あなたが見るしるしは、あなたには見えない意味、つまりお母さんの愛を指し示しているのです。だけど、あなたが目の前にあるのはしるしだけです》と答えます。そして、《キリスト教の出来事に関しても同じことが言えます。これらは異なるしるしであって、母親から来るしるしとは比較できませんが、躍動は同じです。あなたが特定の人々の中に見た人間性は、彼らが善良で、親

保管の1994年10月11日幹部会議事録及び L. Giussani, *L'autocoscienza del cosmo*, Bur, Milano 2000, pp. 278-279 参照 逐語訳

¹⁶ «Consiglio di Presidenza. 11 ottobre 1994», dattiloscritto conservato presso la Segreteria generale di CL, Milano. ミラノにおける CL の総事務局保管の1994年10月11日幹部会議事録 逐語訳

¹⁷ L. Giussani citato in A. Savorana, *Vita di don Giussani*, Bur, Milano 2014, p. 565 逐語訳

切で、礼儀正しく、寛大である一他に自分で考えてみてください—からだという事だけで説明できるのか、それともあなたには見えず説明できないけれど、見ているものの中に暗示されている何かにあなたを差し向けているのか教えてください》と付け加えます。

これがポイントです。つまり、わたしたちが遭遇したこの仲間には、何かははっきり言えないけれど別の要因があることを認めることです。わたしが見ている人々の行為の結果や、その仲間の中に響いてくる人間性は、わたしには見えなくても、そこにあると認めざるを得ない何かを指していると認めることです。もし、それを排除するとしたら、わたしは自分がしている経験を説明できなくなるでしょう。この仲間の中に、わたしが出会った人々の中に、外ではなく、中に、矮小化できない何かがあるのです！ある人々の生き方、生と死への向き合い方は、わたしには見えない何か神秘的なものを言及しているとしか説明がつかないのです。それを取り除くと、違いの根源を消してしまうこととなります。つまり、先の例で言うなら、しるしで示されている愛を消してしまい、同時にしるしを無意味にしてしまうのです。どんな機械でも愛を感知することはできないし、それを計算するアルゴリズム（互除法）もありません。しかし、だからといって愛がないわけではないのです。子供がいる若い女性を想像してみましょう。彼女が子供に愛を伝えるには、しるし以外に何かあるでしょうか。そして、イエスは、自分が何者であるかを、しるしを用いなくて、どうやって弟子たちに示すことができたでしょうか。そして、わたしたちは過去の思い出ではなく、今現在における主の臨在のしるしを通さなければ、どのようにして信仰の確信に至ることができるでしょうか。

二つ目の質問に移りますが、何か今存在するものがなければ、典礼はわたしたちに語りかけることはないのです。福音書の中にそのことが書かれています。イエスが一緒にいると、弟子たちは聖書の言葉や預言者たちが言ったことをすべて理解するのです。キリストが彼らの目を大きく開き、聖書と予言を理解させるのです。典礼は確かに源ですが、同時にわたしたちの心が常に典礼に対して大きく開かれている必要があるのです。キリストが復活されたと聞いたときに、現代の多くの人がそうであるように、前に引用したブルネリの記事の中にあつたように無関心でいることがないために。わたしたちの信仰の究極的で神秘的な起源は、わたしたちが典礼で記念する出来事であり、わたしたちの理性と自由を絶えず挑発するものなのです。わたしたちの心の中にこそ、起こるすべての出来事はスペースを持たなければいけないのです。

《“死”、“苦しみ”、“悪”、“不確実性”といったドラマチックな状況がいかに希望を挑発するかを示してくれましたが、わたしたちに毎日起こる日常的なことの中で、どうしたら希望を持ち続けられるでしょうか。極端で劇的な経験をしない時には、どうすればいいのでしょうか。》

《良心の呵責や過ちにさいなまれ、主の目が見えなくなり、主の存在を認識できなくなることはよくあることです！確かにこうした状況がわたしの希望に挑戦するものです。》

最初の質問に対する答えはとても簡単で、逆説的なイメージでよく説明しますが、心臓発作か教育かのどちらを取るかです。わたしたちを目覚めさせる劇的な状況を待つことに関して、唯一の選択肢は、希望を生き生きとした状態で保つように教育し、自分の尺度には矮小化できない場所に参加することです。イエスが弟子たちにされたのと同じです。イエスが弟子たちを希望に導いたのは、劇的な状況を通して

ではなく、自分の存在の魅力を通してです。同様に、ジュッサーニは、劇的な状況によってわたしたちを現実や希望に導いたのではなく、わたしたちの内面にあるものを動かした矮小化できない魅力、劇的な状況でそれを得ることはできない魅力によって導いたのです。究極的には、継続的な教育に取って代わるものはありません。なぜなら、ある劇的な状況を乗り越えても、簡単に元の木阿弥になってしまうからです。パンデミックに関しても、何事もなかったかのように劇的な出来事として幕を閉じるリスクをはらんでいるのです。もし、わたしたちの人生が、絶えずわたしたちを挑発しながら、わたしたちを新しくする場所と深く関わっていなければ、日常の繰り返しで息詰まり、無意味な人生に屈しないているのはほとんど不可能なのです。

同じことが良心の呵責についても言えます。あなたやわたしに向かって、自分を裏切った後のペトロに言ったように、《あなたはわたしを愛しているか》¹⁸と問う「方」を前にした時には、わたしたちの自分の愚かさに対する良心の呵責は確かに問題ではありません。ペトロは主を否定し、人が犯しうる最大の過ちを、大々的に、皆の前で犯したのです（わたしたちの小さな、あるいは大きな過ちに対する呵責とは次元が違います！）。ここで、問題の核心が浮き彫りにされます。ペトロは、キリストに「はい」と答える前にそのことをあらわにしています。弟子たちは漁に出ましたが、何も獲れませんでした。海岸から《舟の右側に網を打ちなさい》と誰かが叫びます。大漁だ！ 鋭いヨハネが《主だ！》と叫ぶと、ペトロは直ちに湖に飛び込みます。¹⁹ ペトロのキリストに対する愛情は、良心の呵責よりも強かったのです。イエスはまだ《わたしを愛しているか》と聞いてはいませんでしたが、ペトロの愛情は彼の心の奥底に深く根ざしており、三度の否定さえも彼からそれを引き抜くことはできなかったのです。「存在」と愛情がそれらよりも大きく優位になる時だけが、良心の呵責を克服できます。ジュッサーニはペトロの「はい」について語る中で、わたしたちには「はい」と答える「存在」が必要なのだと言っています。

人は自分がどんな過ちを犯したとしても、あるいは犯すかもしれないにしても、もはやキリストから自分を切り離すことはできなくなるほど、キリストに愛着を持つようになるのです。

¹⁸ ヨハネ 21,15

¹⁹ ヨハネ 21,1-7

目次

導入	3
第1章	
《この危機より最悪なことは、これを無駄にしてしまうという悲劇のみである》	5
1. 現実との衝突	5
2. 起ったことの前での態度	7
3. 判断の基準	11
4. 自己からの逃避	14
第2章	
わたしたちは期待である	19
1. 根絶不可能な事実	19
2. 自己への愛情	21
3. 《もしもあなたが天を裂いて降りてきたならば》	25
第3章	
予測不可能な衝撃	28
1. 《予期せぬことが唯一の希望である。しかし、そう言うのは愚かだと言われる》	28
2. 予期せぬことが起きたという人がいる	32
3. キリスト教の事実は矮小化不可能	34
4. 経験と心の基準	38
第4章	
希望の花	42
1. 確信の必要	42
2. 信仰の確信は、希望の確信の種	53
第5章	
希望を支えるもの	59
1. 道のりの苦勞	59
2. いと高き神のすまい	62
3. 希望の場	64
4. その場を見出す（見分ける？）にはどうすればいいのか	67
5. どうしたら他の人の中に見るものを自分のものにできるのか	70
第6章	
困難な状況下での希望	77
1. 裏切らない（失望させない）希望	77
2. 人々の希望を支える	85
質疑応答	90

本書の中で、コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの兄弟会の会長は、不確実性に支配されたこの時代に最も多い質問の一つである《希望はあるのか》という問いに立ち向かいます。現実の厳しさは、人間のうちにある要求すべてを浮かび上がらせました。このようなドラマチックな時代であってこそ、一人ひとりの心は部分的な答えに満足することなく、挑発に見合った真のものを望み叫ぶのです。

《予期せぬことが唯一の希望である》とモンターレは言いました。歴史上にこの予期せぬ出来事の告知が響き、初めてイエスに出会った人々の心を揺れ動かしたのです。それ以来、希望の種は世界に蒔かれ、人々の心に根を張り続けているのです。そうした人々に出会うことによって心は再び燃え、蘇ります。そして自分のうちに《不思議な前向きさ》と、現在の経験に基づいて悪やいたみ、死にさえも屈することのない大胆さを見出すことができるのです。

JULIÁN CARRÓN は 1950 年にナバコンセホ（スペイン）で生まれる。1975 年に司祭に叙階され、マドリードのサン・ダマソ大学で聖書学の教授を務める。2004 年にコムニオーネ・エ・リベラツイオーネ運動の指導を共に担うようドン・ジュッサーニに呼ばれ、ミラノに移る。2005 年 3 月 19 日より、コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの兄弟会会長を務める（2021年9月まで）。2004 年度、ミラノのカトリック聖心大学で神学部の教鞭を執る。2015 年には『*La bellezza disarmata*（無防備な美しさ）』、2017 年には『*Dov'è Dio?*（神はどこにいるのか）』、2020 年には『*Il risveglio dell'umano*（人間の目覚め）』、『*まなざしの輝き*』、『*Educazione. Comunicazione di sé*（教育、自身を伝える）』を執筆。

表紙の絵：フィンセント・ファン・ゴッホ、ライラックの茂み、1889年。エルミターズ美術館、サンクトペテルブルグ、ロシア。© Foto Scala, Firenze